# 『Master-Slave』
## 「awakening」

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第１章

　彼は、殺風景な部屋の中、唐突に目を覚ました。
　無表情な部屋の中、無表情な天井が、自分を見下ろしている。
「つ……」
　上体を起こそうとして、彼は、額の左側に軽い痛みを感じた。思わず手で押さえると、粗い布の感触がある。どうやら包帯を巻かれているらしい。となると、ここは病院か何かの病室ということだろうか。
「ご主人様！」
　あたりを見回そうとした彼の視界に、少女の顔が飛びこんできた。
　丸顔の、あどけない顔である。全体に整った顔立ちで、口や鼻はちまちまと可愛らしく、大きな目はやや垂れ気味だ。「美女」と言うより、「美少女」という言葉がしっくりする顔である。長めの髪を頭の両脇で結んで垂らしている、俗に言うところの「ツインテール」が、その幼い顔に妙に似合っている。
（ごしゅじんさま……？）
　彼は、日常生活ではとんと聞くことのないその呼びかけに、少し面食らった。しかし、部屋にこの少女と二人きりであるところを見ると、どうやら彼女の言う「ごしゅじんさま」とは自分のことらしい。
「ご主人さま……よかった……よかったぁ……」
　涙声でそう言いながら、少女は彼の胸元に抱きついた。病院着の胸の部分が、熱いものでじわーっと塗れる感触がある。さらには、彼の腹の部分に押し付けられた少女の胸が、その幼い顔に比べ、アンバランスなほど豊かなふくらみであることが感じられた。
　呼びかけようとして、彼は、この少女の名前を知らないことに気付いた。
「あの……」
　彼がまず思ったのは、人違いではないか、ということだった。どんなに頭の中を検索しても、この自分の胸の中でしゃくりあげている少女に該当する人物が思い当たらない。「ご主人様」なる呼びかけに関しても、それは同様だ。無理に思い出そうとすると、頭がひどく痛む。
　しかし、「君は誰？」という問いを投げかけるには、少女の様子は深刻過ぎた。
「目が覚めたんですね、ユウキさん」
「あ……！」
　職業的な笑みをたたえた看護婦の声に、少女はあわてて身を引いた。パイプ椅子の上で真っ赤になって、小さな体をさらに小さくちぢこませる。しかしその姿勢だと、両腕に挟まれた胸の大きさが、いやが上でも強調された。
「ユウキさん、お加減はいかがですか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　思わずその胸元に見とれている彼に、病室に入ってきた若い看護婦が訊いてきた。しかし、彼はユウキという名前にきちんと反応できなかった。まるで知らない名前なのだ。まして、自分の名前であるという意識など全くない。
「え、と……」
　自分の名は、ユウキではない、と言いかけて、彼は口をつぐんだ。
（俺……なんて名前だっけ……？）
　頭痛――と言うより、頭の中をぐるぐると血液が旋回するような感覚が、彼の意識をさらに混乱させる。
「どうしました、ユウキさん？　傷が痛みます？」
「いえ、そうじゃなくて……」
　少女と看護婦が心配そうに見守る中、彼は額に左手を当てたまま、うつむいた。
（俺は……誰だ……何でここにいるんだ……？）
　自分の体が底無しの沼にのみ込まれているような不安の中で、彼は、自分が記憶を失っているのだということに気付かされつつあった。

---

　数日後。
　戻らない記憶という空白を抱えたまま、彼は見知らぬ自宅に戻った。
　そこは、駅からかなり離れた場所にある、丘の中腹にある建物だった。
　大きな庭の中にある、古びた屋敷である。「屋敷」や「舘」という名前がぴったりくるような、背の高い、洋風の建築物だ。実際に用いられているのかどうか分からないが、煉瓦造りの四角い煙突までそこにある。
　とりあえず、病院で教えられた自分自身の情報を頭の中で反芻した。
（名前は、結城遼。二十三歳。同居の家族なし。職業は、店舗経営……）
　「はるか」なんて、女みたいな名前だと思ったが、どうやらそれが自分の本名らしい。
　医者は、遼の記憶喪失が、頭部に強い衝撃が加わったことが原因のものだと言っていた。ただし、根本的な原因が精神的なものか、それとも器質的なものかは分からないため、何かの拍子に記憶が戻る可能性もある、とも言った。
（つまりは、このまま一生、記憶が戻らないことも充分ありうる、ってことか）
　皮肉げに、遼はそう思った。
「ご主人様、お昼、どうします？」
　病室にいた少女が、遼にそう訊いてきた。
　自分のことを「ご主人様」と呼ぶこの少女は、槙本由奈と名乗った。「ゆな」ではなく「ゆうな」と伸ばすのだそうだ。どうやら、自分の家の住み込んで家政婦をしているらしい。しかし、家政婦をしているからといって、遼のことを「ご主人様」と呼ぶことの説明には、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

あまりならない。
（あだ名か、何かなのかな……？）
　とりあえずは、遼はそう思って納得することにした。
「何か、軽いものがいいな」
「分かりました」
　そう言いながら、由奈はにこりと笑った。笑うとますます顔立ちが幼くなる。本人は 18 歳だと言っていたが、下手をすると中学生くらいに見えた。身長も、150 センチあるかないか。やや長身の遼の胸元くらいに、ちょうど頭が来る。
「あの、ご主人様……」
　遼に背を向け、屋敷の扉の鍵を開けながら由奈が言った。
「この家を見て、何か思い出しません？」
「……いや、ゴメン。何も……」
「あ、いいんです。無理に思い出そうとしなくても」
　由奈は振り返って、小さな手をパタパタと振った。
「それに、家の中のものを見れば、何か分かるかもしれないし……」
　そう言う由奈の顔が、ちょっと意味ありげに見えたが、遼は気にせず答えた。
「そうだね」
「えと、とりあえず、家の中、案内します」
「ん」
　重そうな扉を開け、靴のまま屋敷に入る由奈の後ろから、遼がついていく。床に敷いてあるのは、古そうではあるが、高級品であることが一目で分かる毛足の長い絨毯だ。どうやら、屋敷の中も純洋風のようだ。もしかすると大変に由緒ある建物なのかもしれない。
　玄関に通じる一、二階ぶちぬきのホールと、そのホールから伸びる、こった曲線で構成された階段。革張りのソファーが置かれた客間。食堂と厨房。そして書斎というのが一番ぴったり来る部屋……。
「ここが、ご主人様のお部屋です」
　そう言われても、何の感慨もわかない。分厚い板で作られた重厚な机と、壁と一体化している巨大な本棚。いくつかの、やはり革張りのソファー。少し旧式の大型テレビやビデオなどのＡＶ機器が、部屋の片隅のラックの中に収められている。
「奥の扉は、寝室に通じてます。あと、こっちの扉はお風呂とおトイレに……」
　どうやら、主要な部屋には別々にバスとトイレがあるらしい。何だか、洋モノのホラー小説に出てくる高級ホテルのようだ。
　遼は、この屋敷の中に入って、ますます自分がどのような生活をしていたのか分からなくなってきた。

「俺……ココで暮らしてたんだよね」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　食堂でトーストをかじりながら、遼は目の前の由奈に訊いた。二人には広すぎるテーブルの上に、二人分の軽い食事がのっている。
「はい」
「一人で？」
「あたしが、住みこみでお世話してました」
　そう言う由奈は、どこか寂しそうだ。自分のことを忘れられているのだから、当然といえば当然だが。
　しかし、遼はあえて、自分と由奈の間がどれだけ親密であったか、訊こうとはしなかった。代わりに、記憶を失う以前の自分に呆れたかのように溜息をつきつつ、言う。
「お世話って……病人じゃあるまいし」
「えっと、まあ……」
　由奈が、何だか曖昧な表情をする。
「ところで、家族はいないって話だったよね」
「一緒には、暮らしてませんでした」
「と言うと？」
「年の離れた妹さんと、あと弟さんがいます。でも、ご両親は、もう亡くなったとか……」
「兄弟とは、別居してるんだ……何か事情があったのかな？」
　自分のことを、まるで近所の噂話をするかのように訊いてしまう。
「分かりません。妹さんや弟さんとは、お母様が違うって話を聞いた事がありますけど……」
「ふーん」
　遼は、小さく唸った。どうやら、自分の家庭は思った以上に複雑そうだ。
　と、唐突に、遼はあることに思い当たった。
「あ」
「ど、どうしたんですか？」
　思わず声をあげた遼に、由奈が丸い目をさらに丸くする。
「いや、俺、どうして頭ケガしたか、医者に訊いてなかった……」
　うかつと言えばうかつだった。記憶喪失ということにとらわれすぎたのか、ケガの原因を訊き忘れたのだ。
「……知ってる？」
　そう言いながら顔を向けると、由奈はふるふるとかぶりを振りながら、答えた。
「詳しいことは、あまり……」
「ふーん。何かの事故だったのかな？」
「……」
「それとも、誰かに殴られたとか？」
「……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

由奈は、うつむいて何も答えない。どうやら、隠し事が苦手らしい。
（こっちの事情も複雑そうだな……）
遼は無理に訊かず、そう思うだけにとどめた。後で医者に訊けばいいと考えたのだ。

---

アルバムに写っている自分の顔は、いつも仏頂面だった。
今現在も、鏡の中に見出すことの出来る顔だ。間違いなく自分の顔である。今もそうなのだが、どういうつもりか、両目が隠れるほど前髪を長く伸ばしている。着やせするたちなのか、写真の中の自分は、自分で分かっている以上に痩せて見えた。
しかし写真の少ないアルバムだった。
それに、家族揃った写真はほとんどない。いや、そもそも、人物が写っている写真が少ないのだ。家族の中で誰かが趣味にしていたのか、風景写真がほとんどなのである。それでさえ、あまり多いとは言えない。
アルバムには、何人かの老若男女が登場しているのだが、キャプションも何もないため、誰が両親で誰が弟妹なのかさえ、見当がつきにくかった。
（多分、これが親父で……これが、妹かな……）
なんだかキツい目をした壮年の男と、セーラー服の少女が、こちらを睨むように見ている。切れ長の目と大きく黒々とした瞳が、遼自身の前髪に隠されたそれとよく似ていた。少女は黒い髪を頭の左側でまとめ、垂らしている。可愛いというよりは美人に属する顔のようだが、まだ幼さが残っていた。中学入学の記念写真らしい。
その写真を最後に、アルバムは空白のページが続いていた。
（一番新しい写真が、これか……）
写真そのものは、まったく退色していない。ただし、最近の写真はいくら時間が経っても色落ちなどしないから、そのことだけで、どれくらい前の写真かを知るのは難しかった。
遼は、溜息をつきながらアルバムを机の上に投げ出した。午後一杯、自分のもののはずの書斎を探して、ようやく一冊だけ見つかったアルバムだった。あと、書棚にあるのは、大判の画集や写真集が主だった。
しかし、それらを見ても、遼の脳内には何の記憶も蘇らない。あえて言うなら、写真の中の父親らしき口髭の紳士の顔を見るたびに、言いようのない不快感を覚えるだけだった。
（父親とは不仲だったのかな……）
しかし、程度によるが、それは一般的な親子の関係だと言える。少なくとも、記憶を取り戻すための手がかりになるようなことではない。
大きな窓から、赤い西日が差し込んでいた。古ぼけた部屋全体が、秋の夕焼けの色に染まっている。
ふと、遼は由奈のことを考えた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

屈託なく笑うと、ひどくあどけない顔をする、自分の同居人。
彼女の言葉や態度に、単なる好意以上のものを感じるのは、自意識過剰だろうか？
しかし、記憶を失った自分がどう接するのが、由奈と自分自身にとって一番いいことなのかは、さっぱり分からない。
（……考えるだけ、ムダか）
遼は、ちょうどテレビの前にしつらえられたソファに移り、リモコンでスイッチを点けた。別に見たい番組があったわけではないが、気晴らしをしたかったのだ。
しかし、テレビの画面は砂嵐を映すだけで、どのチャンネルも満足に映像を提供しない。アンテナに接続していないのだ。このテレビは、専らビデオの再生にのみ使っていたらしい。
さして失望もせず、遼はビデオデッキを確かめた。数本のテープが脇に乱雑に置かれ、デッキの中にもテープが入っている。
遼は、何の気なしにビデオの再生ボタンを押した。
わずかに画面がちらついた後、映像が安定する。
「……！」
最初、遼はその光景が何を映したものなのか、きちんと把握できなかった。

---

暗い部屋の中、何かほの白い物体が浮かび上がるように、画面の中で佇んでいる。
それは、全裸の槙本由奈だった。
いや、正確には全裸ではない。黒い革のような素材の、下着のようなものをわずかに身につけている。
しかし、それは到底衣服の用をなしていなかった。上半身に着けられたコルセットのようなものは、両の胸の部分が丸く開いており、そこから乳房がこぼれ出ている。服の上からもうかがえるほどの巨乳は、そのコルセットによってさらに強調され、痛々しいほどだ。
一方、下半身にあるのは、革のベルトで構成された、貞操帯のような代物だった。それは、正面から見るとちょうどＶ字型に、彼女の最も秘めやかな部分を隠している。無論、恥丘はさらけ出されており、幼い顔相応に薄い恥毛まで見て取れた。
確かに、由奈だった。
手錠か何かで拘束されているのか、手を後ろに回したまま、ふらふらと体を揺らしている。両足は内股に閉じられ、その白い太ももは、もじもじとすり合わせられていた。そんな姿勢で倒れないでいられるのは、天井から吊るされている銀色の鎖が、彼女をいましめる淫靡な衣装のどこかに接続され、その体を支えているからのようである。
由奈は、何かを訴えかけるかのような目で、自らの姿を映すカメラの方を向いていた。その柔らかそうな頬は上気し、大きな瞳が潤んでいる。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼は、絶句していた。
早い話が、それはＳＭを題材としたＡＶだった。しかし、その中に知り合いの少女が出ているとあっては、単なるＡＶとは言っていられない。
しかも彼女は、今の遼にとっては知り合って数日の存在でしかないが、記憶を失う前には一つ屋根の下に暮らしていた少女なのだ。
「ご、ごしゅじんさまぁ……」
鼻にかかった声で、画面の中の由奈が、カメラの方向に呼びかけた。大した音量ではなかったが、その声は遼の体をびくっと震わせた。
どうやら由奈は、撮影者に声をかけたらしい。
（まさか）
遼の心臓が、ずきりと高鳴る。
（まさか……）
疑念は、あっさりと現実となった。
カメラの方向から、全裸の男が現れたのである。
臆する風もなくその体をカメラにさらし、由奈が画面上で隠れてしまうのを避けるように、脇から回り込む。股間のモノには、いっさいモザイクは入らず、無修正だ。
遼だった。
伸ばした前髪でその目を隠してはいるが、間違えようがない。自分自身である。その口元には、自分でもイヤになるような薄笑いが浮かんでいる。
そんな遼の顔に、由奈はすがるような視線を投げかけている。
画面の中の遼は、由奈の背中に回り込み、そのたっぷりとした乳房を後ろからすくいあげた。
「はぁン……」
それだけで、由奈はうっとりしたような吐息を漏らした。
遼は、薄笑いを浮かべたまま、由奈の左の耳元に口を寄せた。そのまま、首筋を唇でなぞり、耳たぶをしゃぶりながら、何かをささやく。
目を閉じ遼の愛撫を受け入れていた由奈が、こっくりとうなずいた後、口を開いた。
「あたしの名前は……ユウナって言います……。今、ユウナの、お、おっぱいを揉んでくださっている方の……イヤらしい、め、牝奴隷です……」
どうやら、画面の中の遼は、由奈に自己紹介を命じたらしい。
羞恥のためか、さらに顔を赤くしながら、つっかえつっかえ、由奈は続ける。
「……今、ユウナの、あそこには……バ、バイブが、入ってます……んあああああン……」
最後の方は、意味をなす言葉にならない、遼が、由奈の乳首をひねり上げたのだ。
「んあ、ああン……か、感じる……ユウナ、ちくびがかんじちゃいますぅ……」
眉を寄せ、悩ましげな顔で、甘い声をあげる由奈。
「いたいの……いたいのに感じちゃうんです……ユウナ、ヘンタイだから……ああァっ」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈の声の質が変化した。遼が、由奈の体内に入っているというバイブを、何か操作したらしい。
「ふあ、あああっ。い、いい。イイの。あ、あそこが……イイ。イイよお……」
　高い、まだ子供のような声で、由奈は快感を訴えた。まるで少しでも快楽を引き出そうとするかのように、腰をはしたなく前後左右に振る。
　遼の両手は、再び由奈の乳房を弄んでいた。指が喰いこむほどにもみしだき、乳首を転がし、まるで搾乳するかのように下に引っ張る。そのたびに由奈の白い胸には赤い跡が残るのだが、いっこうに形は崩れず、ぴんと立った乳頭を上に向かせている。
　乳房だけではなく、遼の両手は、由奈の体の上を自在に這い回った。そのたびに、由奈は体を震わせ、いやいやをするように顔を左右に振る。
「ンあああああああっ！」
　由奈が、ひときわ高い声で鳴いた。
　遼が、由奈の股間のＶ字型のベルトを両手で持ち上げたのだ。ベルトはきつく股間に食い込み、その奥にあるバイブを、さらに由奈の内部に埋めこんだらしい。
　由奈が、痛みと快感に顔をのけぞらせる。
　のけぞった由奈の唇に、遼が唇を重ねた。身長差があるため、そういう姿勢になるのだ。
　遼の口が由奈の唇を吸い、舌が口腔をなぶる。キスという甘酸っぱい言葉で表しきれない、唇で唇を侵し、舌で舌を蹂躙し、唾液と唾液を交換する、そういう行為だ。
「ンンンンンンンっ！」
　由奈が、くぐもった悲鳴をあげ、遼の腕の中で体を硬直させた。
　ぴくん、ぴくんと、汗と体液にまみれた体が震え、乳房がゆれる。
　そして由奈は、がっくりと頭をうなだれ、背後の遼の体にその身を預けた。まるで熱病患者のように息が荒い。
（イった……のか……？）
　気がつくと、画面を見ている遼の息も、同じくらい荒くなっている。
「ご・しゅ・じ・ん・サ・マ」
「わあっ!!」
　いきなり耳元で言われ、遼は文字通りソファの上で飛びあがった。
　驚くほど近くに、由奈の顔があった。現実の、画面のこちら側の由奈だ。この屋敷の中での制服なのか、紺色のワンピースに、白いエプロンドレスという、まるで前世紀のメイドのようないでたちだった。ご丁寧に、フリルのついた布製のヘアバンドまでしている。
　しかし遼は、そんな由奈のいかれた服装について口を出せるような状態ではない。完全に、頭の中が真っ白になっているのだ。
「そのビデオ、見ちゃったんですね……」
　その幼い顔に似合わない、妙に艶っぽい目で遼の顔を右側から覗き込みながら、由奈が言った。

Yeon PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

「しかも、すごい真剣に……由奈が入ってきたのに気がつかないくらい……」
「……」
　絶句したままの遼の右の太腿に、由奈は右手を伸ばしてきた。
　そのまま手は伸び、愛しげに、遼の股間をまさぐる。当然といえば当然のことながら、遼のそこは狭苦しいジーンズの中で痛いほどに勃起していた。
「やっぱり、おっきくなってる……」
　言いながら、股間から手を離さず、由奈が遼の前に回り込んだ。
　そして、そのまま遼の両足の間の絨毯に膝をつき、ジーンズのこわばりに両手を添える。
「ま、槙本さん……」
　からからに乾いた喉で、遼は、やっとそれだけ言う。拒むべきか、このまま受け入れるべきか判断がつかない。それは、記憶を失ってしまっているからだけではなかった。
「ダメ、ご主人様。由奈って、呼んでください……」
　遼の顔をじっと見つめながらそう言い、由奈は遼のジーンズのジッパーを下ろした。そして、ちょっとつっかえさせながら、熱くたぎった欲望を外界に解放する。
　それは、浅ましく血管を浮き出させながら、硬く屹立していた。遼自身あきれるほどの勢いである。
「んふ。ご主人様、ここはもうすっかり元気……」
　嬉しそうにそう言いながら、由奈はぷっくりした桜色の唇を、グロテスクな肉棒の裏側に這わせた。
「……んっ」
　たったそれだけで、遼は声を漏らしてしまう。それほどの、絶妙なタッチだった。
「ご主人様……画面、見て……」
　小ぶりな唇を、竿の裏側に沿って上下に往復させながら、由奈は言った。声とともにその息が、敏感な亀頭をくすぐるのが感じられる。
　遼は、言われるままに、画面に目を移した。
　画面の中の由奈も、遼の股間にその顔をうずめていた。
　天井に滑車でもあるのか、由奈を支えていた鎖は長く伸び、由奈を膝立ちの姿勢で固定している。ちょうどその姿勢だと、由奈の顔は遼の腰のところに位置した。
　カメラからは、横向きの角度である。後ろ手になった由奈の両手に、やはり黒い皮製の手錠がはめられ、さらには鎖とつながっているのが見える。
　画面の中の由奈は、両手をいましめられたまま、遼のペニスに奉仕していた。
　ピンク色の舌を出し、ちろちろと亀頭や陰茎の裏側を舐め、陰嚢を小さな口に含む。だらしなく開かれたその口元からは唾液がこぼれ、遼のペニスと、由奈の顔を汚していた。
「んぷ……ご、ごひゅじんさま……お口に入れて、いいですかぁ？」
　そう、舌足らずな声で言う上目遣いの由奈に、画面の中の遼は鷹揚にうなづいた。
「あぁ、うれしい……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

由奈が、口だけで、遼の肉棒をとらえようとする。しかし、体を拘束されている上、遼が意地悪く体をかわすため、なかなか咥え込めない。
しかもそのたびに、遼は由奈の頭に両手を添え、唾液と粘液にまみれたペニスで由奈の顔をはたくのだ。
「あン……」
その屈辱的な打擲を、由奈は恍惚とした表情で受けとめる。
そんな遊びに飽きたのか、遼はようやく腰を動かすのを止めた。
「んんン……」
うっとりとした声をあげて、画面の中の由奈が、遼のペニスを口に含んだ。
まず、一気に喉奥まで欲望を侵入させようとする。しかし、由奈の唇はペニスの半ばまでしか到達しなかった。
その到達点から、由奈の唇はゆっくりと後退する。由奈の口から這い出てきたペニスは、さらなる唾液にぬめり、何か別の生き物のように見えた。
由奈は目を閉じ、ゆっくりと頭全体を動かしながら、フェラチオを続けた。その間も、もじもじと腰が動いているところを見ると、彼女の中に埋め込まれたバイブは、まだその受持ち場所を責め続けているらしい。
しばらく後、由奈は亀頭のみを口に含んだ状態で、一休みするように動きを止めた。
しかし、たまに隙間からのぞく舌の動きで、由奈の口腔が忙しく遼のそれを刺激しているのが分かる。
「ヤダ……あたし、あんなに一生懸命……」
一時、遼のそれから口を離した現実の由奈が、画面を見ながら言った。その間も、両手は優しく遼の陰茎をさすっている。
すっと、画面の中の遼が腰を引いた。
「あ……」
名残惜しげに言う由奈の唇とペニスの間に、唾液と粘液で作られた銀色の逆アーチが作られ、そして消える。
画面の中の遼は、再び由奈の背後に回った。
そして、鎖の長さはそのまま、ぐいっと由奈の腰を持ち上げる。
「イヤあン！」
抗議にしては、媚が多量に含まれた声を、由奈があげる。しかし、遼は一向に頓着しない。
由奈は、ちょうど深々とおじぎをした姿勢をとらされた。鎖に吊るされた手錠に、かなりの体重がかかっているはずだ。しかし、由奈があまり痛がらないところを見ると、革手錠はさらにコルセットに固定されているらしい。
何にせよ、由奈は前に倒した上体を鎖一本でつるされる格好になった。豊かな胸が、砲弾の形をとり、ゆれる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その由奈の下半身につけられたベルトの金具を、遼が慣れた手つきで外していく。
由奈の股間が、あらわになった。
由奈自身が説明したように、その性器にはバイブが突き刺さっている。外されたベルトと、由奈の内股は、彼女が分泌した液でべっとりと塗れ、きらきらと光って見えた。
「あいっ……ふあああァ〜ん……」
由奈が、気の抜けた悲鳴を上げた。責め続けられ、敏感になったその部分から、ゆっくりと遼がバイブを抜いたのだ。ピンク色の細身のバイブも、当然ぬらぬらとした粘液にまみれている。
「ああ、イヤぁ……ぬ、抜かないでぇ……」
そう言いながらも、由奈はどうすることもできない。せいぜい、その丸いお尻をふるわせるくらいである。
「欲しいのか？」
画面の中の遼が、嘲弄を含んだ声で訊いた。
録音された自分の声を聞くのは、ただでさえあまり愉快なことではないが、それ以上の不快感が、胸の中に生じる。
「ほ、欲しい……ほしいですぅ……ああン、意地悪しないでェ……」
画面の外の遼の思惑とは全く無関係に、由奈は息も絶え絶えになりながらおねだりをする。
「本物と、どちらがいい？」
言いながら、遼は自らのペニスを浅く靡肉にくぐらせ、上下に動かした。
「そ、それ……それが、欲しいです……イヤ、イヤぁ……焦らさないでぇ……」
「もっとはっきり言うんだ」
そう言いながら、入り口近くをかきまわし、腰や太腿、さらには尻の谷間にまで指を這わす。
「ひどいなぁ、ご主人様ってば……」
笑みを含んだ口調で、画面の外の由奈が言った。そして、ソファーに座ったままの遼に向き直る。正確には、遼の股間に向き直ったのだが。
一方、画面の中の由奈は、背後の遼におねだりを続けている。
「い、入れて……オチンチン……ご主人様のオチンチン……入れてください……」
「どこに？」
悪魔のように優しい口調で、遼は重ねて訊いた。
「ゆ、ユウナのアソコです……ああ、その熱いのを……早くぅ……！」
「あそこって？」
「ああッ……お、オマ×コですぅ！　やあン！　ユ、ユウナ、おかしくなっちゃうよーッ！」
とうとう由奈は、子供のような泣き声を上げる。
遼は、みじめに吊るされた由奈の腰に手を添え、一気にその剛直で貫いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あああああああああああぁッ！」
　それだけで軽く達したのか、由奈が体をしならせる。
　しかし、遼は機械のような冷酷さで、抽送を続けた。
「あン！　あン！　あン！　あン！　あン！　んあああああああ！」
　遼の腰の動きに合わせて、由奈が断続的な悲鳴を上げる。艶と媚を含んだ、男の脳をしびれさせる声だ。
　ぱぁん、ぱぁん、ぱぁん、ぱぁん
　という、由奈の尻と遼の腰がぶつかる小気味のいい音が、由奈の鳴き声にかぶさる。
　一方、現実の由奈は、画面の奥の自分の声に急き立てられるように、遼の肉棒を口に含んでいた。
「んっ！」
　さんざ刺激されたあとの柔らかな圧力に、遼は他愛なく声をあげてしまった。
　しかしその声も、快楽を告げる画面の中の由奈の声にかき消されてしまう。
「イイ、イイっ！　イクぅ……ユウナ、またイっちゃう……」
「いやらしいな、ユウナは」
「ああっ、ご、ごめんなさい、ごめんなさいぃッ」
　遼の理不尽な言葉に、由奈は熱に浮かされたような口調で謝った。
「そんなにイキたいか？」
「は、はい……ああンン……イって、イっていいですかあぁ？」
　答える代わりに、遼は指が喰い込むほど強く由奈の腰を抱え、自らの動きをより激しくした。
「んあああッ！　あ、あ、あ、あ、あ、あああああああああン！　イク、イクぅーっ！」
　由奈のつま先が、むなしく床面をすべる。もはや由奈の足はほとんど床に届かず、その体を支えているのは、鎖と、膣内に侵入した遼の男根だけであった。
　由奈が二度目の絶頂に達しても、遼は、その体を解放しようとはしない。
「はああ、はあああああああン……ダメぇ……ダメですぅ……ダメェ……ッ！」
　由奈は、自らの体を満足に動かすこともできず、ただただ、背後から送り込まれる快感に翻弄されるだけだ。
　遼が、腰を動かしながら、由奈のアナルに右手の親指を侵入させているのを、遼の目は捕えていた。その右手が残酷に動くたびに、由奈の悲鳴のトーンが変化する。しかし、由奈の口による容赦のない快楽が、その映像の持つ意味をぼやかしていた。
　遼はとうとう、射精にいたる引き返せない場所まで追い込まれていた。尿道の奥に、液状になった欲望がたまり、沸騰するような勢いでその解放のときを待っている。
　由奈は、その遼の状態を敏感に察していた。
「出してぇ！　ご主人様のミルク、いっぱい、いっぱいください！」
　ひときわ膨張したペニスから脳天まで、電撃のような快美感が遼を貫いた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ドビュッ、という音まで立てそうな勢いで、遼は白濁した液を解き放つ。
一度では収まらず、なんどもしゃくりあげながら、遼のペニスは大量の精液を吐き出しつづけた。
「あああああああンンン……」
どちらのものとも知れぬ由奈の声が、どこか遠いところから、遼の耳に届いた。

---

ふと我に返ると、由奈が、ウェットティッシュで遼の股間のあたりをぬぐっていた。
どうやら、遼の欲望全てを口で受けとめることはできなかったらしい。
ビデオは、すでに停止されている。
「あ、あの……気持ちよかった、ですか？」
目があった由奈にそう訊かれても、遼は言葉を返すことができない。ただ、曖昧に肯くだけだ。
「……ご主人様、怒ってます？」
「え？」
上目遣いで訊いてくる由奈に、遼は訊き返した。
「だって……言いつけでもないのに、勝手にご奉仕なんか始めて……」
「……」
遼は、どう答えていいのか分からない。
「あたし……ガマンできなくて……」
耳まで赤く染めながら、遼の両足の間でうつむく由奈。
「えっと……その、気にしないでいいよ。うん」
遼は、ひどく無内容な言葉だけを、なんとか言ってのけた。
「あ、ありがとうございます」
由奈は、真っ赤な顔のまま嬉しそうに笑って、立ちあがった。そのまま、逃げ出すように、部屋を出て行く。
自分こそ、礼を言うべきだったのかどうなのかという、愚にもつかないことを、遼はぼんやりと考えた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第２章

　朝。
　ぼんやりと遼は、ソファーに身を沈めていた。
　わざとらしいほどの秋晴れの空が、さんさんとした陽光を地上に投げかけている。爽やかさの押し売りとでも言いたいところだ。
　今日は、病院に検査に行かなくてはならない日である。さらに言うなら、主治医にケガの原因を問いただすべき機会でもあった。
　しかし、遼は、起きてからずっと、ひどく億劫だった。
　記憶を失ったままこの家に戻って以来、眠れない夜が続いている。原因は、由奈だ。
　由奈と自分との関係が、どうにもつかみきれないのである。
　あれ以来、由奈と遼は、あまり会話をしていない。遼の方で、由奈と話すことを避けているのだ。そのためか、由奈も、あの屈託ない笑顔をめったに見せなくなってしまった。
　あれと言うのは、無論、今遼が座っているソファーで、由奈が遼のそれを口で奉仕した一件のことである。
　訊きたいことは、山ほどあった。記憶を失う前の遼と由奈の関係はいかなるものだったのか。あのビデオは何のために撮影されたものだったのか。由奈にあのような仕打ちをする遼という男は、どういう人間だったのか。そして由奈は、そもそも遼をどう思っているのか……。
　二人の関係は、尋常の恋人同士というわけではない。それは分かる。
　しかし、それ以上には踏み込めない、というのが、今の遼の気持ちである。さらに、あまりこのことに根を詰めると、なぜか額の傷が痛み、耳鳴りまでするようになる。
　そんなことで悶々としているうちに朝を迎えるというのが、最近の遼の日常であった。
　自然、朝食後には、空あくびばかりするようになってしまう。まさに今も、そういう状態だった。
（いいや……寝ちまえ）
　胸ポケットの携帯電話で、病院の予約をキャンセルし、遼はソファーでうたた寝を決め込むことにした。この部屋にも、机の上にきちんと電話がある。しかし、そこまで歩くのさえ面倒だったのである。
　目を閉じると、ひどく不快な眠りが、ゆっくりと脳を侵蝕して行った。

---

　ドアの音で、遼はぼんやりと目を覚ましていた。
　誰かがこの部屋に入り、さらに、奥の寝室のドアを開けた音だ。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

（由奈、かな……）
　そう思いながらも、遼の意識は未だ半覚醒状態である。まだ日が高いところを見ると、そう長い間寝ていたわけではなさそうだ。
　由奈らしき気配は、鼻歌などを唄いながら、書斎の奥の遼の寝室まで行ってしまった。鼻歌は最近の歌謡曲のようだが、遼の記憶にはないメロディーだ。
　そのときには、遼は完全に目を覚ましていた。
　どうやら、由奈は、ソファーに深々と座って眠っていた遼に、気付かなかったようだ。このままでは由奈をおどかすことになるし、とりあえず昼食の用意はしてもらわないと困る。
　遼は、固くなった肩や背中の関節を軽く動かしながら、自らの寝室に通じるドアに近付いた。
「……あン」
　半開きのドアに手をかけようとして、びくっと体を止める。
「……あア……あッ……あぁン……」
　明らかにその時の声が、遼の耳に届いたのだ。由奈の声である。
　ドアの隙間から、自分のベッドが見える。一人で寝るには大きすぎる、頑丈そうな木製のベッドである。
　由奈は、そこに腰掛けていた。ちょうど、ドアのところの遼が、由奈の左斜め前から覗く角度だ。
　遼の枕を、左手で胸に抱くような姿勢で、由奈はいる。その鼻は枕にうずめられ、目は閉じていた。そして、右手で自らのスカートを捲り上げ、両足の付け根に手を這わせている。
　まるで何かに耐えているかのように、少しずつその眉がたわんでいき、呼吸が荒くなっているのがわかった。
　記憶を失ってるとは言え、それは自分の周囲の情報に関することだけである。遼には、由奈が何をしているのかきちんと分かっていた。
（自分で……してるのか……）
　目をそらすことができない。こちらから見える以上、由奈が目を向ければ、遼のことを見つける可能性が高いのに、遼はそこを動くことができなかった。
「はぁ……」
　由奈は、切なげに溜息をついて、上体をベッドに倒した。
　そして、腰を大胆に浮かして、ショーツを膝までずり下ろす。どうやら、下着がこれ以上ぬれないようにしたらしい。それとも、薄い布ごしでは我慢できなくなったのか。
「んン……」
　まずは、性器全体を覆うように右手を当て、ゆっくりと撫でるようにする。
「ん……ん……んんン……ッ」

Yeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　左腕は、相変わらず枕を抱いている。その手にこめられた力が、だんだん強くなっていくようだ。
　右手の動きも、次第に早まっていく。
「はッ……はッ……はッ……はぁン……」
　いつしか、右手の形が変化していた。中指と薬指が幼そうな割れ目に添えられ、忙しく上下している。自ら分泌した愛液を潤滑油にし、ピンク色の肉襞をこすり、敏感な突起を、包皮の上から刺激していた。
　そして、激しくなった指使いが、偶然包皮を剥き、クリトリスに直に接触する。
「ンあッ！」
　あげてしまった快楽の声に、自分で驚いたかのように、一瞬、由奈の動きが止まる。
　しかし、それは一瞬のことでしかなかった。一度踏み込んでしまった行為からは後戻りすることができず、由奈は人差し指と中指でその敏感な部分を外に出し、中指でいじり始めた。
「ン！　ンンンッ！　ンッ！　ンンーッ！」
　まるで電流のような、痛いほどの鋭い快感に、由奈の小さな体がのたうつ。
　いつしか由奈は、その小ぶりな口で枕カバーを噛み締め、両手を股間に回していた。
　右手の指でクリトリスを挟むようにして刺激し、左手の指をクレヴァスに沈める。
「ンう！　ン！　ン！　ン！　んんんんんンッ！」
　あどけない顔は上気し、耳たぶまで真っ赤に染まっている。眉は切なげにたわめられ、目尻には涙が浮かんでいた。見ようによっては、何かひどい苦痛に耐えているようにも見える。
　しかし、由奈の指の動きは緩まるどころか、ますます激しさを増していた。右手の指は揉みつぶすようにクリトリスを責め、左の中指と薬指はピストン運動で自分自身を追い詰めていた。すでに愛液はスカートを濡らし、腰は誘うように浮かされ、空中で揺れている。
「ふあッ！」
　可愛らしい悲鳴とともに、枕が口からこぼれおちた。由奈が噛み締めていたその部分は、びっしょりと唾液で濡れている。
　もはや、由奈のあふれ出る声を止めるものはない。
「ああッ！　は、あ、あ、あ、あぁアッ！　ああン！　あーッ！」
　すでに、由奈は限界だった。その細い腰は大胆に跳ね、まるで目に見えない男に体を弄ばれているかのようだ。
「あ、い、イク。イっちゃう。イっちゃぅーッ！　ご、ごしゅじんさまーっ！」
　心の中で自分を犯している愛しい相手に絶頂を告げ、由奈はひときわ大きく腰を跳ね上げた。愛液が、まるでしぶくようにスカートと床に飛び散る。
　その姿勢で、何度か由奈は痙攣した。
「はあああぁ……ン」

Yeon PDF Driver Trial
www.zech.com.tw

そして、まるで糸が切れたかのように、ベッドに腰を落とす。
（あ、ヤバい……）
遼は、我に返ってこの場を去ろうとした。由奈が正気に戻れば、ドアの隙間から覗く自分を見つけてしまう。
その時、なんとも場違いな電子音が、ぴろぴろと鳴り響いた。
遼の携帯だ。
「わわっ！」
慌てて声を出し、着信音を止めようとして、腕がドアにぶつかってしまう。携帯の電源を切り、静寂が戻ったときには、ドアはするすると滑って、遼の全身をあらわにしていた。
「ご……ご主人様……？」
上半身を起こし、茫然と遼の姿を眺めていた由奈は、ふと気付いてあわててスカートで自らの剥き出しの部分を隠した。ショーツは、両の膝にまとわりついたままだ。
そのまま、さらに顔を赤くして、うつむき、黙り込んでしまう。
ぽろぽろと、涙がスカートに零れ落ちた。
「あ、あの……」
歩み寄るべきか、それともここを離れるべきか決めかね、遼は立ちすくんでしまう。
「……ごめんなさい……」
由奈は、消え入りそうな声でそう言った。
「え？」
「ご、ごめんなさい……ご主人様……。由奈……ご主人様の匂い、かいだら……ガマンできなくて……」
「……」
遼は、その小さな声に誘われるように、一歩、由奈に近付いていた。
「……ご主人様」
由奈が顔を上げ、うるんだ瞳で遼を見上げる。
「ご主人様……由奈に、お仕置き……してください……」
（……え？）
「お願いです……いけない由奈に……どうか、おしおきを……」
遼には、由奈が何を言っているのか分からない。そもそも、覗きをしたのはこちらなのに、涙を浮かべてまで謝られて、どうすれば事態を収拾できるのか分からなくなっているのだ。
そのせいかどうか、遼は、由奈の申し出に肯いてしまっていた。

ベッドに座った遼の膝の上に、由奈がうつぶせに横たわっている。
由奈の、髪を二つに結んだ頭は、遼から見て左側である。そして、右側にある由奈の下半身は、何も身につけていなかった。白く形のいいお尻が、むきだしになっている。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　遼は、なぜこういうことになったのか、はっきり分からなかった。ただ、ベッドに腰掛けるやいなや、由奈が頬を赤く染めながら、下半身を剥き出しにし、自分の上にその体を投げ出したのだ。
　幼い体型とアンバランスに大きな胸は、遼の太腿に触れ、その形を変えていた。
「由奈……」
　かすれ声で、遼が言う。
「お仕置きして……ご主人様……由奈のお尻、叩いて……」
　確かにこれは、年端もいかない子供が、親に尻を叩かれる姿勢だ。
（しかし……）
　遼はためらった。
　いや、ためらったはずだった。
　ぴしゃっ！
「あン！」
　が、気付くと、遼は由奈のお尻を叩いていたのだ。
　叩いた尻に手を当てていると、きめの細かい肌のそこの部分が、温度をもっていくのが分かる。
　それとともに、遼の頭にも、かっと熱い血が昇っていた。
　ぴしゃっ！
「あン！」
　ぴしゃっ！
「ンあッ！」
　ぴしゃっ！
「あぁーッ！」
　お尻を叩いたときの小気味のいい音と、その感触、そして由奈の悲鳴に、ざわざわと音をたてて全身の血が熱く駆け巡る。
「あひッ！　イタイ、イタイよォ！」
　叩くのを、止めることができない。
「ご、ごめんなさい。許して、許してェ！」
　まるで、父親に許しを乞う童女のような由奈の言葉に、ますます興奮する。
　そしてそれは、由奈も同じようだった。
　叩かれ、悲鳴をあげながら、じっとりとその割れ目をうるませているのが、遼にも分かる。
　遼は、今、自分がとんでもない間違いを犯しているような気になりながらも、自分と、由奈を高めるこの行為を、止める事ができなかった。
　遼は、叩いているその手が痛くなって、ようやくスパンキングを止めた。
「はあああぁァ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

由奈が、ぐったりと体から力を抜いた。
その丸い小さなお尻は、無残にも赤く染まり、まるで血をにじませているかのようだ。
「んン……ッ！」
軽く触れると、それだけで痛みを覚えるのか、体がピクンと跳ねる。
遼は、自分でも説明できない衝動に突き動かされながら、由奈の体を抱え上げ、床に膝をつかせて、上半身をうつ伏せにベッドに横たえた。
そして、自らも床に座り、そっと由奈のお尻にくちづけする。
「ふぁッ！」
我に返り、由奈は背後を振り返った。
赤く火照る尻たぶを冷やそうとするかのように、遼が舌を這わせ、唾液の跡をつけている。
「あン……ご、ごしゅじんさまァ……」
舌と唇が触れるたびに、その部分にじんじんとする熱さが甦る。
由奈はシーツをつかみ、ふるふると下半身をふるわせた。かまわず、遼はその作業に没頭している。
「あァ……あぁァン……それ、きもちイイ……」
舌足らずな声で、由奈が快感を訴える。すでに陰部は驚くほどの愛液を分泌し、太腿まで濡らしている。
そして、その部分に、遼は何の予告もなく口をつけた。
「あーッ！」
まるで果物を二つに割るように両手で開き、クレヴァスを舌でえぐり、ひだひだを唇で挟んで、なぶる。
「あ、あ、あ、はぁン。ごしゅじんさま、ごしゅじんさまァ……ッ！」
遼は尻ごと持ち上げるように腰を抱え、敏感な肉の突起にまで舌を伸ばし、わざと音をたてて肉襞ごと愛液をすすった。
「あはぁア！　あふ、ふ、ふあ、ふあ〜ン。あああああああァ！」
由奈の声がいよいよ切羽詰ったときになって、遼はクンニリングスを中止した。
「あぁ……ごしゅじんさまァ、どぉしてェ……？」
由奈が、恨みっぽい流し目で、遼の方を向く。
遼はそれに答えず、なぜかひどく乱暴な動作で、由奈を仰向けにひっくり返した。
「きゃン！」
そして、ベッドにずり上げるようにして、その小さな体を横たえ、自身もベッドに上がる。
そのまま、遼は由奈にのしかかり、首筋の服のボタンを千切るように外していった。
「え？　あ、あ、痛ァい」
そう言う由奈を無視して、エプロンドレスの胸元から、強引に由奈の巨乳を掘り出す。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

不自由な形でさらけ出されたその大きな乳房は、フリルつきの白いブラジャーに包まれており、いかにも苦しげだ。
　遼はそのブラの隙間に下から手を差し入れ、両手で由奈の胸をもみしだいた。次第にブラのカップが上にずれ、仰向けになっても形を崩さない丸い乳房が、その姿をあらわにする。
　遼は乳房の谷間に顔を埋め、右手で左の乳首をいらいながら、右の乳首に口を近づけた。
「ンあ！」
　由奈の体が跳ねる。遼が、乳首に歯を当てたのだ。
　そして、その乱暴な愛撫を詫びるように、舌でやさしくころがし、唇で軽くしごくようにする。唾液に濡れた乳首が、固く尖っていった。
　さらに遼は、左の乳首も同じように刺激した。
　そして、由奈の小さな体に覆いかぶせていた半身を、ゆっくりと起こす。両手はまだ由奈の胸に置かれ、その指は弾くように勃起した乳首をいじっていた。
「はァ、はァ、はァ、はァ……」
　興奮のためか、由奈の息は荒い。小さな口を半開きにし、白い歯をのぞかせながら、呼吸を繰り返している。
「ご……ごしゅじんさまァ……」
　由奈は、目に涙を一杯に溜め、懇願を始めた。
「お、おねがいです……由奈、もう……もう……」
　遼は、返事をしない。長い前髪のために判然としないが、何かに耐えているかのような、そんな表情で、由奈を見下ろしている。
　そして、ついに耐え切れなくなったかのように、遼の体が不意に動いた。
　由奈のくしゃくしゃになったスカートをめくり、あらわになった割れ目に、剛直を一気に侵入させる。
「ンあァーッ！」
　由奈の体がのけぞった。充分に愛液を分泌しているため、さすがに痛みはないが、きつい挿入であったことには違いない。
　しかし、遼は容赦しなかった。
　顔相応に幼い腰を抱え、まるで、自分の腰を叩きつけるような動きで、由奈を追い詰めていく。
「はァッ！　ス、スゴい、スゴいですッ！」
　由奈は、まるでいやいやをするかのように頭を振った。そのたびに、豊かな乳房がぷるぷると震える。押し寄せる快感が大きすぎて、受け止めきれないような感じだ。
「はひッ！　ひッ！　いいッ！　いあーッ！」
　由奈は、すがりつくように、両手を遼の腕に伸ばした。そして、指が白くなるくらいの力で、しっかりと遼の手首を握る。遼の動きを止めようとしているとも、より深く結合し

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ようとしているとも、どちらともとれる動きだ。由奈自身にも、自分がどうしようとしているのか分かっていないだろう。
　由奈の両足は遼の体によって、大きく開かれている。その膝から先は遼の動きによって大きく振れ、足の指先は、快感のためにぎゅっと握られていた。
「気持ちいいか？」
　遼が、結合して始めて口をきいた。遼自身、意図して発した言葉ではない。
「イイ……イイですゥ……ふあああああああッ！　き、きもちイイの……！」
　うわごとのように、由奈が答える。遼の複雑な表情には、まったく気付かない様子だ。
「いやらしいな、由奈は」
　自分でも意識しない、嘲弄を含んだ声。
「ハイ……あァッ！　由奈は、由奈はイヤラシイんですゥ……。だから、だから、もっとォ……！」
「もっと、どうしてほしい？」
「イジめて……イジめてください……由奈を、メチャクチャにしてくださいッ……ンあああああああァ！」
　遼は、腰から手を離し、由奈の乳首をそれぞれつまんだ。
　そして、手を上に持ち上げる。
「アアアアアアアアッ！」
　痛みに悲鳴を上げ、由奈は体をのけぞらせた。膣内が、きゅうっと収縮するのを、遼はペニス全体で感じる。
「イタイ……イタイですぅ……」
　しかし、その声には、まるで媚びるかのような甘さがある。
「どうした？　いじめて欲しいんじゃないのか？」
「ハ、ハイ……そうです……」
「痛いのがいいんだろう？」
「イイ……ですゥ……。ンあああああ……スゴくイイ……」
「由奈は変態だな」
　空中で軽く乳首をひねり、思う様、悲鳴を絞り出しながら、遼が言う。
「ああン……そんなァ……」
　自分の動きが、言葉が、自分でコントロールできない。
（……何だ、何をしてる？　何を言ってるんだ、俺は……？）
　そのくせ、意識も感覚も、少しも曖昧でない。何か、何度も見た悪夢をまた見てしまっているような、そんな感じだった。
　ぱっと、遼は由奈の乳首を離した。
「ふアン！」
　ふるるん、とゆれる乳房に、由奈が自ら手を当てる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼が、しばし緩めていた抽送を再開した。今度は、由奈に上体をかぶせ、体を密着させた姿勢だ。腋の下から手を回し、肩を固定するかのように抱く。遼の胸板の下で、由奈の乳房が大きく形を変えた。
「あン！　あン！　あン！　あン！　あン！　あン！」
遼のペニスの雁が、由奈の粘膜をえぐるようにこすり、恥骨がクリトリスを圧迫する。
そして、遼の狼藉によって敏感になった由奈の乳首は、遼が動くたびに、そのシャツの生地でこすられていた。
由奈は、遼の背中に手を回し、ぎゅっと力をこめた。そして、両脚を腰にからめ、さらなる結合をおねだりする。
「あ、イイッ！　イイ、イイ、い、イイですッ……」
不意に、体の主導権が、遼自身に戻ってきた。
頭一つ下に、由奈の顔があった。快感に顔を上気させ、まゆをたわめ、半開きになった口からはよだれまでこぼれている。
「ンン……」
遼は、体を丸めるようにして、その由奈の唇に自らの唇を重ねた。夢中になって唇を吸う遼に、由奈が舌を伸ばし、ピンク色の舌同士が軟体動物のように淫らに絡み合う。
自分でもどういうつもりかは分からなかったが、それは間違いなく遼の意思による行為だった。
「ンン……ン……ン……ぷはっ」
名残を惜しみながら、ようやく唇を離した。
涙に潤んだ大きな目が、自分を見上げている。
たまらない気持ちになって、遼は最後のスパートをかけた。
「ああァッ！　ひあッ！　い、い、イ、クッ……！」
由奈が、両手両脚で、自分にしがみついてくる。
「きて……おねがいですゥ……ご、ごしゅじんさまも……いっしょに……ッ！」
切れ切れに、由奈がそう言ってくる。
遼は、その言葉に誘われるかのように、腰に渦巻いていた欲望を解放した。
「あああああああああああああああああァッ！」
由奈の絶頂の声を聞きながら、わずかに残っていた理性で、体を引き剥がす。
間一髪、外に踊り出たペニスが、勢いよく精液を由奈の体にぶちまけた。
「はあああン……はああ……あァッ……はあああぁ……」
茫然と息をつく由奈の体と、その衣装を、白濁した大量の粘液が汚していく。それは、遼自身が驚くほどの飛距離を見せ、由奈の結んだ髪にまで届いた。
遼は、それを空ろな目で、見るともなく見ていた。
血に呼ばれて脳内に現れた何者かは、いずこへともなく去っていた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

---

　遼は、自室のベッドの上で、大きく溜息をついた。
　由奈と、肉体関係を持ってしまった。
　そのことはいい。問題は、その最中に、自分自身の心と体が、コントロールを失ってしまったことだ。
　由奈の肉体を乱暴に蹂躙し、残酷な言葉でいたぶった自分。
（あれが……記憶を失う前の俺なのか……？）
　そうとしか考えられない。そもそも、ビデオに映っていた自分も、同様に由奈のことを犯していたのだ。
（何てヤツだ……！）
　遼は、自分自身に腹を立てながら、ふと、由奈に単純な好意以上の感情を抱いている自分に気付いていた。ことの順番はどうあれ、深い関係を共有した相手に向ける、当然の気持ちを、である。
　そしてその想いは、嫉妬に彩られていた。
　由奈を、自分でない自分が、その手に抱いている……。
　しかも由奈自身は、その「二人の自分」のことに、気付いているかどうかも分からないのだ。
　自然と溜息が出てしまう。
　由奈は、すでに最低限の身繕いをして、この部屋を出て行ってしまっている。おそらく、いまごろはこの広大な館のいずこかで、シャワーでも浴びているのだろう。
　自分もそうしようかと立ちあがったとき、部屋の電話が鳴った。
「もしもし……結城です」
　未だに、自分にはしっくりこない名前を、電話の相手に告げる。
「イヌイだ。退院、おめでとさん」
　ドスのきいた、という表現がぴったりくるような、低くさびた声がそう言う。
「さっき携帯にかけたんだが、切ったろ」
　遼は、やっと、自分がかかってきた携帯電話の電源を切ってしまったことを思い出した。
「えっと、実は……」
「記憶が戻らないんだってな。……ってことは、俺の事も忘れてるのか？」
「はい……」
「『はい』ときたか」
　何がおかしいのか、電話の向こうの「イヌイ」はくつくつと忍び笑いを漏らした。
「まあいい。何をどれくらい忘れてるか、会って確かめさせてもらうぜ」
　そう一方的に言って、電話は切れた。

Yeon PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

「乾孝晃だ。はじめまして、と言いっとこうか」
　二十分ほどして舘に現れたその黒ずくめの男は、応接間のソファーに座るなり、そう言った。
　声相応に、人相の悪い男だ。ごつく長い顔に、丸レンズの黒眼鏡をかけている。大きな口と薄い唇は、どこは爬虫類を思わせた。そして、剃っているのか体質なのか、頭髪がまったくない。
　乾を部屋に案内し、お茶を出した由奈も、この男のことをどことなく恐れている様子だった。
　その由奈も、この部屋には残っていない。遼は、この乾という男と二人きりになってしまった。
　しかし、不思議と恐怖はなかった。
「俺のことどころか、自分の名前さえ忘れちまったそうだな」
　遼は、そんな乾の言葉に、どんな口調で答えればいいのか分からず、とりあえず肯いた。
「しかし、記憶喪失なんてもんが本当にあるとはね。何だかドラマかマンガみたいだな」
　乾は、くだけた口調でそう言った。あまり考えたくはなかったが、自分とは友人だったのだろうかと、遼は思った。
「あの……俺は、どんなヤツだったんです？」
　とりあえず、遼はそう訊いてみることにした。
「少なくとも、この俺に敬語使うようなやつじゃなかったよ」
　そう言って、乾は薄く笑い、続けた。
「あと、気の毒なことだが、善人じゃなかった」
「そうみたいですね」
　憮然とした表情で、遼が言う。そもそも乾からして、とてもまっとうな人間には見えない。
「……で、具体的に、俺は何をしでかしたんですかね？」
　遼の問いに、乾は笑いを引っ込め、ひどく真面目そうな顔になった。
「聞きたいか？」
「まあね。今のままじゃ、気分が悪いし」
「……調教師だ」
　意外な言葉を、乾は言った。
「調教師って……馬の？」
「女だよ」
　聞き返す遼に、笑いもせず、苦い顔で乾が答える。
「おんな……？」
「そうさ。言うことを聞かない女や、感度の悪い女、金持ちのオモチャになってる女を預かって、調教して、一人前の女奴隷にする……そういう仕事さ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「そんな……そんな仕事が、あるのか？」
「裏の社会には、いくらでも需要があった。そして、お前さんはその仕事を立派に果たしてたんだよ」
「……」
「あと、差し支えがなければ、調教の様子をビデオにとって、厳選された顧客に売りさばいてもいた。いい副収入だったよ。ちなみに、どっちの仕事も、斡旋してたのはこの俺さ」
　再び乾が浮かべた笑みには、どこかしら自嘲の影があった。
「じゃあ、俺の経営してる店ってのは……」
「表向きは、ただの会員制のクラブだがね。裏では、そのテのマニアの溜まり場さ。たまに、そこで仕事の依頼を受けることもあるし、仕事の成果が披露されることもある」
「……」
「今は代理として、俺が店の管理をやってるがね。しかし、お前さんの復帰を待つ声も多いよ」
「……」
　遼は、言葉もない。
「……顔色が悪いぜ」
　乾の言葉通り、遼は真っ青な顔に、細かく汗を浮かべていた。額の傷が、ずきずきと疼く。
「じゃあ……由奈は……？」
　震える声で、やっと、遼がそう言う。
「……」
　つい、と乾は、出されたお茶に手もつけずに立ち上がった。
「？」
「槙本のことは、本人に訊けよ」
「なに？」
「今のお前さんとは、ちと話しづらいんだよ。何だか気の毒でな」
「……」
「しかし、記憶喪失とはね……うまいことやったもんだよ」
　そんな意味不明の捨て台詞を残して、乾は来たときと同様、ひどく唐突に舘を後にした。
　遼は、その後を追うことができなかった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第３章

　暗い嵐の夜だった。
　横殴りの雨が、この年代ものの屋敷の屋根を打ち、壁を叩いている。時々、稲光が夜の闇を切り裂き、雷鳴が轟く。どうやら、この周辺は嵐のど真ん中にあるらしく、光と音の間隔はごくわずかだった。
　遼は、寝床の中、目が冴えて眠れないでいる。
　嵐のため、ということもないではないが、眠れない主な理由は、乾の語った自分の過去のことを考えているからだ。乾と対面してから丸１日以上が経っていたが、遼は乾の言葉を消化しきれないでいたのである。
　女性を監禁し、調教し、奴隷にする調教師……。
　何とも現実感の希薄な言葉ではある。由奈と遼の狂態を映したビデオがなければ、とても信じることはできなかったろう。
　そして、由奈と関係を持っている間に現れた、もう一人の自分。
　おそらく、あれが記憶を失う前の遼なのだろう。つまり、本来の遼の姿だということになる。
（記憶を取り戻すと言うことは、そういう自分に戻るということか……）
　遼は、闇の中で目を凝らした。無論、黒一色の視界には何も見えてはこない。時々、電光が青白く部屋の細部を浮かび上がらせるだけだ。
　と、かすかなノックの音が、遼の寝室に響いた。
「……由奈です」
　そんな声とともに、寝室の、重い木製のドアが開く音がする。
「あの……寝てますか？」
「……いや、寝てないけど」
　ちょっと迷った末、遼はそう答えた。答えながら、枕もとのスタンドを点ける。
　ドアのところに、赤地に白ネコのキャラクターがプリントされたパジャマを着た由奈が立っていた。いつも頭の両脇で結んでいる髪は解かれ、片手に枕を抱いている。
「どうしたの？」
　何か言いたげな由奈に、遼はそう声をかけた。
「あの……添い寝して、いいですか？」
　もじもじと体を動かしながら、由奈が上目遣いでそう訊いてきた。
「え……？」
「だから、添い寝……」
　言いかけた由奈の姿を、ぱっと窓からさし込んだ強い光が照らした。
「きゃあッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

一瞬遅れて、まるで巨人が大木を引き裂くかのような音が、びりびりと部屋をふるわせる。
見ると、由奈は両手で枕を抱えて、床にへたりこんでいた。その服装のせいか、それとも巨乳を枕で隠しているせいか、いつも以上に幼く見える。
「雷、怖いのか？」
遼の問いに、しゃがんだままの由奈は、泣くのをこらえているような顔で何度か肯いた。そんな少女の姿に、なぜか遼の血が体内でざわめく。
「……いいよ」
渋々、といった感じの声で、遼は由奈の申し出を了承した。正直、由奈と寝床をともにすることに、一種の不安のようなものを感じてはいる。しかし、この広い屋敷の中で、こんなに怯えている由奈を一人にさせるのは、何となく気がとがめたのだ。
「あ、ありがとうございますぅ……」
ひどく情けない声で礼を言いながら、由奈は遼の左となりに潜り込んだ。遼のベッドは、二人で寝ても充分なほど大きい。
仰向けになり、持参したふわふわの枕に頭を乗せると、ようやく安心したのか、由奈は小さく一息ついた。
遼も、つられたように溜息をつく。無論、これは安堵によるものではない。
「じゃ、消すよ……」
「ええっ？」
電気スタンドのスイッチに手を伸ばした遼に、由奈は抗議の声をあげた。
「暗いのもヤなのか……」
「ごめんなさい……だってぇ……」
うるうると潤んだ大きな瞳が、遼の顔を見つめる。
遼は小さく肩をすくめ、由奈に背を向けて自分に毛布をかけなおした。

---

眠れない。
当然だった。
同じ毛布の中にいれば、たとえ触れていなくても、相手の体温が伝わってくる。遼は、それを意識せずにはいられなかった。
由奈の寝返りの動きや、呼吸の音、そしてかすかに漂ってくる石鹸の匂いが、ますます遼の頭を冴えさせる。
由奈も、まだ眠ってはいないらしい。稲光が閃き、雷鳴が轟くたびに、その小さな体がびくっと震えるのだ。
雨が窓ガラスを叩き、風が庭の木をゆすっている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

さすがに頑丈なこの屋敷はびくともしていないが、激しい嵐であることは確かであった。
ふと、由奈が体を動かす気配が伝わってきた。
ぴと、と、何か温かい感触が、遼の背中全体に押し付けられる。
それは、由奈の背中だった。遼のＴシャツと、由奈のパジャマの薄い生地ごしに、由奈のぬくもりがじんわりと伝わってくる。
その温度が、じわじわと遼の欲望をとろ火であぶった。股間に血液が集まってくるのが分かる。
「ン……」
しかも由奈は、ちょうどいい位置を探り出そうとするかのように、もぞもぞと体を動かしている。
「おい……」
これ以上されてはヘンになる、と思って、遼は小声でそう言った。
「眠れないよ……」
「ご、ごめんなさい」
そう謝って、あっさり由奈は身を引いた。遼は、なんとなく拍子抜けしてしまう。
背中に、何とも言えない喪失感が残った。
「あの……ご主人様……？」
「ん？」
おずおずと声をかける由奈に、遼は思わず返事をしてしまった。
「ご主人様……どっか行っちゃったり、しないですよね？」
「え？」
質問の意味がよくわからず、遼は間抜けな声を出した。
「由奈、不安なんです……このまま、一人になっちゃうんじゃないかなあって……」
「……」
「ご主人様が、由奈のこと忘れて、どっか行っちゃったら……夜寝てると、そんな風に考えちゃって……怖くて……」
「由奈……」
遼は、体を半回転させ、由奈の方に向き直った。その動きを察したのか、由奈も遼の方に向き直る。
「ご主人様は、憶えてないと思うけど……あたし、もう帰るとこないんです……」
正面から遼と目を合わせようとせず、視線を落としながら、由奈は続けた。
「お母さんは死んじゃって……お父さんも、いなくなっちゃって……学校にも戻れなくて……」
遼は、一瞬、由奈が泣き出すのではないかと思った。
しかし、由奈は泣かなかった。ただ、そのあどけない顔に似合わない、寂しげな笑みをうかべて、うつむいているだけだ。

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

（……由奈を、そういう立場に追い込んだのは、俺だったのだろうか？）
　そう考え、遼はぎくりと体を硬直させた。
　ありえないことではない。乾の言葉が本当なら、記憶を失う前の遼が、由奈を家庭や学校に戻れなくしてしまった張本人であるという可能性は、充分ある。いや、そう考える方が自然なくらいだ。
「ご主人様？」
　ふと、視線を上げた由奈が、ちょっと怯えた声をあげた。
「ご主人様、怒ってます？」
「い、いや、そんな……」
　よほど思いつめた顔をしていたのだろうか。由奈は、遼が何かに怒りを覚えているように見えたらしい。もともと、遼の切れ長の目は、時折ひどく険悪な表情を浮かべているように見えることがある。
　ぽろ、と由奈の目から涙がこぼれた。
「あたし……ひどいコだ……」
「え……？」
「記憶なくして、一番ツライのはご主人様なのに……自分のワガママばっかり言って……」
　遼が自分を怒ってるのだと勘違いした由奈は、両手で顔を多い、ぽろぽろと涙を溢れさせた。華奢な肩が、細かく震えている。
「……」
　誤解を解こうとして、遼は言葉に詰まった。記憶を失ってしまっているせいかどうなのか、適当な言葉が思いつかない。
　勘違いをした由奈よりも、その誤解を解くことができない自分自身に、苛立ちが高まる。
　その時
「ヤアァッ！」
　ひときわ大きな雷鳴が、稲妻とほぼ同時に轟いた。どうやら、近くに落ちたらしい。
　由奈は悲鳴を上げ、遼にしがみついていた。
　どろどろどろ……という余韻を残し、次第に雷鳴が遠くなって行く。
　腕の中の由奈が、涙に濡れた目で遼を見上げた。半開きの小さな唇が、何か言いたげに震えている。
　遼は、身の内に高まる衝動に耐えきれず、乱れた由奈の髪を直してやりながら、その唇に自らの唇を重ねていた。
「んン……」
　舌を侵入させ、上下の歯をこじ開けるようにして、由奈の舌を捕える。
　おずおずと言った感じで、由奈はぎこちなく舌を絡めた。その緊張を解きほぐすかのように、遼が由奈の髪を撫でる。
　由奈はうっとりと目を閉じ、遼のくちづけに身を任せた。

Yeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しばらくして、遼は口を離した。由奈が、ぼおっとした目つきを遼に投げかける。
「別に、怒ってないから……」
何とも芸のないセリフに、由奈は童女のような素直さでこっくりと肯いた。
肯いた後、そっと自分の太腿に触っている、遼の股間のそれに手を伸ばす。そこは、先程から痛いほどに硬直していた。
由奈の視線は、遼の顔に向けたままだ。
「お、おい……」
由奈が、優しくそこを撫でたために、遼の声は他愛なく上ずってしまっている。そんな遼に、由奈はくすっと笑い、言った。
「ご奉仕させてください、ご主人様……」
そのまま、返事を待たずに、体を下にずらしていく。遼が何か言おうとして半身を起こしかけたときには、由奈は遼の両脚の間に入り込み、そこに正座をしたまま深々とおじぎをしているような姿勢になっていた。そして、遼が寝巻き代わりに着てるＴシャツをめくりあげ、トランクスの上からいとおしげに剛直に頬ずりをする。
「熱くなってる……」
言いながら、由奈はトランクスを下にずらした。すでに充分に血液を充填させたペニスが、ばね仕掛けのように外に飛び出す。
「ああ……素敵、です……」
由奈は、小さな口を精一杯あけて、ぱっくりと赤黒い亀頭を咥え込んだ。ぬるりとした口腔粘膜の感触が、電流となって遼の脳に届く。
遼は、両肘をついて上半身を起こしたまま、じっとしていた。拒否するにはあまりにも甘美な感覚が、自分の股間で急速に育っている。
由奈は、唾液を塗りつけるように、遼のペニス全体に舌を這わせた。血管を浮かべたそれはスタンドの灯かりにぬらぬらと光り、そりかえっている。
そんなペニスに口だけで奉仕しながら、由奈はパジャマの前のボタンを外していた。ノーブラの豊かな乳房が、夜気の中に解放される。何度見ても、この幼げな容姿の少女にはアンバランスな、見事な形と大きさだ。
じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ、じゅぽ、というイヤらしい湿った音が、寝室の空気を断続的にふるわせた。由奈が、唾液にほどよく濡れたペニスを咥え、ピンク色の唇を規則的に上下させ始めたのだ。さらには、パジャマのボタンを外し終えた両手で、遼の太腿の内側を撫で、陰嚢を優しくもみほぐす。
遼の呼吸が荒くなっていく。羞恥心から、声を出すまいとするだけで精一杯だ。
いよいよ遼の股間に欲望の体液がこみあげてきたとき、まるでそれを察したように、由奈は唇を離した。亀頭と唇の間に、唾液と先走りの汁で、下向きのアーチが一瞬できあがる。
しかし、由奈は股間への愛撫を完全にやめたわけではない。粘液でぬるぬるになったシ

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

ャフトをゆるゆるとしごき、遼の欲望を巧みにアイドリング状態に保っている。
「胸で、しますね……」
　遼の方を上目遣いで見つめ、悪戯っぽく微笑みながら、由奈は言った。そして、その宣言通り、その豊かな乳房で遼のペニスを挟む。
　その時、ぱふ、という妙に可愛い音を、遼は聞いたような気がした。
「ん、ん、ん、ん、ん……」
　由奈が、一生懸命、という言葉が一番ぴったり来るような感じで、体ごと胸を上下させる。何とも言えない柔らかな感触に包まれたペニスは、そのたびに、胸の谷間から頭を出し入れしている。
「く……」
　その、柔らかくきめの細かい乳房の肌触りに、不覚にも遼は声をあげてしまった。
　一方、由奈は、少し疲れたのか体を動かすのを止め、何か考え込んでいるかのように目を閉じた。そして、ちょっと顔を赤くしながらうつむくと、口から大量の唾液をてろーっと自分の胸元に滴らせる。
　潤滑油を補充し、さらにすべりをよくしたところで、由奈は動きを再開させた。
　前よりもさらに動きを大きくし、ペニスの先端が由奈の口元に届くくらいにする。
　ちゅッ、ちゅッ、ちゅッ、ちゅッ……
　そして由奈は、亀頭が近付いてくるたびに、その可憐な唇でキスをして、刺激を与えた。
「んんんン……」
　時々、こらえきれなくなったように、竿を乳房に挟んだまま、亀頭全体を口に含み、舌をレロレロと動かして情熱的に刺激する。
「ん……くッ……ぅあっ……！」
　遼は、あまりの快感に声を漏らしていた。肘で体を支えきれなくなり、再びベッドに仰臥する。しかし、それでも自分の股間で起こっている淫らな光景から目を離せず、首だけを持ち上げ、由奈の上半身全てを動員されて奉仕されている自らの性器を見つめている。
　限界が、すぐそこまで来ていた。
「はァ、はァ……ご主人様……」
　唇をペニスから離し、ぬらぬらと濡れ光るシャフトをその巨乳で揉みつぶすようにしながら、由奈は言った。
「ご主人様、下さい……由奈に、ご主人様の熱いミルク、いっぱい下さい……」
　そう言って、また何度も亀頭にキスの雨を降らす。
「うッ！」
　遼は、無意識に大きく腰を跳ね上げさせた。
　ぴしゃっ、と音を立てるほどの勢いで、白濁した粘液が由奈のあどけない顔を叩く。
「あぁっ、ミルク……」
　びくん、びくんとしゃくりあげているペニスに、由奈は文字通りむしゃぶりついた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「んんン……」
　口の中で何度も小爆発を繰り返す亀頭を咥え込み、精液が口腔や喉にあたる感触にうっとりと声を漏らす。
　驚くほど大量の精を放ち、ようやくペニスは律動を止めた。
　由奈は、口内に溜まった精液をこくこくと小さく喉を鳴らして飲み干した。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
　荒い息をつきながら、遼はぐったりと体をシーツの上に投げ出した。
　それでもしばらくは、由奈はペニスを名残惜しげに口に含み、尿道に残った精液を、最後までちゅるちゅるとすするのだった。

「ふぅー……っ」
　どこか満足げな溜息をついた由奈は、体を起こし、とんび座りの姿勢で、再び遼に顔を向けた。ちょっと照れたように、まだ精液で汚れたままの顔で微笑む。
　遼は半身を起こして、そんな由奈を横抱きに抱きしめた。
「ご主人様……？」
　由奈が、顔についた精液をパジャマの袖口でぬぐおうとするのを止め、遼はその顔に舌を伸ばした。
「あ、ダメ！　まだ……」
　そう言う由奈の顔を、まるで親猫が仔猫の顔をぬぐうように、舌で精液を舐めとっていく。
　無論、遼にとっては不快な味だが、自分自身の臭気になぜか興奮してしまっているのも事実だった。
　柔らかい頬に優しく舌を這わせ、耳たぶを甘く噛み、顎から首筋にかけて軽くキスを繰り返す。
「あっ……ああン……」
　最初は少し抵抗を示した由奈も、いつしか遼にその体を預けていた。
　そして、全てを舌でぬぐいとった後で、遼は由奈と唇を重ねた。
「ンン……」
　今さっき放ったばかりのものの味と匂いのする口腔に、同じ味と匂いのする唾液を注ぎ込む。由奈は、それを恍惚とした顔で受けとめ、小さく鼻を鳴らした。
　キスをしながら、パジャマとショーツを、一枚一枚脱がしていく。脱がしながら、すべすべとした肌の感触を楽しむように、肩や背中、太腿、乳房を愛撫する。
　そして、自らも身につけているものを全て脱ぎ、その合間にキス。
　全裸になった二人は、互いの体を両手でまさぐりながら、何度もキスを繰り返した。
　ちゅぴ、と音を立てて、唇を離す。
「立って……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼の言葉に、由奈は素直に従った。ベッドに胡座をかいて座る遼の顔の、ちょうど真ん前に、ぷっくりとした由奈の恥丘がある。柔らかそうな陰毛は、その一本一本が数えられるほどであり、やや上付きのピンク色のスリットは犯罪的に幼く見えた。

遼は、由奈の腰を抱えるようにして、その部分にくちづけした。

「あ……ッ」

由奈はちょっと前屈みになって、遼の両肩に両手を置いた。構わず、遼は由奈のその部分を、唇で優しく愛撫する。

そうしながら、遼は由奈の足を誘導し、自分の腰の部分をまたぐようにした。自然、由奈の両足は開いてしまう。

「あぁン……」

遼は、焦らすように、由奈の太腿に唇を這わせ、肉襞の周辺に舌を伸ばした。その左右をじっくりと責めながら、なかなか肝心の部分を攻撃しようとしない。

「はぁッ、あッ……んン……ッ」

由奈は、遼の両肩から頭に手を移し、その髪に指をもぐり込ませた。

「あぁン……じ、焦らさないで……ください……」

とうとう、由奈は音を上げてしまった。

「お願いです……由奈の、感じるところを……」

腰をゆするようにして、はしたないおねだりをする。

遼が、敏感な肉の突起に唇を当て、一気に吸引した。

「ンアッ！」

鋭い声をあげて、由奈は体をのけぞらせた。遼がしっかりと腰を支えていなければ、後向きに倒れてしまいそうな勢いだった。

遼は、ひとしきり吸引した後、クリトリスを舌で刺激し始めた。フードから顔を出しかけたところを、素早く舌を動かして上下にこするようにする。

「アアッ、アッ、アッ、アッ、アーッ！」

指で遼の髪をくしゃくしゃにしながら、由奈は身悶えた。腰がしっかりと固定されているため、上半身が揺れ動き、そのたびに巨乳がたぷたぷと震える。

「イイ……気持ちイイ……か、感じちゃうぅ……ッ」

由奈は、自分の足で立っていられないようだった。のけぞらせていた体を今度は前に倒し、遼の頭を抱え込むような姿勢になる。

その由奈の右の脚を上げさせ、遼は肩にかつぐようにした。

片足を上げた格好のため、いびつになった陰唇が、目の前でよじれている。そこは愛液で濡れ光り、ひくひくと息づいていた。

じゅじゅじゅじゅじゅじゅ、とわざと音をたてて、遼は愛液をすする。

「んンーッ！」

倒れないように、必至で両手と片足を遼の上半身に絡ませながら、由奈が声をあげた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

まるで、子供が岩をよじ登ろうとしているような姿勢だ。
　遼は、靡肉を唇で挟むようにして刺激した後、舌をねじ込むようにクレヴァスの奥に侵入させる。
「はァ、はァ、はァ……もう、もうダメ……」
　さすがに息苦しくなって、ぷは、と遼が口を離したときに、由奈がそう哀願した。
「ご主人さまぁ……由奈に、さっきのご奉仕の、ごほうび、下さい……」
「ごほうび？」
「ご、ご主人様のを……」
　そう言ってうつむく由奈の視線の先には、すでに勢いを回復させている遼のペニスがあった。
「今日は、だいじょぶな日だから……中に……お、お願いです、ご主人様ァ……」
　そういう由奈の顔は、羞恥と欲望に紅潮している。
「いいよ」
　遼はそう返事して、由奈の腰を徐々に下ろして行った。
　遼の意図を察して、由奈は遼の両肩に手を置き、慎重に股間で股間に狙いを定める。
「んンッ」
　亀頭が濡れた肉襞に触れたとき、由奈はぴくんと体を動かした。
　しかし、腰の下降は止まらない。
　ずずずず……ツ、とさしたる抵抗も見せず、遼のシャフトが由奈の膣口に呑み込まれていく。
「あっ、ああっ、あぁーン」
　とうとう、由奈の腰が遼の腰に着地した。いわゆる対面座位の格好である。
　このまま由奈を押し倒し、さんざん言葉で辱めた上で、乱暴に犯したい……。
　そんな衝動が、遼の血の中で湧き上がっている。
　前に由奈を抱いたときに遼を支配した、あの暗く熱い衝動である。
　遼は、その衝動から自らを振りきるように、由奈を抱きしめ、その唇に自らの唇を重ねた。身長差があるため、この体位だと、ちょうど遼の目の前に由奈の顔が来る。
「んんン……」
　そうすると、不思議と例の衝動が静まってくる。
　二人は、たっぷりと舌を絡ませた後に一度口を離し、今度はまるで初心な恋人同士がするような軽いキスを、何度か繰り返した。
　由奈の顔は上気し、その可愛い垂れ目は、快感にとろんと半ば閉じられてる。そして両手は、しっかりと遼の首に回されていた。体と体の間で、大きな乳房が形を変えてつぶれ、みずみずしい弾力で遼の胸を押し返している。
　遼は、とんび座りの姿勢で自分の腰をまたいでいる由奈の腰に手を当て、ゆっくりと回すように誘導した。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ンン……はぁッ……あぁ〜ン」
　ペニスを熱く包み込んでいる粘膜が動き、ざわめくのが、感じられる。
「き、気持ちイイ……気持ちイイですゥ……」
　由奈は、遼に頬ずりしながら、耳元でそう訴えた。
「由奈……」
　血がざわめき、自分を見失いそうになるたびに、それを押さえつけようと、由奈の唇を奪う。由奈はそれに応え、はしたなく腰を動かしながら、遼の舌と唇を吸った。
「あン……ああッ……ご、ご主人様、ご主人さまァ……！」
　由奈はいつの間にか立て膝になり、さらに激しく腰を動かしていた。
　上下に大きくピストン運動をしたかと思うと、ぐりぐりと腰を大胆に回す。
「はン！　はひッ！　はアアッ！　ひッ！　イイ……ッ！」
　その由奈の狂ったような腰使いに追い込まれ、快感が高まるにつれて、あの衝動も強くなっているのを、遼は感じていた。真っ白になった頭を、じわじわと鮮血色の歪んだ欲望が侵蝕していく。
（また乗っ取られる……）
　こみあげてくる快美感の波の中、遼は、かすかにそんなことを考えた。
「あぁーッ！」
　由奈も絶頂が近いのか、そんな悲鳴のような声をあげながら、さらに腰使いを早くした。
「好きですッ！　ご主人様ァ！　好き、大好きぃッ！」
「うぁっ！」
　思わぬ由奈の言葉に、遼は性感が一気に高まるのを感じた。
　自らを乗っ取ろうとするあの衝動が、急速にどこかへ行ってしまう。
　遼は、両腕に力をこめ、しっかりと由奈の体を抱きしめた。
「あああああああああァーッ！」
　膣内でペニスが膨れ上がり、次の瞬間、凄まじい勢いで射精していた。
「ああッ！　あッ！　あッ！　あッ！　あぁァーッ！」
　子宮口に次々と当たる精液の弾丸が、立て続けに由奈を絶頂に舞い上げる。
　びくン、と由奈の体が硬直し、しばらくして、ぴくン、ぴくンと可愛く痙攣した。
　膣内の粘膜が、まるで陰茎から精液を搾り取ろうとするように、貪欲そうに蠕動する。
「ふあああぁぁぁ……ン」
　ぐったりと、由奈は遼に体重を預けた。
　その顔が、遼には何だかひどく幸せそうに見える。
　そして遼も、由奈を抱いたまま、ベッドに仰向けに横たわった。

---

Yeom PDF Driver Trial
www.yeom.com.tw

「何だか、今夜のご主人様、すごく優しい……」
　遼の左の胸に頬を乗せた姿勢で、由奈は言った。
　すでに、嵐は遠くへ去ったようだ。
「優しいのはイヤか？」
　乱れた髪をすいてやりながら、遼が訊く。
「そ、そんなコトないです！」
　驚いたように、由奈が声をあげた。
「優しいご主人様も、イジワルなご主人様も、両方とも大好きです……」
　そう言って、ちゅっ、と音をたてて遼の胸にキスをする。
　しかし、そのキスに、針で差されたような痛みを、遼は感じていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第４章

　遼は、久しぶりに街に出ていた。
　街に出ると、自分の住んでいる方向が、濃い緑の小山のように見える。あそこから、バスを乗り継いできたのだ。自宅のガレージには、年代物の小型の外車があったのだが、大事を取って、バスを利用したのである。
　残暑というほどではないが、風はまだ冷たくない。
　未だ記憶が戻ってはいないが、自分のただっぴろい家で、ＴＶを見たり、アルバムをひっくり返したりする生活には、もう飽きてしまっていた。しかし、それ以外に何もすることはない。せいぜい、由奈を手伝うために厨房に立つくらいである。
　自分でも意外なことだが、記憶を失う以前、遼はたまに料理をしたらしい。
「ご主人様、器用だから」
　由奈に代わって手際良くジャガイモの皮などをむいている遼に、由奈はそう言って屈託ない笑顔を見せた。
　その由奈とは、あの嵐の夜以来、しばしば寝床をともにしている。
　由奈を陵辱し、乱暴に犯したいという衝動は、今のところ収まっている。消滅したのか――それとも、無意識に抑圧しているのか。
　そんなある日、遼は病院に行くために一人で街に出たのである。
　街は、日本海側の地方都市としては、それなりに賑わいを見せていた。十階建てのデパートが二つ、売上を競っている程度だが。
　病院での形式的な検査の後、医者は遼の額の傷を抜糸した。
　記憶が戻らない旨を言うと、病院の精神・神経科にカルテを回すという。定期的な通院を勧められ、遼はおざなりに答えた。結局、ケガの原因については訊けなかったし、医者もあえて説明しようとはしなかった。すでに、遼は知ってるものと思っているらしい。
　遼は病院を出て、街を歩いた。最近整えられたらしい歩道には、まだあまり育っていない桜の木が街路樹として植えられている。
「お兄ちゃん！」
　と、その歩道で、いきなり声をかけられた。
　見ると、暖色系のワンピースに身を包んだ少女が、自分を見て目を丸くしていた。栗色のくせっ毛気味の髪をショートカットにした、中学生くらいのきゃしゃな美少女だ。
「お兄ちゃん、退院してたんだァ」
　言いながら、人懐っこそうな笑顔を浮かべ、こちらに小走りで走り寄ってくる。通行人の、特に男どもが、思わず振り返ってしまうような、快活で可愛げな仕草だ。
（妹……？）
　確かに、自分には妹がいたという話だが、遼は何となく違和感を感じていた。そもそも、

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

年がちょっと離れすぎている。
（ああ、母親が違うとか言ってたな……）
　それで、今は別居しているのだろうか、と考えたときには、少女が目の前に立っていた。まだ発育途上の胸を上下させ、息を整えている。
「……お兄ちゃん、記憶喪失って、ホント？」
　開口一番、少女は遼の顔を覗きこむようにしてそう言った。
「ん……実は、そうなんだ」
「じゃあ、円のことも忘れちゃったの？」
（まどか……？）
　頭の中で反芻しても、該当する記憶は蘇らない。遼は、すまなそうに肯き、言った。
「悪い。ダメだ。思い出せない」
「ふーン」
　と、少し悲しげな顔をした円だが、再び笑顔に戻る。
「あのね、これからお姉ちゃんと待ち合わせなんだ。お兄ちゃんも来なよ」
「お姉ちゃん？」
「そ。サヤカお姉ちゃん……。やっぱ、憶えてない？」
「ああ……どんな字、書くんだ？」
「小さな夜の歌」
　円はそう言って、くくくっ、と可愛く笑った。
「ぴったりだよね。お姉ちゃんね、今日は合唱部の練習だったんだ。さ、早く行こ！」
「あ、ああ……」
　円の白い小さな手が、遼の手を取って引っ張る。何とも微笑ましい風景だ。
　結局、遼は円についていくことにした。
　違和感は、まだ消えない。

　そこは、駅前の瀟洒な喫茶店だった。ドアを開けると、からころとベルが来客を告げる。
　その店に入り、ひとしきり店内を見まわした円は、視線を止め、遼にささやいた。
「お姉ちゃん、来てる」
　三割くらいしか埋まってないボックス席の一番奥に、つややかな黒髪を左側でまとめた、セーラー服姿の少女が座っていた。高校生くらいだろうか。可愛い、と言うより綺麗などといった表現の似合う顔を少し伏せ、文庫本を読んでいる。理想の美人像なるものがあるとして、それと比べると、やや目が大きすぎるようではあるが、かえってそれが魅力的な個性になっている。
（写真の……）
　遼は、アルバムの中の一枚の写真のことを思い出していた。自分の父親らしき男と写っていた、中学に入学したばかりらしい、切れ長の目の少女。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

（ってことは、あの写真はたいして昔じゃないのか）
　と、その少女が顔を上げた。その目が、円と、そしてその隣に立つ遼を捉える。
「……！」
　少女が、目を見開いて声にならない声をあげたようだった。
「お待たせ、お姉ちゃん。お兄ちゃんも連れてきたよォ」
　そんな少女――小夜歌の様子に全く頓着せず、円は小夜歌の隣にちょこんと座った。
　自然、遼はこの二人に対面する形で座らざるをえない。
　なぜか動悸が早まるのを感じながら、遼も席についた。円はフルーツパフェを、そして遼はアメリカンを注文する。
　しばらく、沈黙が続いた。その沈黙の中、円はニコニコと微笑んでいる。
「……退院してたの？」
　小夜歌が、ひどく硬い声でそう言った。
「ああ」
　遼の返事もそっけなかった。とても、兄妹の会話とは思えない。
「どうしてここに？」
「それは……」
「そこでね、偶然会ったの」
　言いよどむ遼に代わって、円が答えた。
「本当に偶然……？」
　小夜歌が、妙に鋭い視線を投げてよこす。目が切れ長な分、そうされるとひどくキツい印象を受けた。
「偶然だよォ。だってお兄ちゃん、ボクのこと気がついてなかったもん」
「ああ、本当に、記憶喪失なのね」
　円の言葉に、やっと、小夜歌の警戒が少し緩んだようだった。
　しかし、軽くにらむような小夜歌の視線は変わらない。出されたフルーツパフェを目を細めて嬉しそうに食べる円とは好対照だ。ただ、この気まずい雰囲気の中、パフェをぱくつくことのできる円の神経も、ある意味で普通ではない。
　一方で、小夜歌は目の前の紅茶に手をつけようともしていなかった。
（……似てない姉妹だなあ）
　この三人の中では、まだ、遼と小夜歌の方が似ていると言えた。遼と小夜歌が父親似で、円は母親似なのだろう。
　と、その時、遼は唐突に違和感の正体に気付いていた。
（妹が一人と……弟が一人……？）
　そうだった。自分には、年の離れた妹と弟が一人ずつ、いるはずだったのだ。妹二人ではない。
「……弟は、どうしたんだ？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼は、思わずその疑問を口にしていた。
「弟？」
「だから、俺の弟……」
きょとんとする小夜歌に、遼が重ねて訊く。
小夜歌は、しばらく遼の顔を眺め、そのままゆっくりと笑みを浮かべた。
「ホントに、何も憶えてないのね……」
言いながら、小夜歌は予想外の行動に出た。
右手で、円のワンピースのすそをそろそろとめくりだしたのだ。
「お、お姉ちゃん……」
顔を赤く染め、小声で円が抗議の声をあげた。
しかし、小夜歌はどこか妖しい笑みを浮かべながら、その手を止めようとはしない。そして円も、そんな小夜歌の行為を本気で制止しようとは考えていないようだった。
この一番奥のボックス席は、他の客席はおろかカウンターからさえも、死角になってる。
「ボ、ボク、恥ずかしい……」
消え入りそうな声をあげて、円は遼の顔から目をそらした。遼は、声をあげることもできない。
ワンピースが、完全にまくれあがった。
「……！」
遼は息を呑んだ。
ワンピースの下の、白いレースの小さなショーツの中に、明らかに男性のソレがあったのだ。
このシチュエーションに感じているのか、それは半ば勃起し、全体の半分までを、繊細な女性用の下着からはみ出させている。
「弟はココよ、お兄さん」
小夜歌も興奮しているらしく、頬を染め、舌で唇を舐めながら言った。
「……」
遼は、言葉もない。ただ、円の顔と、膨らんだ胸と、そして可愛げな容姿に似合わない大きさのペニスに目を向けるだけだ。
「言っとくけど、胸はホンモノよ」
ようやく裾を離しながら、小夜歌は言った。円は、自らの裾を直し、たぎる股間を両手で押さえながら、うつむいている。しかし、その目は明らかに欲情に濡れていた。
「円はね、十二歳のときに、こんな体にされたの。二年前のコトよ」
「……だ、誰に？」
遼の声がかすれてるのが、さもおかしいといった感じで、小夜歌はくすくすと笑った。
「あなたの父親に、よ」
したたるような悪意を込めて、そう言う。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「親父……？」
　思わず、遼は小さく息をついていた。おまえだ、と言われるよりはまだマシだ。
　しかし、自分の父親と言うことは、この小夜歌や、当の円にとっても父親に当たるはずだ。
「聞きたい？　昔のこと……」
　まるで修行者を誘惑する女夢魔のような優しいささやき声で、小夜歌が言う。
（聞くな！）
　遼の頭の中で、何かが叫んでいた。
（聞くな！　今すぐ席を立ってこの店から出ろ！　そしてコイツには二度と会うな！）
　しかし、遼は小夜歌に対し、肯きかけていた。小夜歌が、満足げな微笑を見せる。
　円は、そんな二人をどこか壊れた目で、うっとりと見つめていた。

---

　小夜歌の話は、六年も前に遡った。
　当時、小夜歌は十歳、円は八歳でしかなかった。遼は、十七歳である。
　小夜歌と円の母親である美由紀が、三人の父、結城秋水の後妻となってすぐ、小夜歌が産まれた。その二年後には円が産まれ、一家五人は例の屋敷に住んでいた。
　美由紀は、二児の母親とは思えないほど、若々しく、快活だった。そもそも、秋水と結婚した時点で、まだ学生だったのだ。ややくせのある栗色の髪をショートにまとめ、先妻の子である遼にも、常に明るい笑顔で接していた。
　当時の小夜歌と円にとって、遼はどこか近付きがたい兄だった。年が離れている以上、当たり前と言えば当たり前であったが、いつも無表情なこの大人びた少年が、自分たちや自分の母親にどのような感情を抱いているのか、一向に分からなかったのである。
　そんな遼が、ある日の真夜中、一緒の部屋で寝ている二人を起こしたのだ。
「面白いものを見せてやるよ」
　そんなことを、少しも笑わず、遼は言った。
「面白いもの？」
　きょとんとした顔で、姉弟は聞き返す。
「ついてくれば分かる」
　そう言って、遼は寝室のある二階から一階へと下りていった。
　小夜歌と円も、それに従う。遼の様子は穏やかだったが、どこか逆らいがたい雰囲気があったのだ。
　遼は、ポケットから鍵を取り出し、階段下の目立たない場所にある頑丈そうなドアに差し込んだ。
「わぁ……」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　このドアの奥がどうなっているのか、幼い姉弟は知らない。そのドアを、兄が易々と開けているのを見て、小夜歌と円は思わず声をあげていた。
　ドアの奥は、地下に下りる階段だった。
「これから先は、何があっても声をあげるなよ」
　目を丸くする二人に、遼がそう警告する。小夜歌と円は、素直に肯いた。
　三人は、あまり広くない階段を下り始めた。明かりは点けない。ホールの方から漏れてくるかすかな光だけが頼りである。
　階段の先は、目の前にドアがあるだけの小さな空間だった。遼たち三人が立てば、それだけで満員になるような場所である。そこにあるドアは金属製で、ひどく重たげなものである。全体に錆びの浮いた、かなり年代物だ。
　そのドアを、遼は音を立てないように注意しながら、開けた。こちらには、鍵はかかっていない。ドアと壁の間の隙間は、二センチから三センチほどだ。
（まるで、ろうやのドアみたい……）
　小夜歌が、幼い頭でそう考える。そう考えると、ひどく恐ろしいところに立っているような気がして、きゃしゃな足が細かく震えてきた。
　その時、ドアの向こうからかすかな悲鳴が聞こえた。
　思わず体をびくっとさせ、声をあげそうになる小夜歌の口を、後から遼が手でふさぐ。
　悲鳴は、さらに聞こえた。何度も何度も、一定の間隔を置いて聞こえてくる。
「覗いてみろ」
　遼は、囁くような声で小夜歌と円に言った。
「でも、声はたてるなよ」
　念を押す遼に、こっくりと肯いて、二人は頭を寄せ合うようにして、ドアに近付けた。後に回った小夜歌の頭が上、前の円の頭のほうが下である。円は正座のような格好をし、立て膝になった小夜歌は、その小さな両手を円の細い肩に置いている。
「！」
　二人は、あれほど念を押されていたのに、思わず声をあげそうになた。実際に声をあげなかったのは、遼に言われたからではなく、むしろ、あまりに衝撃が大きかったからだろう。
　そこは、コンクリートが打ちっぱなしの、冷え冷えとした地下室だった。天井からは何本かの鎖が下がり、その中には、先端が金属の輪になっているものもある。奇妙な金具のついた椅子や寝台が置かれ、壁には何種類ものムチと、大きな鏡が架かっていた。
　そして、天井から伸びる鎖に、何か白いものが吊り下げられている。
（ママ……！）
　それは、頭を下にした全裸の美由紀の体だった。
　美由紀は、、両手を後ろに回され、乳房の上下を縄がけされた上で、逆さまに天井から吊り下げられていた。無論、母親の姿を見る子供達はそのような言葉は知らないが、いわゆ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

る高手小手の形である。また、両足首を戒めている足かせには、それぞれ別々の鎖がつなげられており、そのために美由紀のすらりとした両脚はゆるく開いていた。
　およそ、実の子が見る母親の姿としては、これ以上はないというほど残酷な格好である。
　そして、美由紀の背後には、二人の父親である秋水がいた。やはり、身には何もまとっておらず、乗馬用のものらしき短めのムチを手にしている。
　秋水はそのムチを振り上げ、美由紀の背中を打っていた。
　ぴしッ！
「ひぃッ！」
　ぴしッ！
「あぁッ！」
　ムチが白い肌を打つたびに、痛みに声をあげ、美由紀は体をのけぞらせた。そのたびに、不自然な形で突き出された乳房が揺れる。
　さらに数度、秋水はムチで美由紀の背中や尻を叩いた。
「あぁッ！　あッ！　んあぁ！　あひッ！　あぅうッ！」
　そのたびに、美由紀の口から悲鳴が漏れる。
　秋水は、その声に切れ長の目を細め、口髭に隠された唇を笑みの形に歪めているようだった。
　その秋水が、美由紀の前に回り込んだ。
「あぁ……」
　美由紀が、何とも言えない熱い吐息を漏らす。
　逆さになった美由紀の整った顔の高さに、ちょうど秋水の股間があった。美由紀は、痛みと恍惚に潤んだ目で、うっとりとその肉棒を見つめている。
　秋水は、何かを促すように、その肉茎で美由紀の頬をつついた。
「ご主人様……」
　はぁはぁと興奮に呼吸を早めながら、美由紀は口を開いた。どこか幼さの残る唇を、無意識に舌で舐めながら、続ける。
「美由紀は、ご主人様の犬です……このイヤらしいメス犬を、どうか、厳しく躾てください……」
　秋水は満足げに肯き、ペニスで美由紀の口元に狙いをつけた。
（パパの……前におフロで見たのとちがう……何かコワい……）
　その、赤黒い色とグロテスクな形に、小夜歌ははっきりと恐怖を感じていた。
　しかし美由紀は、まるで好物のエサにありついたペットのように、うれしげに目を細め、その肉の凶器にむしゃぶりつく。
　限界まで開かれた美由紀の口に、ずるずると秋水のペニスが呑み込まれていった。
（ママ……パパのオチンチン、食べちゃってる……！）
　正確な性行為の知識さえない小夜歌に、その光景は刺激的過ぎた。いや、そもそもそれ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

が性的な行為なのかどうかさえ、小夜歌にははっきりと分からない。
　しかし小夜歌の女としての本能は、それが男女の淫靡な営みであることに感づいていた。
（ヤダ、なんだか……アソコが、あつい……なんで……？）
　自分の最も恥ずかしい部分が、熱を持ち、じんじんと疼いている。痒いような、もどかしいような、切ないような、そんな感覚だ。
　ふと、目の前の弟の様子をうかがうと、円もその奇妙な感覚を感じているのか、しきりと太腿をもじもじさせ、両手で股間を押さえている。
　そんな子供達の視線に晒されていることにも気付かず、美由紀は吊るされた不自由な格好で頭を前後に動かし、自らの口腔を犯すペニスに刺激を与えようとしている。
　秋水は、そんな美由紀のしなやかな体に手を這わせ、縄で歪められた乳房や脇腹、背中などを刺激した。そして、太腿や、繊細そうな陰毛が茂る恥丘にキスの雨を降らす。
「んんんんん……っ！」
　秋水の指や口が、性感帯をとらえるたびに、美由紀は体をよじらせ、次第に硬度を増しているシャフトを咥え込んだまま、くぐもった声を漏らした。秋水は、そんな美由紀の反応を楽しみながら、その奉仕に合わせてゆるく腰を前後させている。
　緊縛の苦痛と、愛撫の快感に歪む美由紀の顔は、小夜歌の知っているどの顔とも違っていた。
（だいどころで、ハミングしながら、やさいを切ってるママ。いじめられて帰ったとき、やさしくなぐさめてくれたママ。円のオモチャを取ったとき、すっごくマジメな顔で自分をおこったママ。こわいテレビを見てねむれなくなった夜に、いっしょにねてくれて、先にねむっちゃったママ……）
　小夜歌の心の中で、そんな美由紀の映像が、どろどろに溶け、ふくらみかけた胸の奥を重苦しく満たしていく。
（さんかん日に、後ろにならんでるお母さんたちの中で、一番わかくてキレイなのは、うちのママだった……。あたしは、それが何よりもジマンだった……）
　そんな気持ちも、今日でおしまいだと、小夜歌は思った。
「ああ……ご主人様……じ、焦らさないで下さい……」
　巧みに一番感じる部分を避けて愛撫する秋水に対し、美由紀ははしたなくおねだりをしている。
「お願いです……み、美由紀のイヤらしいアソコを、イジめてください……」
「もっとはっきり言わないと分からんな」
　そう言いながら、口唇愛撫から解放され、反り返るように勃起しているペニスで、美由紀の顔をはたく。
「ああッ……！」
　屈辱と服従の悦びに全身を震わせながら、美由紀は声をあげた。
「どこを、どうしてほしいんだ？」

Yeon PDF Driver Trial www.zeon.com.tw

「オ、オマ×コを、オマ×コを舐めてください！」
　悲鳴のような声で、美由紀は言った。その言葉が、小夜歌の胸をえぐり、その幼い性器をたまらないほどに刺激する。
「ならば奉仕を続けろ」
　残酷にそう命じて、秋水は再び美由紀の口にペニスをねじ込んだ。
　そして、期待にひくひくと震え、愛液をしたたらせているその部分に、唇を押し付ける。
「んむぅ……ッ！」
　待ち焦がれた愛撫に、美由紀は拘束された体をのけぞらせ、快感を訴えた。
「んんッ！　ンーッ！」
　秋水は、そんな美由紀の体を抱き締めるようにして固定し、恥骨を美由紀の顔に叩きつけるように、乱暴に腰を動かした。長大なシャフトが美由紀の唇を犯し、雁の部分が口腔粘膜をこすりあげ、亀頭が喉奥に侵入する。
　美由紀は恍惚とした顔で、だらしなく涎と愛液を吹きこぼしてた。
（ママ……なんで……？　なんでイジめられてるのに、そんなにうれしそうな顔するの……？）
　そう思いながら、自分自身も幼い性器をじっとりと濡らしていることに、小夜歌はまだ気付いていない。
　一方で秋水は、愛液をすすり、肉襞を甘く噛みながら、舌で膣口を執拗にえぐった。かと思うと、クリトリスの包皮を器用に口だけで剥き、過敏な肉の突起を残酷に吸引する。
　そして、右手にまだ持っていたムチの握りを、ずぶずぶと美由紀のそこに侵入させた。
「んムーッ！」
　丸みをおびた硬いゴムが、美由紀の敏感な粘膜をえぐる。秋水はクリトリスの吸引を続けながら、右手でそれを激しくピストンさせた。
（ヒドい……あんなことされたら、ママ、死んじゃう……！）
　そう思いながらも、小夜歌は、体を動かすことも、声をあげることもできなかった。視覚情報によってかつてないほど刺激された牝器官が、幼い体には受けとめられないほどの感覚で、小夜歌の体を縛り付けていたのだ。
（アタシも……ママみたいに、イジめられたい……）
　いつのまにか、小夜歌の右手は円の肩から離れ、足と足の間の、女の子にとってもっとも大事な部分を刺激していた。
（ヘンな感じ……スゴいの……手が止まんないよォ……）
　昨日まではただの排尿器官でしかなかったそこが、服の上からこすりあげる自身の手の動きによって、名状しがたい感覚をつむぎ上げている。
　しばらく、粘膜と粘膜が、体液を分泌しながら互いを摩擦する。じゅるじゅるという湿った音が、地下室に響いていた。その音のリズムが、次第に早まって行く。
「ぐ……おぉッ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　秋水が、獣のような声をあげた。そして、一層腰の動きを激しくする。
「で、出る……出すぞ、このメス犬め！」
　美由紀の喉の奥で、秋水の精液がはじけた。
「うぷッ！　んむ……ッ」
　逆さ吊りの状態では、さすがにその大量の体液を飲み下すことはできなかったのか、美由紀の口から、白濁した粘液が次々とこぼれおちる。
　それは、逆さまの美由紀の顔をドロドロに汚し、栗色の髪の毛を伝って、コンクリートの床に小さな水溜りを作った。
（ママ……）
　小夜歌のパンツは、まるでおもらしをしたように、ぐっしょりと濡れていた。

---

　そのあと、天井から下ろされた美由紀は、手を後に縛られたまま、背後から犯された。
「ああァっ！　イイーっ！　オマ×コ、オマ×コが気持ちイイですッ！」
　膝を床につき、頬を床にこすりつけながら、秀麗な顔に似合わない卑猥な言葉で快感を訴える美由紀。
「行くぞ」
　そんな両親の様子を、まるで石になってしまったかのように動かずに見つめている小夜歌と円は、遼の言葉にびくっと体を震わせた。今まで背後にいたはずの兄の存在を、すっかり忘れていたのだ。
「アレが終わると、気付かれるかもしれないだろ」
　そう言って、扉を元通りにし、階段を上りだす。
「お兄ちゃん、アレって、なに……？」
　ドアの奥から漏れる声が気になるのか、ちらちらと後ろを振り返りながら、円が遼に訊いた。
「セックスさ」
　面白くもなさそうに、遼は答えた。
「せっくす？」
「そうさ。親父のあそこから、白いのが出たろ。あれを、お前等のママの腹の中に注ぎ込むんだ」
「……それで、赤ちゃんができるの？」
　学校かどこかで、多少の性知識を仕入れていたのか、円が訊いた。
「一応そうだけど、あの二人は違う」
「え？」
「親父は、パイプカットしてるからな」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「？」
　円や小夜歌には、遼が何を言っているのか分からない。
　そんな会話をしているうちに、三人は子供部屋に戻っていた。
「あの二人はな、子供が欲しいとか、そーいうんで、ああいうことをしてんじゃないんだ」
　まだどこか夢を見ているような目つきの二人を部屋に入れ、ドアを閉めながら、遼は言った。
「キモチイイから、やってんのさ。ママも言ってたろ。キモチイイって」
　にやり、と遼の口が歪んだ。ぞっとするような笑みだ。
「じゃあな、お休み」
　その嫌な笑みを口に浮かべたまま、遼は自室へと去って行った。
　二人は、呆気に取られたように顔を見合わせ、そしてのろのろとお互いのベッドに身をもぐらせた。結城家の子供部屋は広々としており、二人分のベッドを別々に置いても、充分な余裕があるのだ。
「おやすみ」
　硬い声でそう告げて、小夜歌は枕もとのスタンドのスイッチを消した。円は、何も言わずに小さく肯くだけだった。

　――眠れない。
　眠れなかった。
　体の芯が疼き、胸が切ない。
　小夜歌は、円に知られないように、ベッドの中で、パジャマの下とパンツを脱ぎ捨てていた。両方ともアソコに当たっていた部分が濡れ、はいたままだと風邪をひいてしまいそうだったのだ。明日の朝、どうにかして、円が起きる前に着替えて、洗濯機の中に放り込まなくてはならない。
（ア……）
　身じろぎすると、剥き出しの小さなお尻が毛布やシーツとこすれ、その感覚がさらに小夜歌の目を冴えさせる。
（イヤ……こんなのイヤ……イヤぁ……）
　この年齢の女の子特有の潔癖さが、自分自身の体の変化に、抗議の悲鳴をあげていた。しかし、それは儚い抵抗でしかない。
　手が、膨らみかけた胸と、そしてじっとりと蜜をたたえたあそこに伸ばされる。
　胸の突起に触れると、ぴくんと体が動いてしまう。そこは、硬く尖っていた。
　自分自身の両手に、大事な部分を犯されながら、小夜歌は声にならない声をあげる。
（イヤだよォ……イヤ……助けてェ……）
　しかし、もはや誰に助けを求めればいいのか、小夜歌には分からない。
　母親も父親も、この未知の恐怖に属する存在なのだ。兄にいたっては、その未知の領域

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

に自分たちを突き落とした悪魔のようなものである。
（アアアアァ……）
　指がぎこちなく股間をまさぐり、胸を揉む。強すぎず、弱すぎず、ちょうどいい刺激を、文字通り手探りで小夜歌は探っていた。
（アタシ、おかしくなっちゃう……バカになっちゃうよォ……）
　それでも、小夜歌の指は止まるどころか、未発達の性感を少しでもさぐりだそうと、ますます貪欲になるばかりだ。
「お姉ちゃん……」
　びくっ、と小夜歌は体を起こした。
　いつのまにか、円が小夜歌のベッドの枕元に立っている。窓から入る月明かりに照らされたその女の子のような顔は、今にも泣き出しそうに見えた。
　そして小夜歌は、一瞬遅れて、円がパジャマのズボンとブリーフをずりおろし、その小さなペニスを剥き出しにしているのを見て取った。
「バ、バカっ！」
　小夜歌は、思わず叫んでいた。
「何してるのよ！　は、早くしまってよォ！」
　円を頭ごなしに叱りつけるのは、いつものことである。しかし今回の小夜歌の声は、ヘンに上ずっていた。
「だって……ボクのコレ……ずっとこんなになっちゃって……元にもどんないよォ……」
　そう言いながら、くすンくすンと鼻を鳴らし始める。
「……」
　いつもなら、泣き虫、の一言を投げつけるだけの小夜歌だったが、今は違っていた。なぜか、弟のその部分から目を離すことができない。
「イタい、の……？」
　訊きながら、指をソレに伸ばす。
「イタくないけど……あッ！」
　円は、声をあげていた。小夜歌の指が、絶妙に感じるところを撫でたのだ。
　それだけの刺激で、円はへたりこんでしまった。
「円？」
　びっくりして、小夜歌がベッドから身を乗り出す。
「お、お姉ちゃん……ズボン、どうしたの？」
　円は、びっくりしたように目を見開いて、姉の下半身を見つめた。
「え……あ、イヤあ！」
　いつのまにか毛布がずれて、小夜歌の裸の下半身が剥き出しになっていたのだ。小夜歌は、毛布をかき集めるようにして腰を隠し、幼い顔を真っ赤に染めてうつむいた。
（見られた……！）

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

勝気そうな小夜歌の目に、じわっと涙がにじんできた。よりによって、いつも気弱げに自分の後ろについてくるだけの弟に、自分の一番恥ずかしい姿を見られたのだ。
そんな姉の様子を、円はじっと見つめている。
「お姉ちゃん……だれにも言わないから……」
円が、立ち上がりながら言った。その股間の包茎ペニスは、いまだに鋭い角度で天を向いている。
「だれにも言わないから……ママがパパにしたみたいに、して……」
「えっ？」
驚いて顔を上げると、視界にまたペニスが飛び込んできた。
「ねえ、してよ……」
いつもだったら、手を上げてしまいそうなほどに生意気な円の口調に、小夜歌はなぜか逆らえなかった。
こくン、と肯き、ベッドから下りて、弟の前に正座をする。
（アタシ、イジめられてる……イジめられて、弟のオチンチン……なめるんだ……）
かつてないほどのゾクゾクとした快感に突き動かされ、小夜歌は円の細い腰に両手を当て、その小さなペニスを口に含んだ。脳裏に浮かぶ母親と自分の姿が重なる。
「ああっ！　お姉ちゃん！」
びくッ、と円の体が痙攣し、口の中のペニスが跳ねあがるような感覚があった。
（アタシも……ママみたいに……）
小夜歌は、最初から速いペースで、頭を前後に動かした。フェラチオの洗礼を受けるには幼すぎる肉茎が、実の姉の唇によって咥えられ、その唾液にまみれる。
（ヘンな味……）
弟のペニスの味は、想像していたどんなものとも違っていた。味よりもむしろ匂いが、強烈な刺激となって口腔に広がっていく。
それでも、小夜歌は行為をやめず、まるで何かに取りつかれたように、円のソレをしゃぶり続けた。
小夜歌は正座したまま膝を開き、右手を未成熟なスリットに当てていた。そして、先ほど中断していたことの続きを、弟のペニスにしゃぶりつきながら再開する。
「お、お姉ちゃん、お姉ちゃん！」
円は、いつもの気弱で頼りない弟に戻っていた。
「スゴい、スゴいよぉ！　お姉ちゃん、ボク、ボク……ッ！　んあぁッ！」
かくかくと膝を震わせ、涙さえこぼしながら、円は快感を訴えた。
「あーッ！　出る、出ちゃうよ！　セーエキ出ちゃうよォ！」
それを聞いても、小夜歌は口を離そうとしない。
「あ、あ、ヤあああァーッ！」
円は少女のような悲鳴を上げ、姉の口の中に精液を放っていた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　それは、円にとって初めての射精だった。
　同時に、小夜歌も、生まれて初めてのエクスタシーを、その幼い体全身で受け止めていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第５章

　遼が、半分しか血のつながらない弟妹を、例の地下室に導いてから、半年が過ぎた。
　あのあと、遼は小夜歌に、地下室に通じる階段のドアの合鍵を渡していた。小夜歌は、顔を真っ赤にしながらも、ひったくるようにしてその合鍵を受け取った。
　両親の行為を盗み見たあと、二人がどのような行為に耽っているのか、遼は正確には知らない。それでも、だいたいの予想はついた。
　その弟妹の母親である美由紀が、洗濯物を庭で干している。
　美由紀は、明るい黄緑とオレンジを基調とした普段着に、淡いピンクのエプロンを身につけていた。若々しい笑顔で、ビートルズのナンバーをハミングしながら家事をしているその姿は、「若奥様」という言葉が一番ぴったりくる。遼と十歳以上も違うとは思えない。
　遼は、そんな美由紀を自室の窓から見るとはなしに見ていた。
　平日である。が、ここのところ、遼はきちんと学校に行っていない。小夜歌と円は学校に行っており、そして、三人の父親である秋水は出張に出かけていた。
「遼さぁん」
　遼の視線に気付いたのか、庭から、美由紀がそう呼びかけた。美由紀は、遼のことをいつもそう呼ぶのだ。
「ちょっとあとで、時間くれる？」
「いいですよ」
　必要以上に丁寧な口調で、遼は答えた。
　少しして、美由紀が来た。
　きちんとノックをした後、外の秋晴れの空そのままの明るい表情で、部屋の中に入ってくる。
「何ですか？」
　遼は丁寧に、しかし、いささか無愛想に言った。
「えっとね、肩揉んでくれるかな？」
　ちょっと照れたように笑いながら、美由紀は言った。
「……ええ、いいですよ」
　そう答えて、遼は、手近な椅子に座った美由紀の背後に立った。両手を細い肩の上に置き、指に力をこめる。
「……」
　美由紀の肩は、揉む必要もないくらいに柔らかかった。服の生地を通して、その体温が遼の手に伝わってくる。ゆるいウェーブのかかった、肩の上で切りそろえられた栗色の髪からは、控えめな香水と、かすかな汗の匂いがした。
「……遼さん」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　無言で肩を揉みつづける遼に、美由紀が言った。
「あの子達に、見せたでしょ？」
「え？」
　不覚にも、遼は絶句してしまった。美由紀の、いかにも何でもなさげな言葉に、不意をつかれたのだ。
「見せたって、何を……」
「地下室よ」
　歌うような口調で、美由紀が続ける。
「いけない人ね……いくらなんでも、あの子達には早すぎるんじゃない？」
「……」
「なんで、そんなことしたの？」
「……」
「もしかして……」
　美由紀は、肩越しに遼の顔に視線を投げかけた。目が、悪戯っぽく笑っている。
「お母様の代わりに、私たちに復讐をしたとか？」
「それは……！」
　思わず大きな声を出してしまい、そのことに恥じたように、遼はうつむいた。そして、ささやくような声で言う。
「それは、違いますよ。お袋は、関係ない」
「安心した」
　くすくすと、美由紀は明るく笑った。
　しかし、今の話の内容は、とても笑いながらできるようなものではない。つまるところ美由紀も、健全な常識人というわけではないのだろう。
「でも、それじゃどうして、あの子達を地下室に案内したの？」
　そう言いながら、美由紀は、まだ自分の肩に乗せられてる遼の両手に、自分の手を重ねて置いた。
「……好きでやったことです」
　遼が、ふてくされたような口調で、答えにもならない言葉を答える。
「そう……好きで、ね……」
　美由紀は、遼の両手をそろそろと自分の胸に導いた。
「み、美由紀さん？」
　遼はそう言いながらも、美由紀の行為に逆らえない。
　遼は、両肩から美由紀の胸に手を回す姿勢になっていた。
　しばらくためらった後、遼は指先に力をこめた。
「ンッ！」
　美由紀が声を漏らすのも構わず、服の上から激しく胸をこね回す。遼の手には少し余る

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

くらいの、ほどよい大きさの乳房が、何枚かの布の下で形を変えているのが分かった。
「んんん……あン……ら、乱暴ね……」
　頬を上気させながらも、妖しい笑みを浮かべた美由紀は、肩越しに遼の顔を見つめた。遼は、何かに耐えるような顔で、美由紀の胸をもみしだいている。
　するり、と美由紀は遼の手から逃れるように立ち上がった。
　そして、不意をつかれたような表情の遼の目の前に立ち、その両手を遼の首に回す。
「そんな怖い顔しないで……リラックスして……」
　優しい声でそう言って、美由紀は柔らかくつややかな唇を、遼の唇に重ねた。
「んん……ん……」
　美由紀の舌が口内に侵入し、小刻みに動いて口腔と舌を刺激する。遼は、全身の力が抜けるような感覚に襲われた。
　ちゅっ、と最後に軽いキスをして、美由紀は唇を離した。
「遼さんは、初めて？」
　小首をかしげながらそう言う美由紀に、なぜか遼は素直に肯いていた。
「じゃ、続きはきちんとベッドでしましょ」
　そう言って、美由紀は遼にもう一度キスをした。

---

　ベッドの上で、トランクス一枚の遼の肌の上を、やはり下着姿の美由紀の唇が這いまわっている。
　美由紀は、健康的な普段着の下に着ているのが信じられないような、黒い揃いのブラジャーとショーツを身につけていた。それは、まだ少女の面影のある顔にはちょっとアンバランスだが、美由紀の肌の白さには良く映えて見える。
　そのしなやかな体には少しのたるみもなく、ボディラインは溜息が出るほど美しい。
　その体を、遼の上半身に覆いかぶせるようにして、美由紀は愛撫を続けていた。
　繊細な指が遼の体を撫で、唇が、肌を刺激する。
「ん……っ」
　思わず、遼は息を漏らした。美由紀が、遼の左の乳首を口に含んだのである。意外と逞しい遼の胸板が、わずかに跳ねる。
　その動きをやさしく押さえるように、両手で肩から脇にかけてを撫でまわし、美由紀は舌で遼の乳首を転がした。そして、舌を回転させるようにして、乳輪の部分を丸く刺激する。
　美由紀が唇を離したときには、遼の左の乳首ははっきりと立っていた。
「んふっ」
　美由紀は、とまどいを隠せない遼の顔をみてちょっと笑って、今度は右の乳首を同様に

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

愛撫した。
　そして、今度は唇を離さず、ゆっくりと下にずらして行く。
「まずは、お口でしてあげるね」
　そう言いながら、トランクスの布地の上から、遼のペニスを両手で刺激する。そこは、美由紀が触れる前から、痛いほどに硬くこわばっていた。
　美由紀は、遼のトランクスをそっとずらした。
　たくましく反り返った陰茎が、その姿をあらわす。
「あはっ、こんなになっちゃって……」
　うれしそうに目を細め、頬を染めながら、美由紀はその先端にやさしくキスをした。
「あん……すごく熱い……」
　そして、白い両手の指を、ぴくぴくと脈打つシャフトに添えて、亀頭の部分に何度もキスを浴びせながら、そこを支点にゆっくりと体を回転させていく。
「失礼するわね、遼さん」
　そう言いながら、美由紀は膝で遼の顔をまたいだ。黒いシルクのショーツが、美由紀の動きでよじれながらも、どうにか彼女の大事な部分を隠している。恥丘の部分は黒いレースになっており、注意してみればヘアを透かして見ることができそうだ。
　美由紀はその姿勢で、遼のペニスに舌を這わせた。
　ピンク色の舌が突き出され、たっぷりと唾液を塗りつけるように、遼のその部分を舐めしゃぶっていく。
「あっ……」
　遼は、思わず頭をのけぞらせた。敏感な亀頭を、美由紀が舌の腹の部分で撫で回したのだ。
「ん……くッ……」
　こらえようとしても、どうしても声がもれ出てしまう。
　美由紀は、鈴口からにじみ出た、透明な先走りのしずくを丁寧に舐めとり、亀頭をくわえ込んだ。そして、舌で円を描くようにして、口内に収まった亀頭全体を刺激する。
「ぷはっ……どぉ？　感じるでしょ、遼さん」
　性感が高まったところで、焦らすように口を離し、美由紀が言った。その右手の指は、ぬるぬるになったペニス全体を優しくしごいている。
　遼は、返事をする代わりに、上体を起こして美由紀の股間に顔をうずめた。
　そして、夢中になって、ショーツの上から美由紀のその部分をしゃぶる。
「ああん……ダメよ、ショーツが、シミになっちゃう」
　そう言いながら、自らショーツのアソコにあたる部分を指でずらす。
　ぱっくりと開いた、鮮やかな赤色の肉襞が、姿をあらわした。そこは、遼のペニスを口にしたことで興奮していたのか、すでにきらきらと濡れ光っている。
「ね、お願い……じかに、して……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

美由紀が、右手の中指と薬指で自らのその部分をぱっくりと開き、甘えた声で遼におねだりをした。
遼は興奮に呼吸を早くしながら、再び美由紀の股間に唇をつける。
「んふっ……」
美由紀が、声を漏らした。遼がの舌が、容赦なく美由紀の靡肉をえぐったのである。
「あン、んんン……あはッ……。そう、上手よ、遼さん……。あぁン、感じちゃう……」
美由紀はうっとりとした顔で遼の腰のところに頭を横たえた。
「はぅッ……あああああああッ！　あン！　そこ、そこォ！」
そして、遼の舌と唇が、敏感な肉の突起に到達すると、あられもない声で快感を訴える。
「ああ、イイ……イイわ……きもちイイ……」
夢見るような声でそう言いながら、美由紀はペニスへの愛撫を再開した。
若さゆえの硬度と角度を保ってるシャフトに両手を添え、白魚のような繊細な指で支えながら、愛しくてたまらないといった表情で頬ずりをする。
そして、小ぶりな口を限界まで空けて、ペニス全体をくわえ込んだ。
頬の内側をサオに当て、顔を左右にねじるようにして、ピストン運動を繰り返す。その間も、舌は休みなく動き、亀頭と陰茎の上側を刺激する。
「んぁ……」
美由紀の洗練されたテクニックは、的確に遼の感じる部分を刺激し、そのたびに遼は、クンニリングスを中断してベッドに頭を下ろしてしまう。
しかし遼は、息を荒げながらもすぐに上体を起こし、美由紀のアソコにむしゃぶりついた。美由紀の分泌した愛液と、遼の唾液による、ぐちゅぐちゅといういやらしい湿った音が響く。
一方、美由紀も、じゅぽじゅぽと音を立てながら、遼のペニスを咽の奥に届くほどのディープスロートによって責めたてていた。さらには、その指は遼の太腿を掃くように撫で、陰嚢を優しく刺激する。
とうとう、遼は上体を支えきれなくなり、ベッドの上に仰臥したままとなった。歯を噛み締め、小さく呻き声を漏らしながら、快感に絶えるように身をよじらせる。
「どぉ、遼さん……もう、ガマンできないんじゃない？」
ようやくペニスから口を離し、それでもまだシャフトを絶妙なタッチで右手でしごきあげながら、美由紀は遼の顔を振り返った。
髪を乱し、普段は前髪に隠れている秀でた額と大きな目をのぞかせた遼の顔は、びっくりするほど小夜歌に似ていた。その顔が、快感に頬を上気させ、悩ましげに眉根を寄せている。
「可愛いわよ、遼さん……」
そう言いながら、美由紀は大きく腰を前にずらし、遼の腰の上に座るような姿勢になった。そして、まるで男がマスターベーションをするような感じで、左手で遼のペニスをし

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ごき、右手で亀頭の部分を撫でまわすようにこする。
　すでに、遼のペニスも、美由紀の両手も、ぬらぬらと体液に濡れていた。
「……あぁ……あぁっ……ぅあっ！」
　一方的に攻められ、声をあげながら、まるでそれだけが最後に残った矜持であるかのように、遼は射精すまいと耐えている。
「ふふっ……いいのよ、遼さん。あたしの手の中に、遼さんの精液、いっぱい……いっぱいちょうだい……」
　熱に浮かされたような口調でそう言いながら、美由紀は手の動きをさらに激しくする。
「あああああッ！」
　遼が、大きく体をのけぞらせる。
　それが、遼の限界だった。
　痛みさえともなうような強烈な射精によって、遼の白濁液は美由紀の両手の中ではじけ飛んだ。
「あぁ……。すごい……すごいわ、遼さん……」
　何度もしゃくりあげ、大量の精液を放つペニスの感触を両手に感じながら、美由紀はうっとりとした声でそう言った。

　遼は、ベッドに横たわり、荒い息をついていた。
「遼さん……」
　そう呼びかけられて、遼はのろのろと上体を起こした。その顔は、まだ夢の中にいるかのように頼りない。普段の彼からは想像できないような、無防備な表情だ。
「ママのおっぱい、吸ってみる？」
　横座りの姿勢で、美由紀は遼にそう問い掛けた。いつのまにか、下着をすべて脱ぎ、全裸になっている。
　そして、こっくりと肯いた遼の頭を、両手で自らの右の乳房に導く。
「あぁ……」
　遼は小さく声を上げながら、美由紀の胸に顔をうずめた。そして、目を閉じ、ひどく無心な表情で、美由紀の乳首を吸い上げる。
「可愛いわ、遼さん……」
　そう言いながら、美由紀は遼の頭を撫でた。そして、まるで母親が乳児に母乳を与えるような、どこか神聖な感じのする表情で、遼を優しく抱きしめる。
　しかし、時間がたつにつれて、そんな美由紀の表情も、少しずつ、淫らな色に侵食されていった。
　遼も、ただ乳首を吸うだけではなく、硬くなった乳首を舌で転がし、甘く噛むようにして刺激する。そして、右手を余っている左の乳房を当て、ゆっくりと円を描くようにもみ始めた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「はぁ……ああぁ……あン……」
　舌と指が、乳首をいじくり、ひっぱり、はじく。そのたびに、美由紀はこらえられないように声を上げた。すでにその目元は赤く染まり、瞳はうるうると潤んでいる。
「あぅっ……！」
　美由紀が、大きく体をのけぞらせた。遼が、乳房をもんでいた右手を、いきなり股間に割り入れたのだ。
　繊細なヘアの下のクレヴァスは、すでに愛液に濡れていた。遼は、左右の乳首を交互に口に含みながら、その部分に指を這わせ、上下に動かした。
「あっ……ああァ……き、きもちイイ……」
　ぐちゅぐちゅという湿った音に、美由紀の声が重なる。
「は、遼さん……」
　濡れた声でそう言いながら、遼の頭を胸から離し、唇を重ねる。
「ん、んんぅ……」
　そして、アソコへの愛撫のお返しとばかりに、舌を遼の舌に絡め、何かを求めるように突き出された遼の舌を唇で挟み、まるでフェラチオするかのように吸い上げる。
　ちゅぽん、と音をたてて、遼の舌が解放された。
「遼さん、お願い……」
　遼のペニスに手を当てて、美由紀はおねだりした。
「お願い、遼さんのオチンチン、美由紀の中に入れて……」
　遼は肯き、太腿にまとわりついていたトランクスを脱ぎ捨てた。遼のペニスは、すでに勢いを取り戻している。
　遼は、美由紀を押し倒すようにして横にした。そして、大きく開かれた美由紀の形のいい脚の間に、体を割り込ませる。
　遼はその姿勢で、ちょっと困ったような顔で美由紀の顔を見つめた。美由紀は微笑んで、両手で遼のシャフトを優しく握り、自らのアソコに導いた。
　自らのペニスに先導されるように、遼は体を進め、美由紀の両脇のシーツに両手をついた。ペニスの先端は、すでに浅く美由紀の靡肉の中にもぐりこんでいる。
「いいわ、そのまま、腰を進めて……」
　美由紀の言葉どおり、遼は腰を前に動かした。
「あ、あああああぁ……」
　充分以上に分泌されている愛液を潤滑油にして、遼のペニスは滑らかに美由紀の中に侵入していった。
「ああァ、す、すごい……どんどん、どんどん入ってくるゥ……」
　亀頭と膣内の粘膜がこすれ、微妙なひだひだが遼のペニスに絡み付いてくる。
　その根元まで遼のペニスが美由紀のアソコに納まったとき、二人は動きを止め、互いの体を抱きしめた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、遼が、なぜか泣きそうな顔で、上から美由紀の顔を覗き込む。
「いいのよ、遼さん……このまま、動いて……」
そう言われて、遼は、ぎこちなく腰を動かし始めた。
「ああっ、あァ……そうよ……ああ、すてき……すてきよ……」
牡の本能によって、少しずつ遼の腰使いがスムーズになっていく。美由紀は、腰を浮かすようにして、遼の動きを受け止めた。
「はあぁ……あぁ……あぁン……あぅッ……あぁアッ！」
いつしか遼は、上体を立て、美由紀の腰に両手を添えて、激しく腰を動かしていた。視線を下にやると、濡れて、まるで自分のものでないような光沢を持ったシャフトが、綺麗な赤色のクレヴァスの合間を出入りしている。遼のペニスの動きに合わせて、美由紀の肉襞も愛液を滴らせながら蠢いていた。
「ああ、遼さん……きもちイイ……きもちイイの……！」
そう言いながら、美由紀は遼の体を求めるように、手を宙に伸ばす。
遼は再び上体を倒し、美由紀の裸身にかぶさった。その姿勢で、腰を動かしたまま、唇を重ねる。互いの口唇を貪るような、激しいディープキス。
「美由紀さん……」
まるで熱にうかされているような顔でそう言い、遼は美由紀の耳に口付けした。
「ああぁ〜ン」
そこが性感帯なのか、美由紀が甘い媚声を放つ。
遼は、耳朶をしゃぶり、首筋に舌を這わせ、顎といわず頬といわず、美由紀の顔中にキスの雨を降らせた。
「美由紀さん……美由紀さん……」
その合間に漏れる遼の声は、まるで子供のように頼りなかった。そんな遼の頭を、美由紀は愛しげに撫でる。
「遼さん……もっと突いて……もっと、もっと激しくしてェ……」
何度目かのディープキスの後、美由紀ははしたなく遼にそう言った。
素直に無言で肯き、遼は一層腰の動きを速める。
「あぁッ！　ひぃッ！　すごい、すごいィ……ッ！」
頭を左右に振って、美由紀がもだえた。その動きにつれ、髪が乱れ、形のいい乳房がゆれる。
「み……美由紀さん……俺、俺もう……」
遼は、切羽詰ったように自らの終焉が近いことを訴えた。
「は……遼さん……おねがい、お母さんって……お母さんって呼んで……！」
「な、何を……んあぁあっ！」
遼は悲鳴のような声を上げ、つっぷした。美由紀の膣内が、まるで別の生き物のように蠢動したのだ。ひだの一枚一枚がざわめき、すでに臨界に達している遼のペニスをさらに

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

攻めたてる。
　それでも、遼の腰は止まらなかった。美由紀の胸に顔を横たえ、荒い息をついている本人の意思とは関係なく、自動機械のように激しいピストン運動を繰り返している。
「遼さん……遼さん……あたし、あたし、もう……ッ！」
　美由紀は、そう言って遼を抱きしめる腕に力を込めた。
　どっ、と熱い液体があふれる感触が、美由紀の下半身を満たす。
「イク、イクッ……イクぅー……ッ！」
　美由紀の膣が、まるで遼のペニスを絞り上げるように収縮した。ひときわ敏感になっている亀頭が肉の襞でこすられ、遼の視界は真っ白に染まる。
「母さん……母さん……ッ！」
　気がつくと、遼はそう言いながら、美由紀の体を抱きしめていた。

「美由紀さん……」
　二人で、無言でシャワーを浴びた後、ベッドに腰掛けた遼は、美由紀にそう呼びかけた。美由紀は、すでに下着を身に付け、スカートを履こうとしている。
「なぁに？」
　普段どおりの明るい笑顔で、美由紀は遼に向き直った。
「何で、こんなことしたんですか？」
　思いつめたような顔で、遼は訊いた。
「……何でかしらね」
　ふふ、と微笑みながら、美由紀は続ける。
「小夜歌や円にアレを見せた復讐……ってわけじゃないんだけどね」
「……」
「ま、好きでやったこと、かな？」
　そう言いながら、トレーナーの袖に腕を通す。
　遼は、そんないつもの姿に戻った美由紀をじっと見つめた。美由紀は、優しい笑みを浮かべながらその視線を受け止める。
　しばらくして、遼はようやく口を開いた。
「……美由紀さん……親父と、別れてくれませんか？」
「それは……ずいぶんと唐突ね」
　目を丸くして、美由紀が言う。
「俺、知ってるんですよ……美由紀さん、あんまり心臓が丈夫じゃないんでしょ……」
「……」
「親父とあんなことを続けてたら、いつか……」
「……それで、遼さんがあたしを養ってくれるの？」
「そうしろと言うなら、そうします」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　きっぱりとした口調で、遼は答える。美由紀は、小さくため息をついた。
「遼さんの気持ちは、すごく嬉しい……あたし、遼さんのこと、好きよ」
「……」
「でもね、あたしは秋水さんとは別れられない……あたし、あの人に身も心も縛られ、繋がれているのよ」
「美由紀さん……」
「勘違いしないで。あたしは、秋水さんのことを、愛しているの。あの人に縛られて、繋がれて、すごく幸せなのよ……」
「美由紀さん……」
　ぐっ、と遼は言葉を詰まらせた。両手を、白くなるくらいに握り締める。
「ごめんなさい、遼さん……」
　そう言って、美由紀は遼の部屋を出ていった。
　扉を閉める音が、遼にはひどく大きな音に聞こえた。

---

「それをね、あたしは見てたのよ」
　喫茶店での小夜歌の話は続いている。
「あの日は、体の調子が悪くて、早退してたの。で、ママがどこにいるのか探して、ベランダに出たら……あんたの部屋で、あんなことになってたわけね」
「……」
　遼は、無言である。何も、言う言葉が見つからない。小夜歌の話は、あまりにも常識や日常から逸脱している。
　それでいながら、遼は、小夜歌の話が全て真実であることを確信してしまっていた。それどころか、小夜歌の言葉がきっかけとなって、次々と断片的な記憶が蘇っていくような気さえする。
　一方、円は、その可愛い目を明らかに欲望に潤ませてながら、小夜歌の話を聞いていた。
「ママとあんたのことは、驚きはしたけど……何となく納得もしたわ。あの家に住んでいた人間で、マトモなのは一人もいなかった。あたしを、含めてね」
「……」
「で、そのすぐ後、あんたはいなくなったわ……。家出したわけね」
「家出？」
「そう。それで、東京でかなり危ない連中と付き合ってたみたい。詳しくは聞いてないし、聞きたいとも思わなかったけど」
　遼は、乾の顔を脳裏に思い浮かべた。
「で、あんたがこの街に戻ってきたのは、ちょうど一年くらい前……五年くらい、行方を

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

くらませていたことになるわね」
　小夜歌は、すっかり冷めた紅茶で咽を潤し、そして話を続けた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第６章

　一年前の、春。
　遼は、中学校の校門の前に立っていた。
　路上に駐車している、軽快そうなツードアの外車にもたれかかるような姿勢である。
　黒いワイシャツに、やはり黒いスラックス。そのスラックスのポケットからは、キーホルダーに繋がっているらしい細身の鎖がのぞいている。伸びた前髪が、表情のほとんどを隠している。どう見ても、まともな職業の人間ではない。
　学校の方でも、警察への通報を真剣に検討しただろう。しかし、遼はほどなく目的の人物に出会うことができた。
「お兄ちゃん！」
　学生服姿の円が、大きな声を上げた。まだ声変わりしていないのか、まるで同年代の女の子のような声である。栗色の髪が男子中学生としてはやや長めなため、美由紀にそっくりのその顔も、まるでショートカットを伸ばしかけた少女のように見える。
「円……。元気か？」
「げ、元気、だけど……どうしたのお兄ちゃん。今まで、どこ行ってたの？」
　遼に小走りで駆け寄り、目に涙を溜めながら、円が訊く。
「ママ、心配してたよ……もちろん、ボクもだけど」
「親父と小夜歌は、そうでもなかったろ？」
　遼がそう言うと、図星なのか、円はちょっと言葉に詰まったようだった。
「そうかもしんないけど……でも、内心では心配してると思うよ。多分」
「ありがとよ……」
　遼は軽く笑みを浮かべ、そして、すぐに真剣な顔に戻った。
「美由紀さん、亡くなったんだってな」
「うん……おととしの、冬……」
「そうか……」
　きり、と遼の口元から音が漏れた。きつく歯と歯を噛み合わせた音だ。
「あの人には、いろいろ迷惑かけたからな……ずいぶん遅れたけど、墓参りしようと思ったんだ。案内してくれるか？」
「うん、いいよ。……あ、だからお兄ちゃん、そんな真っ黒な格好なの？」
　円の無邪気そうな言葉に、遼は苦笑いした。

　さわさわと風に葉桜が鳴る中、遼は墓参を済ませた。
　街から少し離れた、閑静な墓地である。駐車場には、遼のもの以外、車は一台も止まっていない。

Neon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　遼は、駐車場の端にある自動販売機で缶コーヒーを二つ買い、一つを円に投げ渡した。そして、運転席に滑り込む。
「ありがと」
　そう言いながら、円も助手席に座った。
「お兄ちゃん……家に、戻ってくるの？」
　シートにもたれ、ブラックの缶コーヒーを飲んでいる遼に、円は声をかけた。
「まさか」
　遼が、軽く苦笑いをする。
「今更、親父と一緒に暮らすつもりはないよ」
「ふぅん……」
「小夜歌も、その方が喜ぶだろうしな」
「そうかなァ……」
　円は、フロントガラス越しに視線を宙にさまよわせた。五月晴れの空の中、カラスが呑気そうに飛んでいる。
「お兄ちゃんが気にしてるほど、お姉ちゃんはお兄ちゃんのこと、嫌ってないと思うけど」
「どうだかな」
　そっけなくそう答えて、遼はちらりと円を盗み見た。その視線が、遼の方に向き直った円の視線とぶつかる。
「おっきくなったな、円……」
　柄にもなく、照れたような笑いを口元に浮かべながら、遼は言った。
「お兄ちゃんが出ていった時、ボク、まだ小学校三年生だもん」
「そうだな……。それにしても、ますます美由紀さんに似てきた」
　遼のその言葉に、円は、はっとするような笑みを浮かべた。その可愛らしい顔に似合わない、妖艶な、とでも言った方がいいような微笑みである。
「……ボクね」
　どこか濡れたような声で、円は語りだした。
「ボクね、ママの代わり、してるんだ……」
「なに……？」
　遼が、前髪に隠された眉を曇らせる。
「見る？」
　そう言いながら、円はかすかに頬を赤く染め、制服の上のボタンを、細く白い指で丁寧に外し始めた。
　そして、完全に学ランの前をはだけると、今度は純白のワイシャツのボタンを、上から順々に外していく。
「円、お前……」
　遼は、不覚にも絶句していた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

円はワイシャツの下の胸に、白いサラシの布を巻きつけていたのである。
「暑苦しいから、これ、外すね」
そう言いながら、サラシをくるくると取り去っていく。
その下から現れたのは、まだ成長途上とはいえ、はっきりと分かるほどに膨らんだ乳房だった。同年代の、早熟な少女のそれと、ほぼ同じくらいのボリュームを有している。
もともと円は、骨格や肉付きからして、男くささが微塵もない上、喉仏も出ていない。その姿はまるで、中学生の女の子が、戯れに学ランを着て男装しているようにしか見えなかった。それも、とびきりの美少女が、だ。
「それは……」
「パパが、ボクにいろいろ、お薬を注射してね、それでこうなったの」
恥ずかしそうに顔をうつむかせ、それでもまだ微笑みを浮かべながら、円は言った。
「最近じゃ、ぜんぜん薬は使わないんだけど、おっぱいがどんどんおっきくなってるんだ……。パパは、フカギャクキに入ったから、もう薬は必要ないんだって言ってた。何だろうね、フカギャクキって」
（不可逆期……？）
遼は、声に出さないように呟いた。
（もう……もとには戻らないということ、か……）
「お兄ちゃん、目がコワイよ」
「……親父は……お前を抱いたのか？」
遼の問いに、円は、こくんと肯いた。
「ボク、ママの代わりだからね」
遼は、空き缶を握る拳が白くなるほど力を込めた。ぱき、という音とともに、スチールの缶がへこむ。
「……学校は、大丈夫なのか？」
「体育の授業や、身体検査なんかは、パパが書類を用意してくれたから、どうにかなったけど……でも、もうダメだと思うよ」
「ダメ？」
「胸はなんとか隠せても、やっぱり、何か違うって分かっちゃうからね。多分、そろそろイジメか何かにあっちゃうんじゃないかな」
あっけらかんとした口調で、円は言ってのけた。
「でも、そうなったら、あんまりヒドイ目に合わないうちに、登校拒否するんだ。そしたら……パパは、ボクのオチンチン、手術して切っちゃうんだって、言ってた」
ふふふっ、と円は、屈託のない笑みを漏らした。明るい、そしてどこかしら壊れた笑い声だ。
「そしたらボク、本当に女の子になっちゃうのかなあ……」
遼は、自分でもうろたえるくらいに、荒い息をついていた。歯が、きりきりと音をたて

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ている。
　カラスが、意外なほど近くで、一声鳴いた。

---

　数週間後、結城秋水の死体が、山道の路肩で半壊したハイヤーの中で、発見された。

---

　しとしとと、小さな音を立てながら雨が降っている。
　すでに、街は梅雨に入っていた。
　遼の部屋。
　椅子に座る遼の正面に、小夜歌が立っていた。黒いセーラー服にフレアスカート、そして赤いスカーフという制服姿だ。
　ちょうど、二人の父、秋水の納骨が終わったところである。が、遼は出席しなかった。普段、何の付き合いもない親戚達が、秋水の遺体の入った棺を霊柩車に積むのを、窓から眺めていただけである。
　その親戚達も帰っていった。そして、小夜歌がこの部屋を訪れたのだ。
　遼は、小夜歌から目をそらすように顔を横に向け、相変わらず窓の外を見ている。
「発表じゃ、事故死だろ。事故による、全身打撲」
　遼が、囁くような声で言った。
「……あたしは信じないわ」
　小夜歌は、きつい目で、遼の横顔を睨んでいる。
「あいつは、あんたに殺されたのよ」
「……あいつ呼ばわりか。仮にも親父だぜ」
　ふっ、と遼は、唇を笑みの形に歪めた。
　そして、その表情のまま、ゆっくりと小夜歌に向き直る。
「で、その『あいつ』が俺に殺されたんだとしたら、小夜歌はどうするんだ？」
　そう言いながら、遼はすっくと立ち上がった。その動きに、びくっ、と小夜歌の体が震える。
「敵討ちでもするのかよ」
「まさか」
　身のうちから湧き上がってくる震えを押し殺すように、小さな拳を握り締めながら、小夜歌は言った。
「ただ、確かめたいだけよ。あたしの家族とやらが、どんなにメチャクチャなものかってことをね」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……」
　遼は、ゆっくりと小夜歌に歩み寄った。その顔からはあらゆる表情が消え、長い前髪の間からのぞく目が、半目に閉じられている。
「な、何よ……」
　小夜歌は、振り絞るようにそう言った。その声がかすかに震えている。足がすくんで動けない様子だ。
　遼は、右腕で小夜歌の左の腕を取っていきなり引き寄せた。
「んッ！」
　そして、左腕でその細い体を抱くようにして、強引に唇を奪う。
「んんッ、んッ、んんーッ！」
　小夜歌は、遼の腕の中で必死にもがいた。しかし、遼は左手で小夜歌の後頭部を押さえ、左右の腕でがっちりと動きを封じている。
「ッ！」
　不意に、遼は口を離した。その口の端から、赤い血が一筋垂れている。口内に侵入した遼の舌に、小夜歌が噛みついたらしい。しかし、遼の腕は小夜歌の体を絡め取ったままだ。
「な、何すんのよッ！」
　小夜歌は勝気に叫んだ。しかし、その切れ長の大きな目の端には、さすがに涙が溜まっている。何と言っても、まだ中学三年生なのだ。
「どういうつもり？　離してよ！　早く離してっ！」
　そう言いながら、体と体の間に挟まれた右腕で、どうにか遼の体を押しのけようとする。しかし、遼の体はびくともしない。
　と、いきなり遼は小夜歌の体を床に投げだした。
「あっ！」
　厚手のじゅうたんが敷かれているとはいえ、遼の力は容赦がなかった。倒れた衝撃で、小夜歌の動きが止まる。
　床に尻をつき、両手で体を支えている小夜歌を、遼はのしかかるようにして押し倒した。
「や、やめてよ！　やめて！　いや、いやーッ！」
　そんな悲鳴に構わず、遼は左手一本で小夜歌の両手首を握り、彼女の頭の上で床に押し付けた。そして右手を、小夜歌の白く細い首に当てる。
「ひっ……」
　小夜歌は小さく悲鳴を漏らした。遼の指に、強く力が込められたのだ。
（殺される……！）
　恐怖に、小夜歌は全身を強張らせた。
　と、遼は右手を離し、優しく小夜歌の頬を撫でた。
「え……？」
　小夜歌が目を見開いて驚くその隙に、遼は素早く右手を動かし、小夜歌のフレアスカー

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

トのホックを外した。そのまま、強引にスカートを引き摺り下ろす。
「あ、や、ヤダ、ヤダーっ！」
　まるで一度も日の光を浴びたことがないような、白い太腿があらわになる。その付け根には、白いシンプルなデザインのショーツがあった。
　遼の意思がどこにあるのかを知った小夜歌は、スカートを膝にまとわりつかせたまま、きつく足を閉じ合わせる。
「んっ！」
　小夜歌は、思わず声を上げてしまった。遼の指が、セーラー服のすそをはだけ、脇腹をくすぐったのだ。
「や……ヤダぁ……さわらないで……！」
　小夜歌の抗議の声に耳を貸す様子もなく、細くしまったウェストやへその周囲などを、指の腹や爪の先などで、さわさわと撫でていく。音楽家が楽器を操るよりも繊細で微妙な手つきが、小夜歌の早熟な官能を炙ってゆく。
「あぁっ……」
　小夜歌が、絶望的な声を上げる。
　遼が、セーラー服を大きくたくし上げ、ブラジャーに包まれた胸を剥き出しにしたのだ。
　そのカップを軽くひと撫でして、遼はブラのフロントホックを片手で器用に外す。
「あぁっ……バカ！　やめてよぉッ！」
　そう言う小夜歌の声は、もはや泣き声に近い。
　遼は、ブラのカップをのけた。手のひらにちょうど収まるくらいの小ぶりな乳房の頂点で、桜色の小さな乳首がつつましやかに顔を覗かせている。
　ぎゅっ、と力を込めて、遼が小夜歌の胸のふくらみに指を食い込ませた。
「いたぁい！」
　敏感な部分を乱暴にされて、小夜歌が涙をこぼしながら叫ぶ。
　一転、遼は、右手の指で、小夜歌の左の乳首の周りを、優しく撫でた。
「うン……」
　その絶妙なタッチに、小夜歌は思わず声を上げていた。
　遼は、触れるか触れないかの微妙な感触を維持しながら、五本の指で小夜歌の左の乳房全体を愛撫する。
「やめて……やめてよぉ……」
　小夜歌の声から、次第に力が失われていった。その代わりに、だんだんと呼吸がせわしくなっていく。
　遼の指が、小夜歌の乳首を優しくつまみ、鳥がエサをついばむような感じで引っ張り、刺激する。
「ンッ……ん……んふ……んんン……」
　小夜歌の意思とは関係なく、まるで甘えているように鼻が鳴ってしまう。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

再び、遼は小夜歌の唇に自らの唇を重ねた。
唇の間を割り、歯をこじ開けるようにして、口内に舌を侵入させる。そして、舌に舌を絡め、口蓋を細かくくすぐる。
小夜歌は、全身から力が抜けていくのを感じていた。
（あぁ……ダメ……これ以上されたら……もう……）
いつの間にか、遼の右手はショーツに潜り込んでいた。小夜歌は足を閉じて抵抗するが、その力は哀しくなるくらいに弱々しい。
遼の中指が、縦に割れたスリットを強引に這い進む。そこは、すでに熱いぬめりを分泌していた。
中指を、割れ目に沿って上下に動かす。
「んんっ……んん！　んん、ん、んんんん〜ン……」
ディープキスによって口腔をなぶられながら、小夜歌は明らかに快感による声を漏らした。
遼が、自分と小夜歌の唾液に濡れた唇を離す。
「お願い……もう……もう、やめて……」
自分を無表情に見下ろす兄に、妹は涙声で訴えた。
「もう、いいでしょ……お願いだから……」
恐怖と屈辱にその切れ長の目を濡らす小夜歌の顔は、ぞくりとするほど美しかった。普段が勝気な分、その被虐美はかえって男の獣欲を燃やさずにはいられない。
しかし、小夜歌自身は、全くそんなことには気付いていなかった。
「はァあっ！」
小夜歌は、体を弓なりに反らせた。遼の指が、さらに激しく小夜歌の幼い秘部を刺激し始めたのだ。
暗い赤色の、毛足の長い絨毯の上で、黒いセーラー服をまとった白い裸身が、陸に上げられた魚のように跳ねる。
遼は、そんな小夜歌の首筋にキスの雨を降らし、さらに頭を下に移動させ、剥き出しの乳房の間に顔をうずめた。まだ青い果実を思わせる胸の肌触りを頬で感じ、その頂点にある乳頭を咥える。
「やめて……やめてよぉ……」
小夜歌の声は、ますます弱々しくなる。
そして、次第に大きくなるぐちゅぐちゅという湿った音が、小夜歌の耳に届いてきた。
「イヤ、イヤあああああぁぁぁぁぁぁ……」
自分自身の体の浅ましい反応に、小夜歌は左右に首を振った。しかし、円との禁じられた遊戯によって、あまりにも早く目覚めさせられていた小夜歌の性感は、遼の巧みな指使いの前にあっけなく高まってしまう。
「濡れてるぞ、小夜歌……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　ことさらに音を大きく響かせるように指を動かしながら、遼が言った。その言葉に、小夜歌は細い声で泣き出してしまう。
「ひっ……ひぃっ……ひあっ……いっ……はぁッ……」
　しかし、その泣き声も、次第に甘く濡れたものになってしまうのだ。
（だめ……あたまが、ぼぉっとしてきて……なにも、かんがえられない……）
　いつしか、小夜歌の両手は遼の左手から解放されていた。しかし、もはや小夜歌に遼を押しのける気力は残っていない。
「はぁっ……はあぁン……はぅン……んんんんんんン……ッ」
　両手をだらしなく投げ出し、遼によって与えられる快感に体を震わせ、主人に甘えるペットのような、媚を含んだ声を漏らすだけだ。
「あ……」
　愛撫が中断され、小夜歌は空ろな目を遼に向けた。
　遼は、小夜歌の下半身からスカートとショーツを取り去り、長くしなやかな両脚を大きく割り広げていた。そして、その中心部に顔を近づけていく。
「やめ、て……」
　とんでもないところに兄の顔を見つけた小夜歌は、力なくいやいやをして、両手で遼の頭を押さえた。しかし、遼を止めるだけの力は、その両手に宿っていない。
「あぅっ！」
　びくん、と小夜歌は体を痙攣させた。すでに愛液をたたえているクレヴァスを、遼の舌が舐め上げたのだ。
「ああ……イヤ……そんなとこ……こんなの、イヤぁ……」
　そんな言葉に構わず、遼はまるで捧げ持つように両手で小夜歌のお尻を支え、本格的なクンニリングスを始める。
　わずかにほころびている秘肉を、強引に割り広げるように舌でえぐり、左右に展開する肉襞を丁寧に舐めしゃぶる。
「イヤ……あああっ！　あうン、んんんっ、んはぁっ！」
　初めて体験する性器への口唇愛撫に、小夜歌ははしたなく声を上げ、身をよじらせた。
「やめて……やめて、お兄ちゃん……これ以上されたら、あたし……あたし……ッ！」
「どうした？」
　笑みを含んだ声で、遼は言った。そして、すぐに顔を戻し、溢れる蜜を舌で受け止め、それを塗りたくるようにアソコ全体を舐めまわしたかと思うと、舌先を硬く尖らせて膣口に浅く出し入れする。
「あ、あたし……おかしくなっちゃう……バカになっちゃうよォ！」
　遼は、小夜歌の秘所に口を付けたまま、くつくつと笑い、言った。
「小夜歌は、少しバカになったくらいの方が可愛いぜ」
　そして、片手で小夜歌の腰を支え、もう片方の手でクリトリスの包皮を剥き、そこに口

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

を寄せる。
「あああああああァーッ！」
　小夜歌が、ひときわ高い声を上げた。遼が敏感な肉芽を吸引したのだ。
「おにいちゃん！　そこ、そこは……ッ！　ダメ、ダメダメダメぇっ！」
　言葉とは裏腹に、小夜歌は自ら腰を浮かし、両手で遼の頭をそこに押し付けようとする。
「あひッ！　イヤあ！　ああああッ！　ア、ア、ア、アアァーッ!!」
　小夜歌は絶叫し、まるでブリッジのような態勢で、一瞬動きを止めた。
　そのまま、ひくん、ひくんと何度か体を痙攣させ、そして不意に腰を床に落とした。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
　半開きの可憐な口から、荒い息を漏らす。
　遼は、そんな小夜歌を見下ろしながら、上体を起こした。
　そして、右手で口元をぬぐいながら、ベルトを外し、スラックスをずり下げる。
「小夜歌……」
　そして、小夜歌の脚をさらに大きく割り広げながらそう呼びかける。
「おにい、ちゃん……」
　小夜歌は、目元を赤く染め、ぼぉっとした顔を遼に向けた。部屋が暗く、遼の表情はよく分からない。
「小夜歌……」
　もう一度そう呼び、遼は一気に腰を進ませた。
「ひっ」
　激痛が、小夜歌の体を貫いた。あまりの痛みに、呼吸が一瞬止まる。
「あああああああああああああああああああああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアァーッ!!」
　そして小夜歌は、自らの処女肉に侵入する兄のペニスに押し出されるように、悲痛な叫びをあげた。
　自分の身に何が起こったのか、おぼろげながら理解したのは、さらにその数秒後だった。
「いたい……いた……あぎっ……いあ……ひぃッ……いいいいいいいッ……」
　小夜歌は、のしかかってくる遼の胸に爪を立て、かきむしった。ワイシャツのボタンが弾け飛び、剥き出しになった胸に幾条もの傷が走る。
　しかし、遼は腰を進めるのを止めなかった。小夜歌にとっては信じられないことに、あれほどの激痛をもって侵入した肉棒が、なおも秘肉を押し広げるようにして進んでくる。
「いた、い……抜いて……抜いてよォ……ッ！」
　そう言いながら胸をかきむしる小夜歌の手を、遼は両手で床に押し付けた。涙をあふれさせ、首を左右に振る妹の顔が、すぐ目の下にある。
「あああぁぁ……」
　ようやく、遼の侵入が止まった。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　まるで灼けた鉄の棒を挿入されたような熱と痛みが、小夜歌の体を貫いている。
「そうか……初めてだったのか……。円とは、してなかったんだな……」
　そんなことを、遼がつぶやいているが、小夜歌の耳には届かない。ただ、体と、そして心の痛みが、小夜歌の頭の中を赤く染めている。
（されちゃった……お兄ちゃんに……あたしの、はじめてが……）
　が、そんなセンチメンタルな思考は、すぐに頭の外に弾き飛ばされた。
　遼が、血をにじませている小夜歌のそこに、抽送を始めたのだ。
「あ……んあ……あッ……あ……」
　小夜歌は目を見開き、途切れ途切れの声を漏らした。断続的に襲ってくる、体の最奥部からの痛みに、動くことどころか呼吸さえままならない。
「やめ……て……うご、か……ない……でェ……」
　やっとの思いで、それだけを言う。
　だが、遼は動きを止めようとはしなかった。
　ゆっくりと、しかし確実な動きを、つい先ほどまで処女だった妹の体内に送り込む。
「あァ……ぁ……ア……アァ……」
　精神か神経かが、何かの限界を超えたのか、次第に、小夜歌は痛みを感じなくなってきた。
　いや、痛みはある。しかし、その痛みが全て、燃えるような熱さに変換されていくのだ。
　遼のペニスが小夜歌の粘膜をこするたびに、熱が生まれ、その未成熟な体を燃やしていく。
「あつい……あついの……あついよォ……」
　小夜歌は、まるで童女のような口調で、そう繰り返した。
「小夜歌……小夜歌……」
　遼も、荒い呼吸の合間に、囁くような声で、そう繰り返している。その腰の動きは、少しずつ速くなっているようだった。
「あァ……あつい……アソコが、すごくあついの……ンあああぁ……はァあああぁ……」
　小夜歌は、壊れた人形のように、遼になされるままだ。ただ、さらに高まる温度を、舌足らずな声で訴えている。その声は、徐々にトーンが上がっていった。
「おにいちゃん……アソコが……あつい……あついィ……！」
　今や遼は、何かに取り憑かれたかのように、腰を激しく動かしていた。痛々しく引き伸ばされた小夜歌の膣口から、血と愛液が溢れ散る。
　そして不意に、ひときわ熱い爆発が、小夜歌の膣内で弾けた。
「んあッ!!」
　短くそう叫んで、小夜歌が体を強張らせる。
　そして、小夜歌の意識は暗黒に飲み込まれた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

小夜歌は、セーラー服を着たまま、下半身を剥き出しにしてベッドの上にいた。
処女を散らされてから、どれだけの時間を、どのように過ごしたのか、ほとんど記憶にない。ただ、何度も何度も、灼けた肉棒が自らの内臓をえぐり、熱い液体を自らの中に注いでいった。
小夜歌は、その度に、半覚醒状態のままで、荒々しい快感に屈服し、声を上げてしまった。
そして今も、小夜歌はベッドの上で四つん這いになっている。いや、腕はもはや上半身を支えきれず、両肘と頬をシーツにつけた姿勢である。ただ、白く丸いお尻だけを高く上げているという、少女にとってはこの上もないほど屈辱的な姿勢だ。
しかし、今の小夜歌は、そのようなことを考えられるような状態ではなかった。
そんな小夜歌の腰に、両手が添えられる。
（ああ……またされちゃう……）
あきらめと、そして歪んだ期待感が、小夜歌の胸の内に湧き起こる。
まだ最前の行為の火照りの残る小夜歌のそこに、熱い感触が押し付けられた。
（オチンチンが……オチンチンが、また、あたしのなかにはいってくるゥ……）
ゆっくりと、ペニスの先端の丸い亀頭の部分が、淫靡な粘膜をかき分けて侵入してくるのが、小夜歌にも分かった。ただ、その挿入は、今まで放たれた精液と愛液が潤滑油になっている割には、みょうにぎこちない。
じれったくなるくらい長い時間をかけて、熱い肉茎が小夜歌の中にすっかり収まった。
「ふゥん……」
小夜歌は、我知らず、甘える猫のような声を上げていた。
両手で腰がホールドされ、ペニスによる抽送が始まる。
「んあっ、あぁァ、あッ、あぁぁあァ、ふぁァん……」
ペニスの雁首が肉襞をえぐるたびに、小夜歌は声を上げ、抽送に合わせて小さく体を前後に動かした。
それでいながら、小夜歌は、靄のかかった頭で、違和感を感じていた。
（なんだか、さっきとちがう……）
腰の動きがぎこちなく、小夜歌の動きときちんと同調していないのだ。ともすれば、ペニスがアソコから抜けそうになってしまう。
「あぁン……イヤ、もっと、もっとしてぇ」
その動きのもどかしさに、小夜歌は普段からは考えられないような媚を含んだ声を出し、自分の肩越しにペニスの持ち主に視線を向けた。
その流し目が、大きく見開かれる。
「ま、まどか……！」
小夜歌を後ろから貫いていたのは、遼ではなかった。全裸になった円が、その幼げな乳房を揺らしながら、懸命に腰を動かしていたのだ。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「円、ど、どうしてェ……？　んあッ！　あぁぁぁぁぁアッ！」
　ようやくコツをつかんだらしい円の抽送が、小夜歌の身の内でくすぶっていた官能に、ようやく火をつけた。
「お姉ちゃん……気持ちイイ？　気持ちイイんでしょ？」
　興奮に上ずった声で、円が言う。
「うれしいよ……ボク、ずっと、こうやってお姉ちゃんとしたかったんだ……あァ、お姉ちゃんのココ、すごく熱いよォ……」
　どう見ても少女のようにしか見えない顔を快感に赤く染め、円はさらに腰の動きを加速させた。いかなる薬品の効果によるものか、円の腰は、第二次性徴期の女の子のように丸みを帯びているのだが、その体毛の薄い股間から突き出ているペニスは、グロテスクなほどに鋭く反りかえっている。
「ひあぁッ！　あいッ！　イイっ！　はああぁアァッ！」
　その角度で、膣壁の上の方を攻められ、小夜歌は断続的に媚声を放っていた。
「スゴイ……お姉ちゃん、スゴくエッチな声出してる……」
　ピンク色の舌で唇を舐め、目を潤ませながら、円が囁く。
「たまには、下の口で咥えるのもいいもんだろう？」
　そう言いながら、小夜歌の前に、遼が姿を現した。前をはだけた黒いワイシャツのみをまとった、ほとんど全裸に近い格好である。
　そんな遼の顔を見上げる小夜歌の目には、いかなる理性の光も宿っていない。ただ、円と同様に、快感にその大きな切れ長の目を潤ませるのみだ。
　遼は、そんな小夜歌の前で膝をついた。妹の処女血を吸ったペニスが、半ば勃起した状態で、小夜歌の目の前にさらされる。
　小夜歌は、何も言われないうちに、そのペニスに口を寄せた。
「ふぅ……ン」
　弟のペニスによってもたらされる快感に眉根を寄せながら、けなげに兄のペニスを咥えこもうとする。
　遼は、そんな小夜歌のあごを左手で支え、右手を自らのペニスに添えて、その口腔に侵入させた。
「んぶっ、んむ、んぐ、んんんん、んふぅん……」
　くぐもった声を上げながら、何度も円にしてやったように、舌を陰茎の裏側に這わせ、唇を優しく締め付けてペニス全体を刺激する。その小夜歌の口の中で、遼のそれは急激に硬度と容積を増していった。
「うっ……うまいぞ、小夜歌」
　そう言いながら、遼はいいコいいコするように、小夜歌の黒髪を撫でてやる。
「んふン、んむ、ふゥん、んんーン……」
　小夜歌は、誉められたのが嬉しくてたまらないかのように、ますます熱心に遼のペニス

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

を愛撫した。深々と喉の奥まで咥えこみ、激しく頭を前後させ、頭を左右にねじるようにして、シャフト全体に舌を絡ませる。
「お、お姉ちゃん！」
　円が、背後で切羽詰った声を上げた。
「お姉ちゃん、ボク、もう出ちゃう！　セーエキ出ちゃうよォ！」
　そう言って、ますます腰の動きを早く、激しくする。
「んーッ！　んはッ！　ンあああああ！　はあぁアアアッ！」
　たまらず、小夜歌は遼のペニスから口から離した。それでも、名残惜しげに舌を伸ばし、その肉棒を舐めしゃぶろうとする。
「お姉ちゃん、ボク、イク、イクぅーッ！」
　高い悲鳴のような声をあげ、円は小夜歌の腰に指を食い込ませ、その細い腰を小夜歌のヒップに押し付けるようにした。
「ああッ！　あッ！　あッ！　あああああああぁアーッ！」
　びゅくっ、と勢いよく弟の精液が子宮口にあたる感触を引き金に、小夜歌も絶頂を迎えた。
　その小夜歌の頭を左手で固定し、遼は自らのシャフトを右手でしごきあげた。
「ふぁッ!?」
　遼は小夜歌の顔に白濁液をぶちまけた。ぴしゃぴしゃと音をたてるほど激しく、兄の精液が妹の顔を叩き、汚す。
　そして遼は、両手で小夜歌の頭を持ち、唾液と粘液でぬらぬらと光るペニスを、やはり精液にまみれた小夜歌の秀麗な顔に押し付けた。
「んああぁ……ン」
　小夜歌はそのおぞましい仕打ちにうっとりと目を閉じ、そして力を失ったペニスを愛しげに咥えるのだった。

---

「……それでまあ、現在に至る、ってとこよ」
　小夜歌は、かすかに顔を伏せ、上目遣いで遼のことを見ている。
「もちろん、その日だけじゃなかったわ。あたしと円は、あんたの用意したマンションに暮らすようにしたけど、結局、そんなこと関係なかった。あたしは、何度も何度も、あんたの気が向いたときに、さんざもてあそばれたわ」
　小さく抑えた声で、小夜歌の告発は続く。
「そのこと自体、辛くて、苦しいことだったけど……一番、悔しかったのは、あんたのすることに、どうしても抵抗できない体にされちゃったってことよ」
「……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　遼は、唇を噛んだまま、無言である。
「さすがよね」
　ふン、と小夜歌は鼻だけで笑った。遼の「仕事」と、その手管に屈服した自分の、双方を嘲るような、そんな嗤いだ。
　しばらく、喫茶店の当り障りのないＢＧＭが、その場の空気を支配した。
「……すまない」
　ぽつり、と遼は言った。
「思い出してない、のね？」
　あらゆる感情を無理に押し殺したような声で、小夜歌が訊く。
「ああ、だが俺は……」
　遼が何か言いかけるのを遮るように、がたん、と音を立てて小夜歌は席を立った。
「お姉ちゃん！」
「先に帰る」
　呼びかける円を無視して、小夜歌はとっとと喫茶店を後にしてしまった。
　遼はうつむき、自らの握り締めた拳を睨んだままである。
「お兄ちゃん……」
　円の声に、視線だけ上に向けた。
「お姉ちゃんね、多分、すごく寂しいんだよ」
「？」
　円の意外な言葉に、遼は不審げに眉を寄せる。
「お兄ちゃんが、ボクたちのことまで忘れちゃって、それが寂しくて、あんなに怒ってるんだよ。それに、記憶喪失のまま、あの家で由奈さんと二人っきりで暮らしてて……」
「何？」
　思わぬ名前が出てきたため、遼は声を上げていた。
「なんで、由奈が関係あるんだ？」
「……そっか、それも憶えてないんだ」
　円が、そう言って目を丸くする。
「だったら、多分、ボクからは言っちゃいけないと思う」
　そして妙に思案げな顔をして、円は言った。
「とにかく、お姉ちゃんはお兄ちゃんに似て不器用だから、うまく言えないだけで、お兄ちゃんのこと、好きだよ」
「バカな」
　遼は、吐き捨てるように言った。
「俺は……俺は、あいつを強姦したんだぞ。兄妹だってのに」
　まるで、自分自身をくびり殺してやりたいとでもいうような物騒な表情を、遼は浮かべた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「……記憶を取り戻せば、分かるよ」
円は、場違いなほど明るくにっこりと笑って、言った。
「ムリはよくないけど、なるべくなら思い出してね」
そんな台詞を残し、円も席を立った。
眉間に険しくしわを寄せた遼だけが、店に残される。
いつのまにか、外では雨が降り始めていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第７章

「ご主人様……どうしたんですか、その格好！」
　由奈は、大きな垂れ目を見開いて、叫ぶように言った。
　玄関で由奈が出迎えた遼は、まるで服を着たまま泳いできたかのように、ずぶ濡れだった。降りしきる豪雨の中、徒歩十分の距離のあるバス停から、傘も差さずに歩いてきたのである。
　その顔には、ひどく険悪な表情が浮かんでいた。
「す……すぐ、おフロ、沸かしますから」
　その顔に圧倒されそうになりながら、由奈はようやくそう言った。

　遼の屋敷には、ほとんどの居室にユニットバスがついている。しかし、本格的な浴室は、また別にあった。
　四畳半ほどの広さのある、個人の邸宅のものにしては大きすぎるほどの風呂である。バスタブは、所々欠けてはいるが大理石製らしく、広さだけではなく造りも、個人の家のものとは思えない。
　遼は湯船につかり、顔をうつむかせて、水面を見ていた。
「ご主人様ぁ」
　浴室の外から、由奈が遼に呼びかけた。
「あの、お背中、お流しします」
　そう言って、がらがらと音をたてて浴室のサッシを開ける。
　由奈は、薄いピンクのバスタオルしかまとっていなかった。頭の左右にたらしている髪は、まとめてシニヨン・カバーに収めている。まるでマンガの中に登場する中国人の少女のような髪型だ。
「い、いいよ、別に」
　何度か肌を合わせていても、不意打ちにはどうしても弱い。遼は、顔を赤くして目をそらした。
「そんな……」
　由奈の情けない声が、浴室の中で反響した。
「ご主人様……また何か、怒ってるんですか？」
「お、怒っては、いないけど……。いや……怒ってるかな、自分に」
「じぶん？」
「今日、妹に会ったんだ。それと弟にも」
「そう……ですか」
「それで……妹に、聞かされたんだけど……俺……妹を、犯してたんだ。力づくで」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

吐き捨てるように、遼は言った。
「それに、自分の親父を殺してるのかもしれない……分からないけど、多分、そうだ」
「ごしゅじん、さま……」
「……由奈との時はどうだったんだ？」
遼は、目をそらしたまま、訊いた。
「え？」
「由奈と最初にしたときは、どうだったんだよ。やっぱり、レイプだったのか？」
「……」
由奈は、何も言わない。その由奈の沈黙は、何よりも雄弁に、事実について語っていた。
「そうなのか、やっぱり……」
遼は、きつく唇を噛んだ。
「なんで……」
しばらくして、無言のままの由奈に、遼は言った。
「え？」
「なんで、そんな奴のことが、好きなんだよ……俺、最低の人間じゃないか……」
自分に対する怒りと嫌悪、そして、もっとどろどろとした感情が、遼の声を震わせる。
ぴしゃっ、といきなり遼はお湯をかけられた。
「な、何するんだ！」
思わず立ちあがって向き直る遼の前で、由奈が泣きそうな顔で、洗面器を持って立っていた。
「そんな風に言わないで下さい！」
そして、洗面器を放り出し、バスタオルのまま湯船の中に入り、遼の体に抱きつく。
「由奈……」
「どうしようもないんです……あたし……あたし、何をされても……ううん、されればされるほど、ご主人様のことが……」
そう言いながら、腕に力を込め、遼の胸に顔を押し当てる。
「好きなんです……ごしゅじんさまが……だから……」
あとは、言葉にならない。
（でも……お前が好きなのは……今の俺じゃないんだろ……）
そんな言葉が声になるのを、遼は必死で押しとどめた。そう言って由奈を責めても、何もいいことはない。
怒りが冷え、憎しみが静まると、遼は、身の内を最も大きく占める感情が何であるのかを思い出していた。
（そうだ……嫉妬……だ……）
遼は、自分の胸の中で小さく泣き声を上げている由奈に気付かれないように、ふっと溜息をついた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

（俺は、過去の自分に嫉妬してるんだ……この自己嫌悪も、突き詰めれば、それを正当化するための言い訳なのかもしれない……）
　遼は、自分の中で渦巻く嫉妬ともに、由奈の小さな体を強く抱きしめた。

---

　遼は、バスマットの上のイスに座り、由奈が背中を流すのに任せていた。
　二人とも、無言である。無言のまま、まるで新婚の夫婦のように、頬を赤く染めている。
「ごしゅじんさま……」
　ひとしきり背中をスポンジで洗い、泡をお湯で流した後に、由奈は遼の耳元に囁いた。
「さっきは、すいません……また、あたし……」
「いいんだよ」
　そう言った遼の顔は、どこか寂しげな笑みを浮かべていた。しかし、背後の由奈には、その表情は見えない。
「あたし……ご主人様と、仲直りしたいです……」
　そんなことを言いながら、由奈は背後から遼の腰に手を回した。
「あっ……」
　由奈は、小さく驚きの声をあげた。あんなやりとりの後だというのに、タオルに隠された遼のそこは、すでに硬くなっていたのだ。
「ゆ、由奈……」
　遼は、自分の股間をまさぐる由奈の白く小さな手を、茫然と眺めていた。払いのけるべきなのかどうなのか、判断がつかないうちに、欲望が脳内の理性を駆逐していく。
「ご主人様、お願いです……由奈に、ご奉仕させてください……」
　そう言いながら、由奈は、左手で遼のシャフトをこすり上げ、右手で丸く撫でて先端を刺激した。そして、左の頬と、豊かな双乳を、ぴったりと遼の背中に押し付ける。
　結局、遼は由奈の申し出に肯いてしまった。
「うれしい……」
　由奈はそう言って、ちゅっ、と遼の背中にキスをした。そして、名残惜しげに遼の体から離れ、シャンプーの容器などとともに並ぶ円筒形の容器の中身を、洗面器の中のお湯と混ぜていく。
「うふふっ……」
　悪戯っぽく笑いながら、由奈は、洗面器の中身を両手ですくい、遼の背中に流した。てらてらと遼の背中が浴室の照明に輝き出す。それは、適度なぬめりをもったローションだった。
「あ……」
　遼は、思わず声を漏らした。由奈が、自らの体にもローションを塗りこみ、その乳房を

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼の背中に押し付け、動かしたのだ。
　ぬるぬるとした感触とともに、柔らかく、それでいて張りのある由奈の双乳が、遼の背中を這い回る。
「どうですか、ご主人様……？　由奈のおっぱい、感じますか？」
　由奈の問いに、遼は子供のようにこっくりと肯いた。
「由奈も、すごくご主人様を感じます……あァん、乳首、立っちゃう……」
　その言葉どおり、自らの背中を滑る由奈の乳房の頂点が、次第に固く尖っているのを、遼は感じていた。
「ご主人様、うつぶせになってください……」
　欲情に濡れた声でそう言う由奈に、遼は素直に従った。両手を顎の下で組み、まるでビーチで日光浴をするような格好になる。
　由奈は、そんな遼の背中にローションを追加する。そして、体重を一箇所にかけないように注意しながら、自分の体をぴったりと遼の背中に重ね合わせた。
「はァん……」
　それだけでそうとう興奮するのか、熱い息を漏らしながら、由奈はゆっくりと体を前後に動かした。背中全体が温かいぬめりに刺激され、由奈の淡い恥毛が、遼の尻をこする。
「感じる……すごく、すごく感じちゃう……」
　いつしか、由奈は開いた両脚で、遼の右脚の付け根を挟むような姿勢となり、腰を大きく動かしていた。ローションとは違うぬめりが、由奈のクレヴァスから次々と分泌されていく。
「き、きもちイイ……ご奉仕してるのに、きもちよくなっちゃう……」
　由奈は、悩ましげに眉を寄せ、うわごとのようにつぶやいた。
「んんっ……」
　しばらくして、由奈は、ひどく辛そうな顔で腰を離した。これ以上続けては、後戻りできないほど没頭してしまうと考えたのだろう。
「こ……今度は、あおむけになって、ください……」
　遼が言葉どおりあおむけになると、背後からの刺激でさらに膨張率を増したペニスが、ひくひくと震えていた。
　まるで好物を目の前に出された子供のように、由奈はピンク色の舌で唇を舐めた。しかし、すぐにそれにむしゃぶりつくようなマネはせず、洗面器に残った糸を引くローションを、とろとろと遼の体にかけていく。そして、まるでマッサージでもするかのように、手の平でローションを伸ばす。
「ふぅン……」
　由奈は、可愛く鼻を鳴らしながら、再び、ぴったりと肌を重ねていった。
「あぁ……」
　遼は、自分が軟体動物にでもなったような錯覚を含む快感に、声をあげていた。由奈が

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

嬉しげに微笑み、体を前にずらして、遼の唇に自分の唇を重ねる。
「んン……んぷ……んはっ……」
　そして、ひとしきり舌を絡めあった後、前後運動を開始した。
「あぁ……気持ちイイ……イイの……イイですぅ……」
　頬を上気させ、うっとりとそう囁きながら、由奈は全身を使って遼の性感を高めていく。
「あぁッ……はあぁ……あはっ、先っぽが、あそこに当たっちゃう……」
　由奈の動きがあまりに激しいため、反りかえった遼のペニスと由奈のアソコが、まるでキスを繰り返しているかのように、ちゅっ、ちゅっと触れ合う。
「んはぁ、あン、あはン、うぅン……」
　まるでそのきわどい遊びを楽しむかのように、由奈は大胆に体を前後させた。そうしながらも、時折、遼の胸に唇を当て、乳首にちろちろと舌を這わせる。
「あン！」
　由奈が短く嬌声をあげた。責められっぱなしだった遼が、下からすくいあげるように、由奈の巨乳をその手に収めたのだ。
「あぁン、ダメぇ、ごしゅじんさまァ……ご奉仕が、できなくなっちゃいますぅ」
　体を反りかえらせ、騎上位のような姿勢になりながら、由奈がそう訴える。しかし、遼は少しも構わず、由奈の、幼い容姿に不釣合いな豊かな胸をもみしだき、乳首を指でひねるようにくりくりと愛撫する。
「ンはああぁん！　ダ、ダメ、ダメですぅ！　そんなにされると、由奈、感じちゃって……」
　そんな抗議の声に構わず、遼は由奈の乳首を、きゅっ、とひねりあげた。
「あァ〜ん」
　由奈が、たまらない声で快感を訴える。
　遼は、ぬるぬるとしたローションの感触を楽しむように、たっぷりとした由奈の乳房に手を這わせ続けた。その白い双乳はイヤらしく濡れ光り、視覚的にも遼の興奮を高めていく。
「感じるか、由奈？」
「ハ……ハイ……感じる……感じます……おっぱい、きもちイイ……」
　かくかくと頭を頼りなげに揺らしながら、由奈が答える。
「じゃあ、こういうのはどうだ？」
　そう言いながら、遼は指先で由奈の固くしこった乳首をつまみ、しごくようにこすり上げる。
「あ、あアァッ！　あはン！　そ、それ、すごく感じちゃうッ！」
　由奈は、いやいやをするように首を左右に振り、ひときわ高い声をあげた。湯気で満たされた浴室の中に、その嬌声が反響する。
「イキそうなのか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ハイ……っ。由奈、ち、乳首が、すごくきもちよくて……もう……ッ！」
「いいよ……イって、由奈……イクとこの顔、見せて……」
　言いながら、遼は乳首を指の間に挟み、激しく乳房を揉みしだいた。
「イヤぁっ、は、はずかしいィ……」
　悲鳴のようにそう言いながらも、由奈はひくんと体を震わせた。
「あ、イ、イク、由奈、おっぱいでイっちゃうーッ！」
　そう言いながら、自分の腰にまたがってひくひくと体を痙攣させる由奈を、遼は熱っぽい目で見つめていた。

「はァ、はァ、はァ、はァ……」
　遼の体の上に横たわり、由奈は荒い息をついていた。
「ゴメンなさい……こんどは……きちんと、ご奉仕、しますから……」
「気にすんなよ。……由奈の気持ちよさそうな顔見てたら、すごく興奮したよ」
「もう、ご主人様ったら」
　そう言いながら、由奈が遼の顔を軽く睨む。しかし、すぐにその顔はうっとりとした微笑みに変わった。
「今度は、ご主人様も気持ちよくなって下さい……」
　そう言いながら、体を後にずらし、遼の脚にまたがるようにして、そのペニスに両手の指を絡めた。それは、今までの愛撫に痛いほどにいきり立ち、グロテスクに静脈を浮かせ、脈打っている。
「スゴい、ご主人様の……なんだか怒ってるみたい……」
　目を丸く見開き、うるうると潤ませながら、由奈がつぶやく。
「あッ」
　由奈は、小さく悲鳴をあげた。遼が、由奈を脚に乗せたまま、上体を起こしたのだ。
　そのままあぐらをかき、由奈のしなやかな脚を、自分の腰に絡ませるような姿勢になる。このまま挿入すれば、対面座位の格好だ。
　自然、遼の熱いシャフトが、由奈のぷっくりとした恥丘に押し付けられるかたちになる。
「ご、ご主人様……」
「いいかい、由奈？」
　遼の言葉に、由奈はちょっと顔を曇らせた。
「ゴメンなさい……あたし、今日、ちょっと危ない日で……」
「あ……そうなんだ」
　遼は、少しうろたえた声を出してしまった。だからこそ、由奈は今まで「ご奉仕」にこだわっていたのだろう。しかし、遼としては、やはり全身で由奈のことを感じたくなっている。
「あの、ご主人様」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

遼のそんな気持ちに気付いたのかどうか、由奈は、恥ずかしげにうつむきながら、遼にそっとささやいた。
「お尻で、します？」
「え？」
聞き返す遼に、しかし由奈は恥ずかしげに顔を伏せ、それ以上は答えない。やはり、自分でも相当はしたないと感じているのだろう。
（俺は、そんなことまでしてたのか……）
複雑な気持ちになりながらも、遼は、そっと由奈のお尻の割れ目に手を這わせた。
「あンッ……」
うろたえたような可愛い声を漏らしながらも、由奈は拒もうとはしなかった。ただ、その細い両手を遼の首に絡め、ぎゅっと抱きつく。
遼は、右の中指を、由奈の菊座に当てた。そこは、ひくひくと小さく震え、怯えているようにも、期待しているようにも感じられる。
遼は、その部分をマッサージするような感じで、ゆっくりとさすり始めた。
「んっ……ふぅッ……く……はぁッ……」
ひそやかな、しかし明らかに快感による声を、由奈はあげていた。その息が、遼の耳をくすぐり、頭を痺れさせる。
遼は、一度右手を離し、傍らに転がっていたローションの容器を手に取った。そして、中の液体で右手を濡らし、潤滑液にする。
そして、つぷっ、と遼は中指の先端を菊門に埋めた。
「はァ……ん」
由奈が、大きく口を空け、息を吐き出す。意識して括約筋から力を抜いているらしい。そのためか、ローションに濡れた遼の指は、意外とスムーズに由奈の中に入っていった。
左手で由奈の可愛いヒップを抱え、ゆっくりと指を出し入れする。
「はぁッ、あッ、あああああァ、ああッ……」
少しずつ、由奈の声が大きくなっていく。お尻の穴で感じているという羞恥心が、次第に快感に圧倒されていっているのだろう。
遼は、まるでいつもやっていることのように、由奈の肛門を愛撫している自分自身に、驚きを感じていた。いわゆる、体が覚えている、という状態らしい。
（過去の自分のことは考えるな……今、由奈を抱いているのは、俺なんだ……）
努めてそう考えながら、由奈のアヌスを刺激しつづける。
「あ、ダメぇ……由奈……由奈、おしり感じる……感じちゃう……」
泣きそうな声で、由奈が遼の耳元でそう訴える。
ひとしきり愛撫をした後で、遼はことさらゆっくりと、指を抜いていった。
「あああああぁぁぁぁぁ……っ」
消え入りたげな顔をしながらも、由奈は、排泄感に似た快感に声をあげる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

ぬるっ、といった感じで指が全部抜けると、それだけで、由奈はがっくりと頭を遼の肩に預けた。
「バスタブに手をついて、お尻をこっちに向けて」
遼がそう言うと、由奈はぼぉっとした表情で素直に肯き、両足を軽く広げた姿勢でバスタブに両手をかけた。
「あッ。ダ、ダメですっ！」
由奈は、うろたえた声をあげ、体をねじった。遼が、膝立ちの姿勢で、由奈の左右の尻たぶを広げ、じっと菊門を見つめたのだ。その視線の先で、由奈の細かいシワに囲まれたセピア色のアヌスが、どことなく慎ましやかな感じで、ひくひくと息づいている。
「お願いです……み、見ないで……そんなトコ、じっと見ないで下さい……」
しっかりとお尻を固定されているため、逃げることもできず、由奈は目に涙を溜めながら、羞恥に染まった顔を両手の間に伏せた。
しかし、そんなことには一向に構わず、遼はゆっくりと、そこに顔を寄せていった。
「きゃッ！」
排泄器官に、想い人の唇を感じ、由奈が本格的に高い悲鳴を上げる。
「あ、ダ、ダメ！　ダメです！　そんな汚いトコ……！」
遼は、そんな由奈の悲鳴をＢＧＭに、肛門へのキスを繰り返し、固く尖らせた舌をねじ込むように差し入れる。
「ダメぇ……ダメダメ……んあああっ……あぅン……そこは、そこはァ……」
またもや、由奈の羞恥は、奇妙な快感の前に次第に溶けるように消えてしまう。いつしか由奈は高々とヒップを上げ、おねだりするようにゆらゆらと揺らしていた。
遼は、ちゅうっ、とわざと音を立てて唇を離した。由奈の菊門は半ば開き、濃いピンクの直腸粘膜を覗かせている。
「あぁ……あぁァ……はァ……」
由奈は、羞恥心の名残と、かすかにおぞましさの混じった快感に、息も絶え絶えの様子だ。
「入れるよ……」
遼は立ちあがり、自らのペニスと由奈の菊門にローションを塗りたくり、言った。由奈が、小さく肯く。
遼は亀頭をアヌスに当て、ゆっくりと腰を進めていった。
「んはァ……アアア……あああァァァーッ！」
一番太い雁首の部分を、由奈の菊門が飲み込んでいく。そこは痛々しいほどに引き伸ばされ、指で触れるだけでも弾けてしまいそうに見えた。強烈な締め付けが、遼のペニスを痛いほどに包んでいく。
しかし、その最もきつい個所を抜けると、ペニスはスムーズに由奈の直腸の中に侵入していった。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「ふァあああああああああァーん」
　シャフトの側面がずるずると粘膜をこすっていく感覚に、由奈が高い声をあげる。
　とうとう、遼の陰茎の根元までが、由奈の中に埋められた。みっしりとした肉の感覚が、性器とは全く違った感覚でペニスを包み込む。
「す、すごい……ゆ、由奈のお尻……ご主人様ので、い、いっぱいですぅ……」
　圧迫感に口を開き、舌を覗かせながら、由奈が熱っぽい声で訴える。
　遼は、ゆっくりと抽送を開始した。
「あぁアッ……由奈、感じる……お尻が……お尻がきもちイイ……」
　次々と湧き起こる妖しい快感に、由奈は全身を震わせる。
　括約筋の強烈な締め付けを感じながら、遼は、少しずつ腰を大きく動かしていった。
「あはッ！　ひッ！　はひっ！　す、すごい……すごいよォ……ッ！」
　由奈は快感に手と手の間のバスタブのへりに頭を横たえ、すすり泣くよう声をあげつづけた。その脚はかくかくと震え、とても自分では体重を支えきれない様子だ。
　遼は、由奈のそこを傷つけないように注意しながらも、ピストン運動をさらに大胆にした。
「ああッ！　あッ！　あッ！　あッ！　あッ！　あアァーッ！」
　由奈のあそこから止めどもなく愛液がこぼれ、ローションにてらてらと光る太腿の内側をさらに濡らしていく。剛直にお尻が貫かれるたび、その体は揺れ、乳房がたぷたぷと震える。
「ゆ、由奈……」
　遼は後ろから由奈の小さな体に覆い被さり、手を回して乳房を揉みしだいた。
　そして、そのまま由奈の体を起こし、立ったまま背後から肛門を犯す姿勢になる。姿勢の変化によって、由奈のアヌスはさらに強く締まり、まるで遼のそれを食い千切ってしまいそうだった。
「あァン……そんな、そんなァ……」
　由奈もそれを感じているのか、舌足らずな声を震わせてる。
　しかし、遼はペニスを由奈の中に収めたまま方向転換し、洗い場の端まで歩かせ、タイル貼りの壁に手をつかせた。その小さな両手の間には、風呂場に置くにはいささか大きすぎるような鏡がある。
「あ……」
　由奈は、鏡の中に、口を半開きにし、うつろな瞳でこちらを見返している少女の顔を見た。頬や耳たぶは真っ赤に染まり、体はローションと汗でイヤらしく濡れ光ってる。
「ス、スゴい……あたし、スゴくエッチな顔してる……」
　由奈は、うわごとのように言った。
「イヤらしくて、可愛い顔だよ」
　遼はそう言って、斜め上に由奈の顔を向かせた。そして、開いた可憐な唇から突き出さ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

れたピンク色の舌を吸い、頬や目蓋、首筋に、キスの雨を降らす。
「ふぅうううう……」
　由奈が、たっぷりと媚を含んだ声を漏らす。遼はそんな由奈の体を後からしっかりと抱きしめ、ローションの感触を楽しむように、肌と肌をすり合わせた。
「ああ、ご主人様ァ……由奈、由奈うれしい……」
　うっとりとした口調で、由奈が言う。
　ひとしきり、由奈の全身を愛撫した後、遼は抽送を再開した。
「あァ、あァ、あアァ、あああッ……！」
　インターバルの間も体中で高められていた性感が、一気に擦れ合うペニスと直腸の粘膜の感覚に集中する。
「あひッ！　イイぃっ！　ひあッ！　んあああああああああああァン！」
　由奈はふるふると頭を振り、快感に半狂乱になっている様子だ。遼は、そんな由奈の股間に右手を伸ばし、熱く潤むアソコに触れた。そこは、アヌスへの抽送のリズムに合わせるように、どぷどぷと愛液を溢れさせている。
「由奈……」
　遼は由奈の耳元に囁きながら、右手の中指と薬指を、濡れる割れ目の奥へと挿入させた。そして、親指で、すでに勃起したクリトリスをこすりあげる。
「あああああァーッ！」
　由奈は、ひときわ高い嬌声をあげた。
「も、もうダメっ！　ダメ、ダメ、ダメ、ダメぇえええっ！」
「イくのか、由奈？」
「ハ、ハイ……由奈、もう、もう……ッ！」
　かなり頼りない口調でそう言う由奈の前と後ろの門が、きゅううっ、と収縮する。それは、遼の指とペニスが痛みを感じるほど強烈だった。
「あ……由奈、お、俺も……」
　遼の声も、かなり切羽詰っている。
「ごしゅじんさま、来て……！　いっしょに、いっしょにイって下さい……ッ！」
「ゆ、由奈、由奈っ！」
　括約筋の締め付けを押しのけるような勢いで、大量の精液が、遼の輸精管を走り抜ける。
「イク、イク、イっちゃう、イクうううううぅーッ！」
　由奈の絶頂の声が、浴室に響くのを聞きながら、遼は、自分のペニスが何度も何度もしゃくりあげ、その度に大量の精液を由奈の直腸の中に注ぐ感触を感じていた。そして、その度に、由奈は大きく体を痙攣させ、より強いアクメを感じている。
　しばらくして、ローションと、自分の放った精液にまみれたペニスが、由奈の肛門から押し出された。
「ふあァ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

まるで支えを失ったかのように、由奈ががっくりと膝をつき、そのまま横たわる。
同様にバスマットの上に尻をついてしまった遼の視線の先で、めくれあがっていた由奈の肛門が、きゅっ、と可愛くすぼまった。

---

しばらくして、体を洗い合った後、二人は並んで湯船の中に入った。
さきほどの狂態が嘘であったように、二人とも無言だ。
「由奈……」
その沈黙を、遼がおずおずといった感じで破った。
「な、なんですか、ご主人様」
「……いいや。何でもない」
しばらく逡巡した後、結局、遼はそう言った。
「ヘンなご主人様」
くすくすと、由奈が子供っぽく笑う。
(……由奈といれば……俺は、過去の俺を吹っ切れるかもしれない……)
由奈の屈託ない笑い声を聞きながら、遼はちょっとだけ晴れた心でそう思っていた。

---

その考えが間違いであることを、遼はすぐに知らされることになる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第８章

　数日が、経った。
　遼と由奈が、食堂のテーブルで、向かい合って朝食をとっている。トーストとベーコンエッグ、簡単なサラダ、そして冷たいミルク。
　由奈は、トーストの切れ端を口に運びながら、ちらちらと遼の顔を盗み見ていた。
　遼の顔は、最近、どこか明るい感じがする。記憶は一向に戻る様子がないのだが、そのことにこだわるのを止めたらしい。
　それが、自然とそうなったのか、無理してそうしているのか、由奈には分からない。
　とにかく遼は、過去を吹っ切るつもりでいるらしい。新しい就職口を見つけ、可能ならこの屋敷も引き払うつもりのようだ。幸い、遼の口座には、かなりの額の金がある。彼の年齢で人生をやり直すための資金としては充分すぎるほどだ。
「あの……」
　由奈は、そんな遼に、何か決心したように言いかけた。
「何？」
　トーストをかじりながら新聞を読んでいた遼が、顔を上げる。
「えっと……やっぱり、何でもないです」
「ふうん」
　ふっ、と遼は笑った。数日前の、風呂場でのやり取りを思い出したのだ。
（今なら、言えるだろうか……）
　そう思いながら、ミルクをお代わりしようと、パックに手を伸ばす。
「……？」
　遼は、しきりに目をしばたいた。急激で不自然な眠気が、突如、湧き起こってきたのだ。
「な……？」
　見ると、由奈も大きな目をぱちぱちさせ、上体を揺らしながら、不思議そうな顔をしている。
「よく効くクスリね♪」
　聞き覚えのあるきれいな声が、食堂に続く厨房から聞こえた。
「小夜歌……！」
　振り返り、頼りない声で遼がそう言ったときには、由奈はことんと頭をテーブルに落としていた。そのまま、くーくーと眠りについてしまう。
「あらら、お行儀の悪いメイドさん」
　嘲弄を含んだ声で、食堂のドアのところに立つ小夜歌が言う。黒い薄手のニットに、赤いミニといういでたちだ。週末、学校は休みである。
「ど、どうやって……？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ここは、あたしの家だもん、鍵くらいは持ってるわよ。ちょっと早起きしちゃったけどね」
　皮肉げな口調で、小夜歌が言う。
　その小夜歌の背後に、場違いな明るい顔でにこにこと微笑む円の姿を認めた時、遼の意識も強烈な睡魔の中に飲み込まれてしまった。

---

　どれくらいの時間が経ったのか、遼は、鉄パイプで作られた簡素なベッドの上で目を覚ました。
　マットレスは固く、とても寝心地のいい代物ではない。その上、遼の手は、バンザイの姿勢で、手錠でベッドのパイプに固定されている。
「……」
　遼が、声に出さずに小さく唸る。
　そこは、屋敷の地下室だった。
　コンクリートが打ちっぱなしの壁や床を、蛍光灯の薄暗い光が照らしている。天井からは、滑車に通された鎖がいくつも下がり、壁には大きな鏡や、磔台が備えられていた。さらには、どういうつもりか部屋の隅には、剥き出しのバスユニットまで置かれている。
　遼が、そしてさらに遡れば彼の父である秋水が、拘束された女体に対して数々の仕打ちをしてきた部屋である。
「やっと目が覚めた？」
　その声に、遼は重く痛む頭を巡らせた。視線の先で、小夜歌が綺麗な顔を笑みの形に歪めて立っている。
　そして、その足元に、全裸にされた由奈が正座を崩したような姿勢で座りこんでいた。両手が手錠で戒められている上、その手錠が、天井から下がる鎖に繋がれているため、両腕を上げた姿勢で、がっくりとうなだれている。さらに、犬にでもするような黒い革製の首輪までされ、首輪から伸びる鎖は床のフックに固定されている。
　まだ、由奈の意識は戻っていないらしい。
「由奈に……何をした……？」
　覚束ない声でそう言う遼に、小夜歌はかすかに眉を跳ね上げた。
「まだ、何もしてないわよ」
　そう言いながら、遼に見せつけるように、由奈の顔を顎に手をかけて起こし、ぴたぴたと軽く頬を叩く。
「ンン……あ……」
　由奈は、その垂れ気味の大きな目を、ゆっくりと開いた。睡眠薬の影響が抜けないのか、その瞳はぼんやりとしている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「あ、ああッ！」
　しばらくして、ようやく自分の姿に気付いたのか、あわてて剥き出しの胸を隠そうとする。しかし、鎖がじゃらんと鳴っただけで、それはかなわなかった。むしろ、その大きな乳房が、まるで見せ付けるようにふるんと揺れる。
「おっきなおっぱいね……」
　声にかすかな嫉妬をにじませながら、小夜歌がそっと由奈の胸に触れた。
「あ、イヤ！　やめてください！」
　由奈の抗議の声にもかかわらず、小夜歌は胸への愛撫をやめようとはしない。それどころか、由奈の背後で膝をつき、腋の下から乳房に両手を回し、揉み始める。
「すごい巨乳……ふふっ、まるで牛みたい」
　残酷にそう言いながらも、小夜歌の手つきはあくまでソフトだ。
　由奈は、屈辱と羞恥に頬を染めながら、うつむいた。声を漏らすまいと、ぎゅっと唇を噛んでいるが、小夜歌の巧みな指使いに、時折、小さく鼻を鳴らしてしまう。
「あんた、こういう大きいのが好きだったの？　おっぱい以外は、ずいぶんとロリロリだけど」
　あけすけにそう言いながら、小夜歌が遼の方を見る。しかし、手は休まず、由奈の豊か過ぎる胸をこね回し、白く細い指先で乳首を弾くように刺激している。
「イ……イヤ……な、なんでこんなコト……」
　同性ならではの繊細な愛撫に、必死で喘ぎ声を漏らすまいとしながら、由奈が言った。
「よせ、小夜歌……由奈は、関係ないだろ……」
　遼も、苦しげな口調で、うめくように言う。
「……そうね」
　拍子抜けするほどあっさりとそう言い、小夜歌は由奈の裸身から離れた。そして、ゆっくりと、ベッドに拘束されている遼に歩み寄る。
「本来の目的は、あんただもんね」
　言いながら、ベッドの傍らに立ち、切れ長の黒目がちな目で、遼の顔を見下ろした。その小夜歌の目とそっくりな遼の目が、乱れた前髪の奥から小夜歌の視線を受け止める。
「本当は、殺してやろうかとも思ったんだけど……」
　囁くようにそう言いながら、小夜歌はその長い指を遼の首に絡めた。背後で、由奈が息を呑む気配がする。
「記憶を失ってるんじゃ、しょうがないもんね。とりあえずは、コレで、許したげる……」
　意外なほど優しい声で言い、小夜歌はゆっくりとその指を滑らせていった。しわくちゃになったワイシャツの上を、胸から腹にかけて撫で、さらに、スラックスの股間の部分を、両手で包み込むようにする。
　遼は、屈辱に目を閉じ、眉をひそめた。いっそ小夜歌を蹴飛ばしてやろうとも思ったが、両足首にも拘束具がはめられ、それもやはりベッドのパイプに接続されている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　くくっ、と小夜歌が年に似合わない色っぽい声で笑った。
「ちょっと、硬くなってる……」
「そりゃそうだよ。お姉ちゃん、由奈さんの胸、すっごいエッチな顔でいじってるんだもん」
　いつのまにか、小夜歌と反対側のベッドの傍らに、円が立っていた。薄いブルーのチェック柄のワンピース姿だ。相変わらず、胸のふくらみを差し引いたとしても、どうしても少年には見えない。
「ホラ、お姉ちゃんが触ってるうちにも、どんどんおっきくなってる……」
　濡れた声で言いながら、円も遼のその部分に手を伸ばす。
「よ、よせ……っ」
　そう言う遼の声には、力がない。まだ、脳に膜がかかったような倦怠感が残っているのだ。
　無邪気な笑みを浮かべながら、円が遼のベルトを外し、ジッパーを下ろす。そして、半ば血液を充填させたペニスを、壊れ物を扱うような手つきで、トランクスから解放した。
「ボク、お兄ちゃんのコレ触るの、初めてなんだ」
　円が、何となく感慨深げにそう言いながら、さすさすと優しく遼の男根を撫で上げた。
　小夜歌は、そんな兄と弟の姿を、なんとも複雑な表情で見ている。
「どうするの？　お姉ちゃん」
　円が、悪戯っぽい目つきで小夜歌の顔を見た。
「どうって……？」
「お姉ちゃんがしないんなら、ボクが先にしちゃうよ」
「……」
　まだ、何かを迷ってるような表情の小夜歌ににっこりと微笑みかけ、円はその可憐な桜色の唇で、兄のペニスに軽いキスをした。そして、唇を亀頭に付けたまま、より強いタッチで、すりすりと両手でシャフトを撫でさする。
「くッ……」
　いくら少女の姿をしているとはいえ、弟なのだ。それなのに、遼の肉茎は、円の刺激に浅ましく反応していた。
「あはっ、元気元気♪」
　自分の口元で熱く、硬くなっていくペニスに、円は歓声を上げた。そして、頬を軽く染めながら、亀頭にキスを繰り返す。
「……お姉ちゃん？」
　うっとりと閉じていた目を開け、再び円が小夜歌の顔を見た。
「……」
　小夜歌は、なぜか背後の由奈の方を振り返った後、その顔を遼のソレに寄せていった。
「ね、いっしょにしよっ♪」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そんな小夜歌に円は楽しげに言って、遼の熱くたぎり始めている部分への愛撫を再開した。
　いざ始めると、小夜歌は激しかった。
　紅い唇を開いて、一気に亀頭からシャフトへと喉奥に飲み込む。
　そして小夜歌は、さらさらの黒髪を揺らしながら、口唇によるピストン運動を行った。じゅぷ、じゅぷ、じゅぷ、じゅぷというイヤらしく湿った音が地下室に響き、その口から出てくるたびに、遼のペニスはぬらぬらと唾液に濡れ、そこだけ光って見える。
「もう、お姉ちゃんてば、ボクにも残してほしかったのに……」
　そんなことを言いながら、円はベッドに上がり、遼の開かれた両足の間にうずくまった。そして、その股間に顔を寄せ、スラックスとトランクスを太腿までずり下げ、皺だらけの陰嚢にくちづけする。
　それを見て、小夜歌は一時、フェラチオを中断した。口元に笑みをためながら、円にならってベッドに上がる。どうやら、遼のその部分に何をするのか、拘束されたままの由奈に見せ付けるつもりらしい。
　三人の体重を乗せても、頑丈そうな鉄製のベッドは、軽く軋みをあげただけで、びくともしなかった。
　小夜歌は、その白く長い足で遼の上半身をまたいだ。そして、ミニスカートの中のショーツが半ばあらわになるのも構わず、上体を倒して、円が舐めしゃぶっている遼のペニスに口を近付ける。ちょうど、シックスナインに近い態勢である。
　円は、ひとしきり陰嚢を口に含んで愛撫し終え、今は遼の竿を両手の指で支え、ちろちろと裏筋を舐めていた。
　それを見て、小夜歌も舌を出し、亀頭の表面を、まるで子供がアイスキャンディーでも舐めるように舐め上げる。
「おいしい……お兄ちゃんのオチンチン」
　まったく邪気のない表情で、円は言った。
「パパのより硬いかな……おっきさは、同じくらい大きいけど」
　そんな言葉を聞くたびに、遼の頭にかあっと血が上る。しかし、そんな激情も、二人の巧みな技術の前に、単なる性的興奮に変換されてしまうのだ。
「……くっ……うぅっ……くぁっ……！」
　二枚の舌が、ペニスの表と裏を同時に刺激する快感に、遼は他愛なく声を漏らしていた。二人とも、男が感じる部分を知り尽くしているかのように、的確にポイントをおさえ、舌の平をこすりつけるように刺激したかと思うと、雁首の縁や、亀頭の先端の鈴口を、舌を尖らせてえぐるように舐める。
　その上、遼の絶頂が近づくと、じらすように口を離すのだ。
　その間、二人分の唾液でぬるぬるになったペニスをあやすようにしごき、互いに互いの唇を貪るようにキスをする。

Veon PDF Driver Trial
www.veon.com.tw

円はキスの間、目元をぽおっと染めながら、うっとりと目を閉じていた。一方、小夜歌は、時折、ぞくっとするような流し目を由奈によこす。
由奈は、そんな三人の兄弟の姿から目を離せないでいた。
大きな目を見開き、顔を耳まで赤くして、そして、無意識に、もじもじと太腿をこすり合わせている。
そんな由奈の様子を満足そうに見て、小夜歌は、一足先に兄のペニスにむしゃぶりついていた円の後を追うように、行為を再開した。
吸盤のようにぴったりと唇をペニスに当て、茎の部分に這わせ、左右から同時に、つるつるとした感触の亀頭を吸引する。そして、小夜歌は亀頭を口に挟んで、舌を回すようにその部分を刺激し、円は再び陰嚢を口に含み、左右の睾丸を交互に舌の上で優しく転がした。
ちゅぱっ、ちゅぱっ、と可愛い音を立てながら、逞しく反りかえった赤黒い剛直を、タイプの違う二人の美少女が仲良く口唇愛撫している。男であれば、羨ましく思わぬ者はないような風景である。
しかし遼は、まるで凄まじい苦痛に耐えているかのように、歯を食いしばっている。
「んふ……もう、カンネンしちゃったら？　お兄ちゃん」
遼の太腿まで舐めしゃぶり、唾液でぬらぬらと濡らしながら、円が言った。
「イキそうなんでしょ？　お兄ちゃんのココ、もうガマンできないーって、びくんびくんしてるよォ」
円の言葉どおり、遼のペニスはどくどくと脈打ち、見ているものが痛みすら感じるほどに膨張していた。
しかし、遼は、じっとこちらを見ている由奈の視線を避けるように顔を背け、快感が爆発するのをこらえている。
「ごーじょーなんだから……」
そう、円が言いかけたとき、小夜歌が最後の攻勢に出た。
もう一度、遼のペニスを根元まで咥え、頭を激しく上下させる。
「……〜ッッッッッ！」
遼は、食いしばった歯の間から、声にならない声をあげていた。
いよいよ限界が来た遼のシャフトの根元を、ディープスロートを続けたまま、小夜歌が指先で締め上げたのだ。
イきたくてもイけない、甘美な苦痛に、両手両足を戒められた遼の体が、小夜歌の体の下でのたうつ。
「ぅあああああああああああああーッ！」
小夜歌の指からペニスが解放されたとき、遼は、悲鳴を上げていた。
一瞬遅れ、小夜歌の口の中に、呆れるほどの量と勢いの精液が溢れた。
さすがに、小夜歌が顔を引く。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　遼のペニスは、陸に上げられた魚よりも激しく跳ね、そこらじゅうに精液を撒き散らした。
「お姉ちゃん、ボクにも……」
　やや茫然とした表情の小夜歌に、円がキスをする。
「んんっ、んくっ……んっ……」
　姉の口にぴったりと吸いつき、その口内に溢れる粘液を、こくこくと喉を鳴らしながら飲み込んでいく。
　そして、いかにも満足げな顔で、円は口を離した。
「おいしかった……お兄ちゃんのセーエキ」
　にこっ、とまるで甘いものを食べた後の幼女のような無邪気さで、円は微笑んだ。

　由奈が我に返ると、目の前に小夜歌が立っていた。
「あ……」
　由奈は、反射的にうつむく。
　その由奈の太腿の間に、小夜歌は靴をはいたままの右足を差し入れた。
「あッ！」
　眉をたわめ、由奈が短い悲鳴を上げる。小夜歌の靴先が、由奈の最も大事な部分に押し当てられたのだ。
　小夜歌が、口元に笑みを浮かべながら、足の先をくりくりと動かす。
「……ンン……イヤ……や、やめてェ……！」
　由奈は、小夜歌の足から逃れようと、腰を引いた。しかし、両手を天井から下がる鎖に繋がれ、首輪に鎖までつけられた身では、それもままならない。せいぜい、その顔を白い腕で隠そうとするくらいだ。
　小夜歌は、ぞくぞくするような表情で、由奈を足一本で追い詰めていく。
「あなたのココ、濡れてるわよ……」
「……！」
　小夜歌の指摘に、由奈はきつく目を閉じた。目尻からぽろぽろと涙の玉がこぼれる。
「大事なご主人様がなぶられるのを見て、興奮しちゃったの？」
「……許して……許してください……」
　涙を流しながら、由奈は哀願した。しかし、小夜歌は明確なＳ性をにじませた顔で、さらに由奈を攻めたてる。
「やらしいのはオッパイだけじゃなかったのね、この牝牛ちゃんは」
「あッ！」
　由奈が高い声をあげた。小夜歌が、由奈の双乳をきつくつかんだのだ。
「い、痛い……やめてェ……」
「何言ってんの。乳首が、びんびんに立ってるわよ」

Neon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　そう言いながら、乳首を指でつまみ、ぐい、と上に持ち上げる。
「イヤアァーッ！」
　じゃらじゃらと鎖を鳴らし、体を反らすようにして、由奈が身悶える。
　ぱっ、と小夜歌が手を離した。由奈の巨乳が、滑稽なほどに上下に揺れる。
「うっ……ひくっ……うぅゥっ……」
　子供のようにしゃくりあげる由奈を見下ろし、小夜歌は舌で淫靡に唇を舐めた。そして、再び靴先を由奈の股間に差し入れる。
「ンあッ！」
「ふふっ、すごい濡れてる……あなた、いじめられて感じちゃうんでしょ？」
「そ、そんなコト、ありません……」
「ウソツキね……」
　囁くように言って、小夜歌は足の動きを速めた。
「あッ、あああッ！　あァーッ！」
　由奈の悲鳴に混じって、くちゅくちゅという濡れた音が、地下室のよどんだ空気を震わせる。
　小夜歌の動きだけでなく、戒められ、抵抗できない状態でなぶられるというシチュエーションによって、由奈は、確実に追い詰められていった。今や由奈は恥辱と被虐の快感に喘いでいる。
　そして小夜歌は、絶妙のタイミングで身を引いた。
「え……？」
　由奈が、ひどく情けない表情で小夜歌を見上げた。イキそこねた腰が、がくがくと震えている。
「どうしたのかな、牝牛ちゃん。続きをして欲しいの？」
　小夜歌が、腰に手を当てて、わざとらしく訊く。
「それとも、続きはあいつとしたい？」
　そう言って、小夜歌は、遼の方をちらりと向いた。
「……」
　由奈は、ちょっと心配になるくらい空ろな瞳を、遼に注いだ。その息が、荒い。
　遼は、未だベッドに拘束され、その股間のモノを、円に弄ばれている。
「どうなの？　黙ってたら、分かんないでしょ？」
　まるで幼稚園児に話しかけるような口調で、小夜歌がうながした。
「したい、です……あたし、ごしゅじんさまと……」
　由奈が、うわ言のように言う。
「だったら、あなたのアレで汚れたあたしの靴、舐めてきれいにしなさい」
　そう言って小夜歌は、由奈の手錠を固定しているフックを外した。
「ハイ……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

素直にそう返事をして、由奈は、犬の姿勢で、自らの愛液で濡れ光る小夜歌のエナメルの靴に口付けした。そして、ピンク色の舌で、ぺろぺろと懸命に小夜歌の靴を舐め清める。
その表情は、屈服と恥辱に酔いしれ、犯罪的なほどの被虐美をにじませていた。
「……もういいわ」
しばらくそうさせた後、小夜歌は、由奈の首輪の鎖を外した。そして、その左右で結んだ髪を掴んで、ぐい、と立たせた。
「ああッ！」
たまらず、由奈が悲鳴を上げる。
「乱暴したらダメだよォ、お姉ちゃん……」
今まで含んでいた遼の肉茎から口を離し、円が言う。そして、由奈の方を向き、にっこりと笑いかける。
「ホラ、由奈さん、準備しといたからね」
その言葉通り、遼のペニスは、先程あれだけの量の精を放ったにもかかわらず、すっかり勢いを取り戻していた。その表面は、ぬらぬらと粘液で濡れ光っている。
「あぁ……ごしゅじんさまの、オチンチン……」
そう、うっとりとした口調で言って、円と入れ違いに、由奈はのろのろとベッドに上がった。未だ、手錠で両手をつながれているため、その動きはちょっと危なっかしい。
しかし構わず、由奈は遼の腰をまたぎ、そろえた手を遼の腰骨のところに添えた。
「ごしゅじんさま……」
「由奈……」
由奈の声に、薬の後遺症もあってか半失神状態の遼が、辛うじて答える。
「ゴメンなさい、由奈、もうガマンできません……」
そんなことを言いながら、遼のペニスに両手を添え、角度を調節する。
「ごしゅじんさまのオチンチン、スゴくあつい……」
そう言いながら、自らのぬかるみに亀頭の先端を当て、挿入を試みる。
「あァん、だ、ダメ……足が、ふるえちゃう……」
その言葉通り、由奈の膝はかくかくと震え、なかなか狙いが定まらない。結果、いたずらにシャフトをクレヴァスにこすりつけることになり、由奈の足からはますます力が抜けていく。
「うン……くぅン……はァ〜ン……」
切なげな息を吐きながら、ふりふりと可愛いお尻を動かす由奈。しかし、本人にとっては必死の作業である。
円は、ひどく熱っぽい目で、そんな由奈を見つめている。一方、小夜歌の黒々とした瞳は、なんとも奇妙な表情を浮かべていた。
「あ。あァっ！」
由奈が、歓喜の声をあげた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

とうとう遼のペニスをアソコでとらえることに成功したのだ。
「あ、あああ、あはっ。はァあああァンンンン……」
そのまま、雁首が膣内粘膜をこすり上げていく感触を楽しむように、ことさらゆっくりと腰を落としていく。
「ンはアッ！」
すっかりアソコがペニスを飲み込み、その先端が子宮口を叩いたところで、由奈は軽い絶頂を味わっていた。ぴくん、とその小さな体が痙攣し、白い喉を反らせて頭がのけぞる。
そして、がっくりと由奈は上体を前に倒した。
「はァっ、はァっ、はァっ、はァっ……」
まだワイシャツをまとったままの遼の体に体重を預け、荒い息をする。
しばらくそうやって余韻を楽しんだ後、由奈の腰が、はしたなく動き出した。
「あっ、はァっ、はッ、んはッ……」
まるで、そこだけ別の生き物のように、白くて丸いお尻が、くにゅくにゅと前後に動く。由奈の頭は、遼の胸に預けられたままだ。
「スゴい……由奈さんのアソコ、スゴくおいしそうに、お兄ちゃんのオチンチン、食べちゃってる……」
円が、たまらなくなったように、自らの胸に手を当てた。そして、由奈はもちろん、小夜歌に比べてもまだ薄い少女の乳房を、優しく揉み始める。
「んふっ……ボク、見てるだけで感じちゃう……」
そんなことを言いながらも、可愛いチェックのワンピースの上から、自らの胸を右手でこね回し、そして両足の間に左手を当てた。小さな舌が、ピンク色の唇を、しきりに舐める。
由奈の腰の動きは、次第に大胆になっていった。忙しく前後に動いたかと思うと、ペニスを奥まで迎い入れ、そのまま腰を回すようにして、互いの粘膜を摩擦させる。
「ごしゅじんさま……ごしゅじんさまァ……ッ！」
この異様な状況の中で、必死にすがりつくような感じで、由奈は遼のペニスを下半身で貪っていた。その眉は切なげにたわめられ、目はうるうると性感に潤んでいる。
「……円」
小夜歌が、切れ長の物騒な目つきで、円に呼びかけた。円は、自らを服の上から慰めるのを止め、小夜歌に向き直る。
「お姉ちゃん？」
聞き返す円に、小夜歌は無言で肯きかけた。円が、ちょっと困ったような顔をする。
しかし、由奈と遼は、そんな二人のやり取りなど、耳に入ってはいない。
「きもちイイ……ごしゅじんさまァ、もう、もう……」
「由奈……由奈……」
腰がとろけるような快感の中、互いのことを呼び合うだけだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ああッ、あッ、あはァっ！　ご、ごしゅじんさま、由奈、もう……もうすぐ……ッ」
　二度目の、より高い絶頂が目前に迫り、由奈の腰の動きがさらに速くなる。
　と、その跳ねるように動く腰が、背後からの手によって止められた。
「ああッ！　イヤ、お願い、イかせて、イかせてェ！」
　突然腰をつかまれたことよりも、絶頂までの道を止められたことに、由奈が悲鳴のような声をあげる。
　由奈が背後に目をやると、そこに、ワンピースを脱ぎ捨てた円がいた。美しい極線を描く、未成熟な少女の裸体の股間で、反りかえったペニスが上を向いている。細身ながら充分以上の大きさのそれは、なぜかぬらぬらと濡れ光っていた。
「な、何……どうするの……？」
　由奈の、今まで快感に潤んでいた大きな瞳に、怯えの色が浮かぶ。
「由奈さん、ゴメンね……いたくしないから……」
　そんなことを言いながら、円は腰を進め、一気に由奈のアヌスを貫いた。どうやら、ペニスにあらかじめローションを塗ってあったらしい。
「んはあああああああァッ！」
　由奈が、高い絶叫を上げる。
「スゴい……由奈さんのお尻、スゴく気持ちイイ……」
　円が、うっとりと声を漏らす。その顔は、快感に身をゆだねきった美少女の表情そのままだ。
「ま、まどか……何を……？」
　完全には状況を把握していない遼が、急にきつくなった由奈の締め付けに、うめくような声をあげる。
「ふふふっ……由奈さんのおかげで、ボクとお兄ちゃん、やっと一つになったよ……」
　そう言って、発育途上ながらきちんと半球型になった自分の乳房を優しく撫でさすりながら、円がゆっくりと腰を動かす。
「んぐッ！　んッ！　んふッ！　んんんんんんンッ！」
　前後から剛直によって貫かれ、由奈は苦しげな声をあげた。しかしその響きの中には、確かに快感の色がある。
「んあァ！　あぅ、うッ、うぅッ！　んうぅ〜ッ！」
　直腸と膣の間の薄い肉の壁が、二本のペニスによって揉みつぶされ、こすり上げられた。
「ああ、感じる……お兄ちゃんのオチンチン……ボクのオチンチンにくりくり当たってるの、分かるよォ……」
　円はそう言い、その感触をより楽しもうとするかのように、ことさら腰の動きを細かくする。
「はひぃいッ！」
　とうとう、由奈の中で、括約筋を押し広げられる苦痛に、前後からの圧倒的な快美感が

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

勝った。
「イイっ！　スゴいィ！　あうぅゥッ！　……こんな、こんなの……由奈、はじめてッ……！」
　もはや、快感のために自ら腰を動かすこともできず、声だけを出す人形のように、二本のペニスの動きに翻弄される。
「お、おかしくなるゥ……奥で、ぐりぐりして……ッ！　由奈、おかしくなる、おかしくなっちゃうゥーッ！」
　半開きにした可憐な口から涎までこぼし、由奈は言葉通り半狂乱になって悶えていた。
　そんな由奈の髪を、小夜歌が、ぐい、と掴んで持ち上げた。
「いいザマね、牝牛ちゃん」
　小夜歌自身も興奮しているのか、頬を妖しく染め、息を少し荒くしながら、由奈に言う。
「結局、あんた、男のアレだったら何でもいいんでしょ？」
　そう言いながら、頭をぐらぐらと揺すぶる。しかし、由奈はあまりの快感のために、痛みを感じていないようだ。
「あァ……そんな、そんなァ……由奈、そ、そんなんじゃないですゥ……」
　残り少ない理性をかき集めるようにして、由奈がなんとか答える。
「アソコとお尻に一度に咥えこんどいて、まだそんなこと言うの？」
　小夜歌が、嘲弄の笑みを浮かべる。どこか女悪魔を思わせるような、壮絶で美しい微笑みだ。
「イヤ、い、言わないでェ……んあああああああァッ！」
　由奈が悲鳴のような官能の声をあげた。小夜歌が由奈の乳房を荒々しく揉みしだいたのだ。
「言っちゃいなさいよ、自分がだれのチンポでもいい淫乱女だってことを」
　そう、小夜歌が由奈の耳元に囁く。
「んはア！　由奈、もうダメ、ダメえええええぇッ！」
　三人がかりで全身を責められ、とうとう由奈の頭の中で、理性の最後の火が消えた。
「スゴいのォ！　由奈のアソコとお尻、オチンチンでいっぱいィ！　いっぱいぃッ！」
　そして、かつて遼にしこまれた淫語を、狂ったようにわめき散らす。
「イク、由奈、両方で、両方でイっちゃうーッ」
　由奈が、絶頂に全身を細かく痙攣させた。
「イ……イっちゃった、イっちゃったのにまだ……ふあああああ！　お尻とオマ×コ、スゴいのォ！」
　由奈が両穴責めによって絶頂を迎えても、円の腰の動きは止まらない。さらには、遼の腰まで、何かに取り憑かれたかのように激しく上下し、由奈の幼げな下半身を責めたてる。
「きもちイイよォ！　由奈、由奈、チンポ大好き！　おチンポ大好きなのォ！」
「ようやく白状したわね、この変態メイドさん♪」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「そうですッ！　由奈、ヘンタイですッ！　だからもっと、もっとイジめて！　オチンチンで、由奈のお尻とオマ×コ、メチャメチャにして下さいッ！　あァ、また、イクーッ！　イ、イっちゃうゥーッ!!」
　すでに、何度も何度もアクメの小爆発にさらされ、由奈は呼吸さえままならない。
　小夜歌は、奇妙に満足げな顔をして、由奈の胸を両手ですくいあげるようにこね回しながら、その広いおでこに軽くキスをした。
　そして、いよいよ激しく細腰を振る円に目を向ける。
「おねえちゃん……」
　円も、もはや限界のようだ。そんな円に、小夜歌はくすりと微笑みかけ、言う。
「そろそろ、出してあげなさい」
「あッ！　んあああッ！　由奈さん、ボク、ボク、由奈さんのお尻に、セーエキだしちゃうッ！」
　由奈の狂乱が感染したかのように、円もそんなことを言いながら、最後の時を迎えた。
「んくッ！　んんんッ！　んあああああああああッ！　イク、イクーッ!!」
　高い少女の声で、円が絶頂を告げる。
「あぅッ！　あつい、あついィいいいいいいいいッ！」
　敏感な直腸粘膜に、次々と熱い精液の弾丸を撃ち込まれ、由奈もかつてないほどの絶頂に押し上げられる。
　そして、激しく収縮する膣内の微細な蠢動が、遼をも絶頂に追い込んだ。
「んぁッ！」
　短いが決定的な敗北の声をあげ、遼が下から大量の白濁液を、由奈の中に注ぎこむ。
「ぅああアッ！　あアッ！　うあああああああああアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァーッ！」
　体内でなんどもしゃくりあげ、精液を放出する遼のペニスの動きに、由奈は最後の絶叫を上げた。
　びくびくと、まるで熱病患者のように、由奈の小さな体が痙攣する。
　そして、由奈の意識は、暗く優しい闇の中に、どこまでも堕ちていった。

---

　我に返り、ふーっ、と小夜歌は溜息に似た息を吐き出した。
　赤いミニの中で、ショーツがぐっしょりと濡れている。由奈と遼、そして円の行為を見ているだけで、軽くイってしまったらしい。
　それから、どれくらい時間が経過したのか、小夜歌には判然としない。
　羞恥のため、年相応に頬を赤く染めながら、小夜歌はベッドの上に目を戻した。
　快感のためか、薬のためか、遼はとろんと半ば目を閉じ、ぴくりとも動かない。その上

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

にうつぶせに横たわる由奈も同様だが、両目は眠っているかのように閉じられている。
　由奈は、何か満たされたような、ひどく幸せそうな顔をしていた。
　円の姿は見えない。
「……さま……」
　その時、小夜歌は聞いた。
「……ごしゅじんさまァ……」
　寝言なのかどうなのか、由奈が、舌足らずな甘え声で、遼のことを呼んでいる。
　小夜歌の視界が、急激に赤く染まった。ざあああああああ……と、雨音のような音が聞こえる。
　小夜歌には、それが自分の血管を血液が流れる音のように思えた。
　ぱあン！
　小気味いいほどの音が、地下室に響く。
　髪を掴んで引き起こした由奈の頬を、小夜歌が思いきりひっぱたいたのだ。
「……！」
　その一撃で正気に戻ったのか、由奈は大きく目を見開いていた。頬が、血をにじませてるように赤く染まる。
「あンた、何様のつもりよ！」
　小夜歌は、自分でもイヤになるくらいうろたえた声で叫んでいた。
「この期に及んで、まだお兄ちゃんを独占するの!?　さんざ、円のアレでよがり狂ってたくせに！」
「……」
　由奈は、まるで何が起こったのか分からない様子で、まだ手錠で戒められた手で頬を押さえている。
「あんたのせいなのに、のうのうとココで暮らして……可愛げな顔して、何も知らないフリして……」
　そう言う小夜歌の声は、涙声になっている。
「そもそも、お兄ちゃんが記憶喪失になったのも、あんたの父親のせいじゃない！」
「お姉ちゃん！」
　小夜歌の背後から、円が呼びかけていた。
　いつもの、どこか甘いような声とは違う、凛とした声だ。
　小夜歌と由奈、そして、小夜歌の剣幕にさすがに目を覚ましていた遼も、円の声の方を向く。
　円は、たった今、シャワーを浴び終えた様子で、全裸の体に軽くバスタオルをまとっていた。あの雨音は、シャワーの音だったのだ。
　均整の取れた少女の肢体が、男根を備えているその姿は、大げさに言うなら、古代宗教の天使を思わせた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ダメだよ、お姉ちゃん……由奈さんが、言わなきゃいけないことでしょ……」
ひどく哀しげな顔で、円が言う。
「……」
小夜歌は、唇をきつく噛みながら、由奈の髪を放した。由奈が、がっくりとうなだれる。
そして、小夜歌はのろのろと地下室から出ていった。
「……ゴメンなさい、由奈さん」
そのまま、じっとうつむいている由奈に、手早く衣服を身に着けた円が話しかけた。
それきり無言で、由奈と遼を戒める拘束具の鍵を、かちゃかちゃと丁寧に外していく。
ようやく、由奈と遼は解放された。
「二人とも、その……仲良くしてね」
そんなことを言い残し、円も、地下室の扉から出て行く。
「由奈……？」
自分の体にまたがり、うつむいたままの由奈に、遼がようやく声をかける。
由奈は、静かに涙を流していた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## 第９章

「きっと、帰りますから」
　そう、由奈は言った。

「今まで黙ってて、すいません……」
　あの後の夜、由奈は全てを語った。
　長らく生き別れていた由奈の父親が、裏社会の中で、相当の地位にいた人物であったこと。
　その由奈の父親が、裏社会での地位を守るため、娘である由奈を、ある顔役に人身御供の性奴隷として差し出そうとしたこと。
　由奈の父親が、遼に由奈の調教を依頼したこと。
　そして、由奈の父親が、由奈の調教を強引に中断したこと。
　それを理由に、遼が由奈を奪還したこと。
　由奈の父親が、それによって裏社会における地位を失い、破滅したこと。
　そして、由奈の父親が、復讐のために、遼を襲撃したこと。
　そして――遼の記憶喪失が、その襲撃の際の傷によるものであること。
「そう……」
　遼は、自分でも驚くくらい、穏やかな口調で言った。
「言いにくいことなのに、よく話してくれたね」
「……許して、くれるんですか？」
　由奈が、涙で濡れた目で遼の顔を見る。
「許すも何も……由奈がしたことじゃないだろ」
「でも、そうかもしれませんけど……あたし、ずっと、そのこと黙ってて……ご主人様が、一番辛かったはずなのに」
「いいよ、そんなこと」
　遼の言葉に、ようやく由奈は、泣き止んだのだった。
　その後、二人は何も言葉を交わさず、それぞれの寝床で眠りについた。

　そして翌朝。
「しばらく、旅に出たいんです」
　そう、由奈は言った。
「あたしがココにいると、小夜歌さんのことで、ご主人様に迷惑がかかるし……それに、あたし自身、気持ちに整理、つけたくて」
「……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「お父さんのことは、いいんです。ご主人様は、許してくれたし……しばらくは、塀の中だって、乾さんが言ってましたし……もともと、全然、お父さんって感じじゃなかったし」
「……」
「でも、この一年、すごく色々なことがあって……お母さんが死んで、お父さんが現れて、学校やめて、ご主人様と会って、それから……それから……」
「……」
「自分でも、受け止めきれてないって言うか……よく分からないんです。なんだか、夢の中の出来事みたいな気がして」
「……」
「あ、あの、あてだったら、ないわけじゃないんです。親戚のおばあちゃんが、近くに住んでて……すごくいい人で……これまでは、巻き込みたくなかったから、会ってなかったけど……お父さんのことも、一段落したし」
「……」
「だから、しばらくそこにいて……小夜歌さんとのコトも、いろいろ考えて……」
「……」
「でも、あたし」
　じょじょにうつむきかけていた由奈が、再び顔を上げ、ひどくきっぱりした口調で言う。
「きっと、帰りますから」
　遼は、無言で肯くしかなかった。

---

　出発当日。
（多分、由奈が正しい）
　窓越しの、やけに爽やかな昼前の日の光を浴びながら、遼は自室のソファーに座り、物思いにふけっていた。
（小夜歌と何か話をするにしても、冷却期間が必要だろうし……由奈にだって、一人で考える時間が要るはずだ。俺が止める権利は、ない）
　そんなことを、暗い天井を見上げながら、ぼんやりと考えている。
（それに、由奈は帰ってくると言ったんだ。……必ず、由奈は帰ってくるさ）
　遼は、伸ばした前髪に隠れた目を閉ざした。
　眉や口の端が、かすかに歪んでいる。どことなく、よくない夢を見ている人の寝顔を思わせるような表情だ。
　握られた拳が、かすかに震えているように見える。
　控えめなノックの音に、はっと遼は目を開いた。
「ご主人様」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　言いながら、由奈が扉を開ける。例のメイド服ではない。明るい色調のワンピースの上に、フリルのついたブラウス。ご丁寧にもリボンのついたつば広の帽子まで右手に持ち、「おめかし」とか「よそゆき」というような言葉がぴったり来るような服装だ。
「あの、ご挨拶に来ました」
　そう言って、由奈はちょっと照れたような笑いを浮かべる。その表情といでたちのせいで、幼い顔がますます幼く見える。
「……」
　遼が、無言でソファーから立ち上がって、そんな由奈に歩み寄る。
「ご主人様？」
　遼が、由奈の両肩に両手を置いた。
　顔を近付けてくる遼のキスに応えるべく、由奈が大きな目を閉ざした。
　二人の唇が重なる。
「ン……」
　由奈の腕にそって、遼は両手をそろそろと下ろしていく。
　そして……

　遼の中で、何かが、切れた。

　がちゃり、という金属音とともに、由奈の両手が後ろ手で拘束された。
「！」
　遼が、ポケットに忍ばせていた手錠を、由奈の手首に素早くはめたのだ。
「な、何？」
　大きく見開いた由奈の瞳に、遼の無表情な顔が映っている。
「ご主人様、どうして……キャッ！」
　何かを言いかける由奈を、遼は軽々と抱え上げた。右手で膝の裏を、左手で細い肩を、それぞれ支える。
「や、やめてください、ご主人様！　お願いです、下ろして……！」
　由奈が身をよじり、ぱたぱたと足を振る。しかし、そんなことを意に介せず、遼は由奈を隣室のベッドへと運んでいった。
「きゃン！」
　ベッドに放り投げられるように横たえられ、由奈が短く悲鳴を上げる。
　その由奈の小さな体に、遼がのしかかった。
「やめてください！　こんなの、こんなのイヤあ！」
　そうわめく由奈の服のボタンを、遼がむしりとるような手つきで外していく。その息が、獣のように荒い。
「なんで……？　どうしてこんなコト……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　由奈は、その大きな目から、ぽろぽろと涙をこぼしていた。
「あたし、必ず戻ってきますから……！　こんなコト、やめて下さい！」
　悲痛な声で、由奈がそう訴える。
「ダメだ……」
　遼は、低い、うめくような声で言った。
「え……？」
「ダメだ、ダメだ、ダメだ……」
　何がダメなのかを言おうともせず、遼はワンピースのスカートを大きくめくり上げる。
「や、イヤあああああーッ！」
　羞恥よりも恐怖に、由奈は叫んだ。
「やめて、やめてェーっ！」
　両腕を拘束されながら、必死でその身をくねらせる由奈のショーツを、引き千切るようにずり下ろす。
　そして、その両足を大きく割り開き、遼は体をねじ込ませた。
「ひッ……」
　いつの間にあらわにしていたのか、遼の熱くたぎる剛直が、由奈のそこに押し当てられる。それは、まるで得体の知れない獰猛な小動物のように、びくびくと脈打っていた。
「ま、待って！　待ってください……！」
　どうにかして、その肉の凶器からのがれようとする由奈の両肩を、遼はがっしりと掴んだ。
　そして、何の準備もない由奈の陰部へ、硬く強張ったペニスを、強引に侵入させていく。
「い、いやあああああああああアアアアアアアアアァァァァァァァァァア！」
　激痛に、由奈の視界が、真紅に染まった。

　由奈の中で、遼の猛り狂う肉棒が動いている。
（ヒドい……ヒドいよぉ……）
　体の痛みよりも、心の痛みに、由奈は涙を流していた。
（ご主人様は、あたしのこと、信用してくれてないのかなあ……）
　それが、何よりも哀しい。
「ご主人様……」
　少しかすれた声で、由奈が遼の事を呼ぶ。
　遼は、荒い息を由奈の耳に吐きかけながら、無言で腰を動かしていた。
「あ……」
　ぴくん、と由奈の体が、遼の体の下で跳ねた。
　由奈にとっては信じられないことに、遼によって開発された彼女の肉体は、この状況でも、浅ましく快楽を求め始めたのである。

Yen PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

痛みにざわめいていたはずの粘膜は、自らを保護するかのように愛液を分泌し、それによってくちゅくちゅというイヤらしい音を立てている。
「そんな……こんなのって……んあァ……」
自分の体内で育っている、まぎれもない快美感に、由奈は切なげに眉根を寄せた。
「由奈……」
遼は、犬のように舌を出し、由奈の顔を濡らす涙を、丁寧に舐め取っていった。その間も、腰の動きは一向に衰えない。
今や、由奈のその部分は充分過ぎるほどに潤い、シーツに染みるほどに愛液を滴らせていた。
「んあッ……イヤぁん……ご主人様……ヒドい、ヒドいですぅ……ふああァん……」
明らかな快楽の喘ぎの合間に、由奈の恨み言が挿入されている。
しかし遼は、何の躊躇も遠慮もなく、由奈の小さな体を貫き、犯し続けた。
ワンピースの胸元を大きく開け、ブラに包まれた巨乳に、背を丸めるようにして顔を埋める。
「あひッ！　ふあァ、あふ……ふぅうッ！　んくっ……あ、ああああああああァ！」
犯されることによって感じるという、女性にとっての最大の屈辱が、かえって由奈の歪んだ官能を燃え立たせる。
熱を持った粘膜同士がこすれ合い、雁首がえぐるように膣壁を責め、肉襞がシャフトに絡みついた。
「いやン、いやァン……んうゥ……ぅあッ！　んふゥん……んあァッ！」
半開きになった由奈の可憐な唇は、白い歯とピンク色の舌をわずかに覗かせ、絶え間ない喘ぎ声を上げる。間違いようのない快感に、綺麗にカールした長いまつげが震え、目元がぽぉっと染まっていく。
「あァっ……あァっ……あァっ……あァっ、あァっ、あァっ、あァっ、あァっ！」
とうとう由奈は、遼の動きをより深く導くべく、はしたなく腰を浮かしていた。
「ごしゅじんさま……ごしゅじんさまア……！」
遼は、大きな由奈の乳房を包むブラのフロントホックを、器用に片手で外した。
そして、ひどく乱暴な手つきで、張りのある双乳を両手で揉みしだく。
「んはァあああああ！」
きつく、甘い刺激に、由奈はひときわ声をあげていた。遼の十本の指に責められ、白い乳房が淫猥に形を変え、桃色の乳首がはっきりと尖っていく。
その尖った乳首を、遼は繊細な、それでいながら残酷な手つきでしごくように愛撫し、さらなる快楽を引き出していく。
「イヤあぁ！　アソコが、アソコが、きゅんきゅんしちゃうゥっ！」
その言葉通り、胸の先端から発した快楽の電気は、由奈の小さな体を駆け巡り、膣壁はそれに応えるかのように収縮を繰り返す。

Yeon PDF Driver Trial www.yeon.com.tw

粘膜同士の摩擦はさらに激しくなり、それによって生じた熱い快感は、二人の下半身をどろどろに溶かしてしまうように感じられた。
「スゴい……あぁ、スゴいですゥ……ッ！」
由奈が、半ば茫然とした表情で、うわ言のように繰り返す。
遼は、一時ピストン運動を緩め、由奈の腰を抱えるようにした。
そして、完全に自らの上半身を起こし、仰臥したままの由奈の腰をぐりぐりと回すようにゆさぶる。
「ふあッ！　あッ！　んうゥうううううッ！」
由奈の声が、切羽つまってきた。イヤイヤをするかのように首を左右に振る。
「あいっ！　んあァっ！　ご、ごしゅじんさまァ、由奈は、由奈はもう……！」
激しい喘ぎ声の合間に、由奈はようやく、それだけを告げた。
遼も、快感に追いこまれたかのように歯を食いしばり、腰の動きを細かく早くして、最後のスパートをかける。
「んあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁアアアアアアアっ！」
とうとう、由奈は背を弓なりに反らせ、絶頂の声をあげた。
その由奈の絶頂に追いつこうとするかのごとく、遼が滅茶苦茶に腰を振る。
そして、遼のペニスは、由奈の子宮めがけ、熱い白濁液を放出した。
「あああああッ？　あアアアアアっ！　ふあああああああアアア！」
何度も何度も、牡の粘液によって子宮の入り口を叩かれる感触に、由奈は立て続けに絶頂に押し上げられる。
「あァ……あン……んくぅ……」
やがて、がっくりと由奈の全身から力が抜けた。

手を戒められたまま、快楽の海を漂っていた由奈の半身が、ぐい、と無理矢理起こされた。
「あ……」
痴呆のような表情で遼を見上げる由奈の口元に、愛液と精液でべっとりと汚れたペニスが押し付けられる。
「あン……」
その性臭に、むしろ目をとろんとさせて、由奈は濡れ光る亀頭にくちづけける。
遼は、従順にペニスへの愛撫を始めようとする由奈の頭を、がっしりと掴んだ。そのまま、可憐な唇をむりやりこじあけるようにして、半勃起の状態の肉棒を侵入させる。
「んむぅ……んっ……んぐっ……」
半ば力を失っていても、遼のそれは、由奈の小さな口には大きすぎるほどだ。それでも、由奈は懸命に遼のペニスを喉の奥まで迎え入れようとしている。
そんな由奈のけなげな様子に、逆にまるで憎しみを覚えているような調子で、遼は荒々

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しく腰を前後させた。
「んんッ！　んぐ、んんンーッ！」
　がくがくと頭をゆさぶられながらも、遼の敏感な粘膜の表面に歯を立てないように注意しながら、由奈はシャフトに舌を絡める。
　由奈は、久しぶりに、物のように乱暴に扱われる悦びに、陶酔しきっているようだった。
　女性としての、人間としてのプライドを脱ぎ捨て、奴隷としての立場に身を任せきる、脳髄が痺れるような快感。
　もはや、由奈の頭の中には、旅の間に自分を見つめ直そうなどという、人がましい考えはカケラも残っていない。わざわざ「自分探し」などしなくても、自身を性奴隷として強烈に規定してくれる主人が、文字通りすぐ目の前にいるのだ。
「ふぅン、ンふぅうン……」
　由奈は、遼の乱暴なイラマチオに嬉しげに鼻を鳴らした。ついさっき、あれほどオルガスムスを貪ったはずの靡肉が熱くうずき、腰が知らず知らずのうちにもじもじと動いてしまう。
　遼のペニスは、由奈の口の中で、すっかり硬くなり、大きさを取り戻していた。
　まるで、そのことを誉めるかのように、ようやく遼は腰の動きを止め、由奈の頭を撫でる。
「おいひい……ごひゅじんさま、おいひいれすゥ……」
　ようやくイニシアチブを取り戻した由奈が、亀頭を口に含んだまま、もごもごと呟く。
　そして、ひとしきり亀頭を口の中で舐めまわした後、口を離し、逞しくそり返るシャフトの裏側に、丹念に舌を這わせる。
　赤黒い亀頭や、濃い褐色の陰茎を、ピンク色の唇と舌が這い回る姿は、痛々しいほどに淫猥だ。しかも、由奈はその間、うっとりと目を閉じ、恍惚とした表情で、自らの唾液に濡れたシャフトに頬ずりまでする。
「ああ、熱い……ご主人様のオチンチン、すごく熱いです……」
　由奈は、柔らかい頬や広い額で遼のペニスの温度を感じながら、そう言った。
　そして、可愛く小首をかしげて茎の部分を横咥えにし、くにくにと首を振って刺激する。両手に手錠をはめられて使えないのが、なんとももどかしそうだ。
「ご主人様……ご主人様の熱いミルク、由奈に呑ませて下さい……」
　隷従しきった口調でそう言って、由奈は、再び遼のペニスを亀頭から咥えこんだ。
　そのまま、頭を前後に動かし、舌と口腔粘膜で、熱くたぎる剛直をこすり上げる。
「由奈……」
　遼が、由奈の頭を撫でながら呟いた。由奈は上目遣いに遼の顔を見、目だけでにっこりと微笑む。
　由奈の動きが、早くなった。
　頭を左右にねじるようにして、遼のペニスから精液を搾り取ろうとする。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

たまらず、遼も再び腰を動かしていた。
ぶちゅぶちゅという卑猥な湿った音が、白昼の寝室に響き渡る。
「くッ……！」
遼が、小さくうめく。
どぴゅうっ
という音まで聞こえそうな射精が、由奈の口の中で弾けた。
二度目だというのに、驚くほど大量の精液が、由奈の可憐な口に注ぎ込まれる。
その噴出がひとしきり終わると、由奈は白く細い喉をこくこくと鳴らし、口内にたまった青臭い粘液を、嬉しそうに飲み干していった。
そして、尿道に残った精液までちゅるちゅると吸い出した後に、ぷはっ、と可愛い吐息が漏らして、ようやく口を離す。
「おいしかったです……ご主人様のミルク……」
由奈は上気した顔で言った。

姿勢を変え、遼は由奈を後ろから責めている。
由奈も遼も、すでに全裸になっていた。
由奈は、両膝と頭で、体を支えていた。本来であれば四つん這いの姿勢なのだが、未だに両手を背後で戒められているのだ。その銀色の手錠だけが、由奈の身につけている唯一の物であった。
しわくちゃに乱れた服を脱がされている間、この手錠は外されていた。その間も、由奈は何の抵抗もしなかった。
そして、生まれたままの姿になった由奈に、遼は再び手錠をかけたのだ。由奈は、自分から手を後ろに回して、そんな遼に協力した。
今、柔らかい三角形を描く由奈の体は、ひときわ高くお尻を上げている。
白桃を思わせる小ぶりなヒップを抱え込むようにしながら、遼は由奈の陰部を舐めしゃぶっていた。
舌でサーモンピンクのクレヴァスをなぞり、靡肉をかき分けるようにして、尖らせた舌先を侵入させる。さらには、ぱっくりと開いたその部分から覗く肉の襞を唇で咥え、じゅるじゅると音をたてて、その部分から滴る粘液をすすった。
溢れ出た愛液と膣から逆流した精液は、由奈の太腿の内側まで濡らし、ぬらぬらと光っている。
「ああァ……きもちイイ……きもちイイです、ご主人様ァ……」
無理な姿勢でお尻を突き出しながら、由奈は喘ぎ泣くように訴えた。
遼は、そんな由奈の尻肉の形や感触を楽しむように、舌や唇を肌の上に這わせ、ちゅっ、ちゅっと軽いキスを繰り返す。
「んふぅ……ン」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

陶酔しきった声を出す由奈。
そんな由奈の、ひそやかに息づく菊の蕾に、遼は不意にくちづけした。
「ひゃッ！」
由奈が、可愛い悲鳴を上げ、体を小さく跳ねさせる。
「ダ、ダメ……そこは、そこはァ……」
汚い、と言おうとする由奈を黙らせようとするかのように、硬く尖らせた舌で、細かなシワに囲まれた小さな穴を、ぐりぐりとえぐる。
「ひァあああああああああン」
妙な悲鳴をあげながら、由奈がかくかくと脚を震わせる。どうやら、腰から下の力が抜けてしまっているらしい。
遼は、たっぷりと由奈の菊門を責めた後、下の方に口を移した。
そして、由奈の前と後を、交互に口唇愛撫する。
「あァっ、もう、もう……ッ！」
近付いてくる絶頂感に身をおののかせた由奈から、遼は口を離した。
「あァん、や、やめないでェ……」
そう、あられもない声で言いながら、由奈が背後の遼に流し目をよこす。
遼は膝立ちになり、またも勢いを取り戻しているペニスで、由奈のその部分に狙いをつけていた。
「ご、ごしゅじんさまァ、早く、早くくださいィ……」
鼻にかかった甘たるい声で、由奈がおねだりをする。
遼は、わざと焦らすように、由奈の靡肉の入り口に、浅く亀頭を潜り込ませた。
そのまま、ペニスを上下に動かし、くちゅくちゅと音を立てる粘膜を刺激する。
「いやんいやん。ごしゅじんさまァ、早く、早く奥までェ……っ！」
由奈が、もどかしい快感に、体を揺らして訴える。
遼は、ことさらゆっくりと、由奈の膣内へペニスを侵入させていった。
「ああァ……きもちイイ……由奈、う、うれしいです……ッ」
逞しく膨張した牡器官が、背後から自らを犯していく、圧迫感に似た快感に、由奈が高い声をあげる。
ようやく、遼のペニスが、根元まで由奈の内部に収まった。
「くふゥ〜ん」
由奈が、何とも幸せそうな声をあげる。
由奈のアソコはやや上付き気味なので、よほどお尻を高く上げないと、後背位はキツい体位である。しかし、そのキツさそのものまでも、由奈は快感としてとらえているようだった。
遼が、由奈の幼げな腰をつかみ、抽送を始めた。
「あァっ！　あァ、ああァ、ああーッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

硬く反り返ったペニスが、膣内粘膜をこすりながら前後する快感に、由奈が声をあげる。
「あひッ！　イっ！　イイっ！　き、きもちイイですゥ……ッ！」
そんな由奈の嬌声に、ぱァン、ぱァン、ぱァン、ぱァン、という、遼の腰が由奈のヒップをリズミカルに叩く音が混じる。
しばらくして、遼は、自らを射精に追いこもうとする、最初の快感の大波をやりすごすべく、ピストン運動を緩めた。
そして、犬か狼のような荒い息を吐きかけながら、由奈の小さな背中に覆い被さるようにし、背後から乳房をすくいあげる。
重たげに揺れる乳房は砲弾型になり、遼の手からこぼれおちそうなほどだ。
遼は、由奈の双乳を揉みしだきながら、なだらかな曲線を描く背中を舐め上げた。
「んはあああァ〜……ン」
ぞくぞくぞくっ、と体を小刻みに震わせながら、由奈が可愛い泣き声をあげる。
遼はそのまま、肩やうなじに舌を這わせ、髪の毛の匂いをかぐようにする。
そして、遼は、由奈の乳房に指を食い込ませたまま、体を起こした。
「ふあああああッ？」
膝立ちの遼が、同じく膝立ちの姿勢の由奈を、背後から貫く姿勢になる。が、身長差があるために、由奈の膝は、半ばシーツから浮いた状態になる。
「あ、あ、ああああああああァ」
由奈自身の体重が、遼のペニスに深々と貫かれた股間にかかった。
斜め上を向く遼のペニスは、由奈の膣壁の、前の部分を圧迫する形になっている。
遼が、由奈の体を上下させて、抽送を再開する。
「あッ？　ああァ、あイッ！　そ、そこはァ……っ！」
由奈が、うろたえたような声をあげる。
遼の亀頭の裏側が、由奈のＧスポットをとらえたのだ。
「あひッ！　ひあああああああァ！　ダメ、ダメぇ！」
これまでとは別種の快感に、由奈がイヤイヤをする。
「何がダメなんだ？」
遼が、由奈の耳元に口を寄せ、訊いた。
「なんなら、やめてやろうか？」
さらにそう言って、不意に体の動きを止める。
「あァっ！　イジワル、ご主人様のイジワルぅ！」
由奈が、さらに大きく首を振った。そして、もどかしげに、由奈が遼の腕の中で体をゆする。
「やめないで、ソコを……ソコをもっと……！」
由奈が言い終えないうちに、遼は大きく腰を突き上げた。
「んあああああああああああ！」

Yen PDF Driver Trial
www.yen.com.tw

びくッ、と由奈の体が痙攣する。
さらに、遼は大きく由奈の体を上下し、由奈の感じる部分をペニスで激しくこすり上げた。
「ひあ！　あ、あ、あ、あ、あァ〜ッ！」
由奈の高い悲鳴が、広い寝室中に響く。
「んああ、出ちゃう！　も、もう、漏れちゃう、漏れちゃうよォ〜っ！」
強烈な尿意にも似た快感が、由奈の股間で高まっていく。
「んわぁあああああァッ！」
悲鳴を合図に、ぷしゃあああああ……と音を立てて、由奈の股間から透明な液体がしぶいた。まるで失禁してしまったような勢いで、大量の液がシーツを濡らしていく。
羞恥と快感とに全身を赤く染めて、由奈の小さな体が身悶える。
「由奈……っ！」
潮を吹きながら、びくびくと蠢く由奈の膣の動きに追いこまれ、遼は声をあげた。
「ああッ、ごしゅじんさま！　ください、ごしゅじんさまのミルク、由奈にくださいッ！」
遼の絶頂が近いと見て、由奈が背後に流し目の視線を向けながらおねだりする。
「くゥっ！」
ついに、遼が最後の声をあげた。
びゅゥっ！　と凄まじい勢いで、遼のペニスから白濁液が放たれる。
「ふわァっ！」
その感触に、由奈も絶頂に舞い上げられた。
「あついッ！　ごしゅじんさまのミルク、あついィーッ！」
その熱い精液が下から子宮口に叩きこまれる感触に、由奈は頭の中が真っ白になる。
「あ、あああああァ……んあァ……ふぁ……」
羽毛になって、光に満ちた空に軽々と浮かんでいるような感覚。
（ああ、ステキ……ずっと、ずっと……こうしていたい……）
そのまま、由奈は失神した。

---

由奈が目を覚ますと、すでに手錠は外されていた。
ふわふわの枕に頭を乗せ、ベッドに横たわる由奈を、同じく横になって、立てた前腕で頭を支えている遼が見下ろしている。
「挨拶は、どうした？　由奈」
遼は、かすかに笑みらしきものを浮かべた口で、そう言った。
「あ……」
由奈は、快楽に溺れきった自分を恥じるように、ぽっと赤く頬を染めた。そして、いそ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

いそと正座の姿勢になる。
「ありがとうございました、ご主人様。これからも、このいやらしいメス奴隷を、うンと、可愛がってください……」
　そう言って、深々と頭を下げる。
　頭を上げたとき、由奈はひどく不思議そうな顔をしていた。
「あの……」
　前髪の奥の、表情の読み取りにくい遼の目を、由奈はじっと見つめた。
「あの……もしかして……」
　声を震わせながら、由奈が訊く。
「記憶、戻ったんですか？」
「悪い……そうみたいだ」
　由奈の大きな目が、みるみる涙で濡れていく。
「ホ、ホントに……ホントに？」
「ああ……」
　遼が、苦い顔でうつむく。
　由奈は、その遼の胸に飛び込むように抱きついた。
「お、おい」
　横たわったまま、ベッドから転げ落ちそうになった遼が、慌てた声をあげる。
「ごしゅじんさま、ごしゅじんさまああああ！」
　由奈は、遼の胸に顔を押し付け、子供のように声をあげて泣いていた。
　遼は、そんな由奈を困ったように見下ろしている。
「由奈……」
　ようやく、由奈の泣き声がやんだのを見計らって、遼が声をかけた。
「ふえっ、えっ……ええっ……えくっ……」
　とても18歳とは思えない、なんとも情けない声でしゃくりあげながら、由奈が涙でぐしゅぐしゅに濡れた顔を遼に向ける。その両腕は、遼を逃すまいとするかのように、その胸にしっかりと回されていた。
「ご……ご主人様、お帰りなさい」
　由奈が、まだちょっと涙声で、それでもにっこりと微笑みながら、そう言う。
「妙な、気分だよ。記憶を取り戻したら、記憶喪失中のことは憶えてないと思ってたけど……違うんだな」
「それは……そうですよね。何も憶えてなくても、ご主人様は、ずっと、ご主人様のままでしたもん」
「そうか？」
「いつもより、ちょっと優しかったけど……」
「ベッドでのコトか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「もう！」
　遼の軽口に、ぷっ、と由奈が頬を膨らます。しかし、すぐ真顔に戻り、そっとつぶやいた。
「やっぱり、ご主人様だ……」
　そして、甘える猫のように、遼の胸に頬ずりする。
「……あのな、由奈」
　そんな由奈に、遼は覚悟を決めたような口調で話しかけた。
「俺……ずっと……言えなかったことが、あったんだ……」
「え……？」
　きょとんとした由奈の顔を、ひどく真剣な表情で遼が見つめている。
「好きだ、由奈」
　数瞬の後、その言葉の意味が脳に届いたとき、由奈はその大きな目を一杯に見開いた。
　お前は自分の妹だ、と告げられても、こんなに驚いた顔はしなかったろう。そんな顔だ。
「好きだ……愛してる。ずっと……言えなかった」
　遼が、かすかに震えているような声で、告白を続ける。
「言えば、お前を失いそうで……。お笑いだな。初心なガキでもあるまいし」
「そんな……だって、だって……」
　由奈が、驚きの表情のまま、言った。
「だって、あたし……胸ばっかりおっきくて、全然かっこよくないし……チビだし、童顔だし、子供みたいだし……泣き虫で、ワガママで……」
「前にも言ったろ。お前は、男にとっては、すごく可愛い顔と体をしてるって」
　くすり、と遼は笑った。
「特に、イクときの顔がな」
「ご主人様のバカぁ！　いじわるッ！」
　かあっ、と顔を赤く染め、由奈が遼の胸に顔を伏せる。そして、その姿勢のまま、小さな声で続ける。
「……あたしの気持ちは、前に、言った通りです……好きです……大好きです……」
「いいのか？　俺は……俺は、記憶を無くす前の俺なんだぞ……由奈のことは、奴隷として愛しているんだし……他の女を調教することだって、やめやしないんだぞ……」
「由奈は、ご主人様の奴隷です……」
　うっとりとした調子でそう言いながら、由奈が遼の胸にくちづけする。
「ずっと、ずっと、由奈をご主人様の奴隷でいさせてください……」
「由奈……」
　それ以上は何も言わず、遼は、強く由奈を抱きしめた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

## エピローグ

　ある、週末の昼下がり。
　チャイムを聞いて、マンションのドアを開けた小夜歌は、ちょっとひるんだ様子だった。
　ドアチェーン越しに、遼が立っている。
　小夜歌は、無言でドアを閉めた。
「……ま、当然かな？」
　遼が苦笑いしていると、かちゃかちゃと小さな金属音が響いた後、ドアが大きく開けられた。どうやら、小夜歌はドアチェーンを外していたらしい。

「記憶、戻ったの？」
「ああ、おかげさまでね」
　やや皮肉げな調子で、遼が、小夜歌の質問に答えた。
　リビングに、遼と小夜歌が、向かい合って座っている。テーブルの上には、湯気を立てるコーヒーカップが二つ、置かれていた。
「別に、あんたの記憶を戻そうとして、あんなことしたんじゃないわ」
「へえ……」
　小夜歌の言葉に、遼は声をあげた。
「じゃ、どういうつもりだったんだ？」
「……」
　遼の問いに、小夜歌は答えられない。
「好きで、したこと、か……」
　なんとなくほろ苦い表情を浮かべながら、遼は天井を仰いだ。
「円だったら、みんなで仲良くしたかったから、って言うんだろうな。……あいつ、どこ行ってるんだ？」
「お医者さんのトコ。いろいろ、薬の影響が出ると困るから」
「ああ、村藤センセイのとこか……」
「で、何の用？」
　小夜歌が、堅い声で訊く。
「警戒されてんなあ……当然だけどさ」
　そう言って、遼はコーヒーを一口すすり、続けた。
「誤解を、解いておこうかと思ってな」
「誤解？」
「親父のことさ」
　小夜歌の、綺麗な切れ長の目に、危険な色が浮かぶ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「聞きたくない」
「聞けよ。お前だって、親父の最期を知る権利と義務があるだろ」
「権利と……義務？」
　小夜歌が、不思議そうに聞き返す。
「ああ。ちと、一人で抱え込んでるのは疲れたんだ。……聞いてくれよ、兄妹だろ」
　そんな遼の言葉に、小夜歌は胡散臭げな表情を浮かべる。
　構わず、遼は語り始めた。

---

　その夜。
　結城秋水は、驚愕していた。
　亡霊を見る思いだった。
　ハイヤーの運転手が、遼であることに気付いたのだ。
　どのようにして入れ替わったのか。
　もし、最初から遼が運転していたのだったら、何故、今まで気付かなかったのか。
　すでに、ハイヤーは市街地を抜け、対向車もまれな人気のない山道に入っている。
　秋水の顔に、死相に似た表情が浮かぶ。
　そもそも、このところの秋水の顔色は尋常ではない。それは、愛妻を二度も亡くしたことによるものなのか、それとも、円との――いや、亡き妻との毎晩の荒淫によるものか。
「親父」
　車を運転しながら、遼は後部座席の父親に声をかけた。
　その声にも、ミラーに写る顔にも、表情らしい表情は、ない。
「美由紀さんを、死なせたね」
　淡々と、ただ事実を確認するように、遼が言う。
　秋水は、大きく喘いでいた。このところ、めっきりやつれた頬が、神経質そうにびくびくと震えている。
「そのことは、いいんだ……。いや、よくはないけど、俺が言うべきことじゃない」
　遼の声の調子は、変わらない。
「なぜ……」
　外の雨は、止む様子を見せない。暗い闇の中、ただ、小さな水滴が間断なく落ちつづけている。
「なぜ、小夜歌でなくて、円を選んだんだ？」
　ともすれば、フロントガラスを叩く雨音で聞こえなくなりそうなささやき声で、遼は続けた。
「わざわざ女にしてまで、なんで円を選んだ？　小夜歌が、それをどんなふうに感じると

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

思ったんだ？」
　返事は、ない。
　沈黙の中を、ただワイパーの音だけが、往復する。
　と、突然、秋水は獣のような声をあげた。追い詰められた手負いの動物の声だ。
「ぐッ！」
　遼の首に、後から、何か細い布が巻き付いていた。秋水のネクタイだ。
　凄まじい力で、遼の首にネクタイが食い込む。
　遼は、必死で、ネクタイと首の間に手を差し込んだ。ハイヤーが、狭く曲がりくねった下りの山道を、危険な速度で蛇行する。
「くうっ！」
　遼は、急ブレーキをかけながら、片手でハンドルを切った。今にも車体が崖下に身を躍らせそうになったのだ。
　ハイヤーが、勢いを殺しきれず、大きく後部を振りながらスピンする。
　そして……。

---

「車は、横腹を木の幹にぶつけて、止まった」
　遼は、半ば目を閉じながら、続けた。
「シートベルトのせいかどうか、俺は大した怪我もなかった。しかし……親父にとっては、ドア越しの直撃だった」
「……」
　小夜歌は、先程から、口を挟もうともせず、じっと黙って聞いている。
「それで、俺は親父をほっといて、その場から逃げた。まあ、俺が殺したようなものだが……直接、手を下したわけじゃない。……その後、俺は、あるツテを使って、ことを内々に始末するようにした。もともと、警察の解剖でも、事故死ってことになってはいたんだけどな」
「……」
「話はそれだけだ。円には、お前の方から伝えてくれればいい。別に話さなくてもいいけどな」
「それで……」
　小夜歌は、やっと口を開いた。
「ん？」
「それで……そんな、お節介なこと、あいつに訊いて、どうするつもりだったの？」
「ああ、なんで円を選んだのかってことか」
　遼が、困ったように頭を掻く。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「返答次第では、殺そうと思ってたよ。できたかどうかは分からんがね」
「ふうん……」
　小夜歌は、そう言って、ちょっと笑った。
「やっぱり、お節介」
「そうか？」
　遼も、かすかに、口元に笑みを浮かべる。そして、すっ、と立ちあがった。
「じゃあな。ごちそうさん」
「あ……あの……」
　小夜歌が、帰りかける遼の背中に、声をかける。
「今日は……あたしを、抱いてかないの？」
「さすがに、今日は気分じゃないからな」
　くくっ、と遼は、笑い声をもらす。
「また、改めてな、小夜歌」
「うん……お兄ちゃん」
　妙にしおらしい声で、小夜歌が言う。
「いつも、そんな風に素直だといいんだけどなあ」
「そうはいきませんよー、だ」
　何か吹っ切れたような口調でそう言った後、小夜歌はおずおずと続けた。
「あ、あの……由奈さんに、あたしが謝ってたって、伝えてくれる？」
「ああ」
　そう言って、遼はマンションを出た。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw